

501
75

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹/_m 1 2 3 4 5

始



劇 會 社

家く行ひ滅

作 蘭 紫 月 若



INSPIRATION

社 光 極

501-75

若月紫蘭作
滅び行く家

大名の戀
勝利者

極光社出版

大正
10年2月3日
發行



此書を私の最も尊敬する
新劇開拓者の一人なる

東儀鐵笛氏

にさゝぐ

自序

たしかまだ私が十三四歳の頃であつたと思ふ。私は其當時まだ小學校の教師であつた私の叔父にきいたことがある。「私はこれから學者にならうか變つたものにならうか」云。其時叔父は私に答へていつた。「それは學者の方がいい、學者になるがいい」云。けれども私は其後いろ／＼考へて、學者になるよりもさうかして變つたものになりたいと思つた。變つたものといふのは、他の多くの人々の眞似をしないものになりたいといふことであつた。云ひかへるに獨創的な頭の人となつて、獨自の立場をつくり上げたいといふことであつた。

その後の私の有ゆる行動は、私の凡ての交友のそれと著しく異つてゐた。私は有ゆる場合に附和雷同の態度をきらつた。多くを願ふ暇のない場合は兎に角に、多少の考慮を要するやうな事物に逢着するごとに、私の態度は、決して他人の後を追はうとしなかつた。人々の多くは私を變人と呼んだ。父も母も屢私を見るに驚の眼を見はつた。私のこれまでの態度は單に物質的方面から見る時は、決して他の多くの交友のそれとそれほ異つては居なかつた。けれども一步を進めて

精神的方面から見るとは、私の進路は交友乃至世の中の多くの人々のそれとは天と地との差があった。私の眼は子供の時から、たえず精神的方面に向けられることが多く、物の考へ方が悉く真理へ眞理へ向つて居たからである。かうして私の心が最も強烈に要求しつづけたものは因襲道徳の根本的改造、形式的習俗の打破、虚偽、偽善の極端なる呪咀であつた。純眞なる眞理の探求、自己の完全なる確立、絶対獨立の尊重、極度の自由解放、公明なる正義の主張は、常に私の標語であつた。私は殆んど生れながらの懷疑家であり、偶像破壊者であり、いろいろの意味に於ての反逆者であつた。私は眞面目に此立場に立つて常に父母と議論もし、交友と議論もし、斷乎として其所信を曲ぐるこゝがなかつた。かくして私は或時は不平家といはれ或時は破壊者と呼ばれ、或時はまたすねもの、嘲られ、時ありてはまた極端なる理想家と呼ばれ來つた。そして何が故に世の人々が、常に曖昧な妥協によりてのみ生きんごしつゝあるかを私は怪まないではならなかつた。と同時に自分の周囲が漸く擴大し生命力が次第に進展し、従つて思索の力が深くなり觀照の眼が擴まるにつれて、さまざまの不正や不義不徳やさまざまの罪惡が甚だ多くの場合に於て、私の求めて止まざるものを盛に壓迫し虐待して常に勝利を占めつゝあるを見て、憤激し怨嗟し失望し落膽し、現實の世界に對する疑惑の果は極度の厭世觀に襲はれて、私は幾度か自殺

を企てようとしたこゝさへあつた。

此時に方りて、私を此厭世のどん底から救ひ上げ、自殺の絶壁から導びき去つたものは實に故ラフカチオ・ヘルン氏によりて説かれた「ジョージ・メレヂス」の樂天的哲學であつた。力は善である！ 此思想は翻然として私を大悟せしめ、私を光明の世界に突進せしめるこゝになつた、力は宗教である！ 此が私の新なる人生觀になつた。

元來が科學に興味を有しつゝあつた私の頭腦は、甚しく物質文明の影響を受けて盛に展開をつづけた。私の小さな理想主義は再び現實の世界に向けられた。私は力を神と信じ自分を自らの神と信じて、自らの運命を開拓すべく再び現實の改造に向つて突撃した。

此際に於て、忽然として私の生活に一大鐵槌を加へたものは、丁度十三になつた、只一人しかなかつた、私達の男の子が僅に一日の間に現實の世界から姿を消したといふこゝであつた。私は自分の生命も、自分の未來も一切の生活をも見事にもぎさられたやうな氣がした。私の魂は數年の間極度の煩悶をつづけた。私は極端なる精神主義者になつた。徹底的な理想主義者になつた。妥協は私にこつて最も醜惡なる罪惡になつた。虚偽、偽善、無智、無理解、無自由は最も呪ふべき敵になつた。と同時に人生の凡てを解決し、神聖化する人生の最大最高の眞實である死を通

じて考へる時に、自分はさまざまのこま／＼した事にのみかゝつらうてゐることは出来ないといふことを知つた、此までやり來つたことを、出来るだけ徹底的に果さねばならぬといふことを思つた。今まで愛するといふことを器械的に實行しつゝあつた自分は、自覺的に積極的に一切に向つて愛の心を溢らし、之を實行によつてしみ／＼楽しむことが出来るやうになつた。私は大きくなつた、廣くなつた、深くなり力強くなつた。そして力の宗教によつていよ／＼自らを強め、益々眞理を探求しつゝ、明智を追うて、限りなく自由に、無邊の抱擁力を擴けてもつ／＼積極的に一切を愛し、全人類をして各自我の完成を遂げしめ、最高の精神的物質的乃至文化的進展を極度にまで遂げしむることに向つて努力せねばならぬ。そしてそこに理想的な文化的な、一大現實帝國を創りあげしむることに全力を注がなければならぬと考へた。かう思ふに微力な自分もさすがにほんやり／＼しては居られなくなつた。

その中にいたましい世界の大戦は終りを告げて、人類の世界には再び精神文明の赫々たる光明が輝き出した。有ゆる方面には改造の叫が喧しくなつて、私は自分が幼時から要求して止まなかつた理想の世界が、始めて現出するに非ずやとさへ思ひ出した。私は自分の世界が漸く現出しかけたやうな氣がした。

けれども今日の改造の叫や解放の聲は、私から見ればまだ眞の自覺から生れた眞眞な眞物であるとは思へない。私はもつ／＼心を大きくし第三の眼を開き全力を盡して人類の爲に花々しく大に戦ひ、因襲と妥協と形式とによりてでつちあけられた今日の人間の世界を、もつ／＼聖く大きく深く廣く力強く覺めしめることによつて造り直さなければならぬ。かう思ふに、私は再び力強くペンを握つて立つたのであつて、今後一切の力をあけて、自ら獨自の世界を創造することに心を委ねようとするは之が爲めなのである。

二

「滅び行く家」は私の第一創作集であつて、此書に收めた「勝利者」が、今年五月「早稲田文學」によつて一旦公にされた外は、凡てまだ世に問ふたことのない生のものである。就中「滅び行く家」は六年前に書き上げて久しく筐底にしまつて置いたのを、筆を加へたに過ぎないものであるから、凡ての點に意に充たざる所が甚だ多いものである。

私は「滅び行く家」に於て、先づ農村第一の問題であり、また我が國に於ける來るべき重大なる社會問題の一つである地主と小作人との關係にも觸れようとした。即今の地主の小作人に對す

る態度や、小作人の地主に對する態度が如何なる状況にあるかを見、引いては富豪が貧民を見るに如何なる眼を以てしようとしてゐるかも描かうを試みた。第二には今の我國の結婚の多くが、如何に政略的のものであり、それによつて殊に今日の女子の生命乃至自由意志が如何に蹂躪されつゝあるか、女子が人として如何に悲惨なる地位に置かれて居るかを描かんとし、更に進んでは、滅茶苦茶に家のみ考へやうとするこゝによりて、個人の生命力や自由や意志や感情や、人情や、有ゆるものが如何に迫害されんこゝしつゝあるかを寫さうを試みた。けれども此間にありて、私の觸れようとした諸相の中には、前科者に對する一般社會の態度や、情死問題や、選挙問題や、慈善や公共の問題や、現代人の友情や、田園の風教や、蓄妾の弊風や、女性の純潔や、無自覺なる自由結婚や、學問の目的や、飲酒の弊害や、所謂愚夫愚婦の信仰等のさまざまの問題があるのである。此劇の主人公は、世間知らずの、因襲的生活から一步も出づるこゝの出來ない、而も意思の強い、無自覺な、利己主義物質主義の富豪であつて、此一個の太陽を中心として、意志の薄弱な、純潔な、美しい可憐の少女きよ子や、眞に目覺めたる精神主義理想主義の長男や、デカダンの傾向の次男や、快活にして無邪氣一遍なるはな子や、肉慾の權化も見るべき富豪や、その他田園の地主に關係ある様々の人物が、一個の太陽系統内の惑星の如く廻轉してゐる中に、さまざまの

錯綜せる事件が現はれて、その結果やがて主人公が如何に憐むべき破滅を招くに至り、人間の物質的安住の場所たる「家」が如何にいたましく滅び行くか、それ等の悲痛なる状況を描かうとしたものが此劇で、結局來るべき新なる世界に於ては、單なる物質主義利己主義因襲主義の遂に破滅すべきこゝを暗示しようとしたものである。

第二の「大名の戀」は俗諺に有名な「様寝ようか五千石ころか、何の五千石様寝る」の心持を描いて見ようとして筆を起したもので、大名を松平忠直としたのは寧ろ偶然のこゝであるこゝいつた方がいゝ。

それはかういふ譯である。私が此劇を書いて半ば位進んだ時、私は嘗て「兩越大評定」といふ新聞講談で、松平忠直が許婚の約ある女を強奪して來たが爲に、その盛に亂行を行つてゐる最中許婚の男や娘の一家は之を取り返へさうとして甚だ苦心したといふ話を讀んだ事を思ひ出した。私は即自分が描きかけてゐたものゝ構想をひびく類似してゐるので、試に忠直に關係ある人物の名をあてはめて見ただけである。私は最初から忠直その人を描かうとしたのではない。只愛せんとして愛する能はざるものゝ悲哀を、愛するものを愛するこゝが出来ないで、愛せざるものに愛せられんこゝするものゝ悲哀を、愛するものを眞に愛するこゝ能はざる地位に置かれたものゝ悲哀

ミを描かうとしたに止まるのである。従つて史實の如きは私は問ふ所ではない。私は劇によつて歴史を書かうとするに非ずして、私の藝術を歴史上の人物の名を借りて産み出さうとしたに止るからである。それは兎に角此劇がワイルドの「サロメ」から多大の影響を受けてゐることは誰にも分るこゝと思ふ。

それから第三の「勝利者」は、只一人しかなかつた子供を失つた女——日本の今の時代の女の悲哀がこんなものであるか、中年の女の心理狀が如何に嫉妬的になり勝ちであるかを描かうとしたものである。さるにても此劇が「早稻田文學」に現はれた際に、之を批評して下さつた方々の此劇について認められたねらひもこゝ／＼私のねらつた所は聊かちがつてゐたやうである。それは勿論私の技巧が拙かつた爲でもあらうが、私の考では、眞に大きく深く廣く目覺めた中年の或種の男には、嫉妬といふやうな淺ましい考が起るものではない。また男といふものがこんなものであるかを、相當に知つてしまつた女には、不倫ださされてゐる戀愛の肉的關係なきが容易に起るものではない。世間の人々は、きまつた良人のない女が子供を産んだといへば、直ぐにその女を、廣い意味で愛してゐる人の子であるやうに曲解したがるものである。また普通の女といふ女は多くの場合に殊にさうこゝり易くて、相當に悟つてゐるやうでも、なか／＼嫉妬心が起りが

ちなもので、殊に一人しかない子を失つたやうな女は、絶え切れない淋しさの餘りに、的もない嫉妬を起して、やはり子をもつた女の方が勝利者だと思ひがちで、やがて物狂はしい心にもなるものだといふこゝを描かうとしたものである。従つて此劇は三角關係を描かうとしたものでもなければ、看護婦長が産んだ子といふものは、決して病院長の子でもなければ病院長と婦長との間には、何の關係もないのである。雜誌で讀まれて色々な解釋をつけられた方は、私がかういふ考で描いたものだとは思はれなかつたかもしれないが、私の考が充分に現れて居ないと思すれば、それは私の力は不充分である爲であるかも知れない。由來此劇をも少し誤解されぬやうなものとする爲には、もつと緊縮するゝ、二場にでも書いた方が得策であつたかも知れない。兎に角私のねらつた所が、可成に誤解されてゐたやうだから少しく説明を加へて置くこゝにした。

何れにしても、作者のねらいが批評家に誤解され、又は充分に解せられない位、ありがたくないいこゝはないと思ふ。今後私は凡ての作に對して、それ／＼の説明を加へて置く必要があるやうな氣がする。

三

私はまた私の此小さな努力の第一歩に對して、批評を書いて下すつた新劇開拓者の一人であり最高權威の一人である東儀鐵笛氏に、先輩中村吉藏氏にの好意に對して、こゝに特筆して謹んで感謝の意を表しなければならぬ。

私が此二人の方に批評を書いて頂いたのは、決して尋常一様の下賤なる意志から出たのではない。東儀鐵笛先氏には特に「大名の戀」を實演上から、中村氏には「滅び行く家」に「大名の戀」を藝術上から、極めて嚴肅な立場に立つて、批評して鞭撻を加へて頂きたいと願つたそれがやがて私の前途に利する所甚だ多いこゝミ思ふからである。そして自分の第一歩に對する紀念として載せたのである。

一九二一年五月二十五日

紫 蘭

「大名の戀」について

畏友若月紫蘭君が、多年我が新劇界のため、批評に創作に、盡瘁されつゝある事は、私の常に敬服して居るこゝろであります。頃日新作三篇を上梓されるに當つて、「大名の戀」の一曲を示されて實演上の批評を求められました。

一讀まづその詞白の流麗にして、その着想の高雅であるのに快感を覚えました。而もその形式の嶄新である事、その内容の古典的である事は、恰も資材を古代に採つて、現代化された泰西劇に接するの思ひが浮びました。

それにしても憾らくは、曲中の女主人公「若葉」を作者の要求通りに、完全に演出し得る女優を、新劇界に物色するに當つて、いかにも我新劇界の現状を悲ますには居られません。私は一日も早くこの悲境を救ふて、機運を刷新するの時機を得て、此曲の上演される事の近からんこゝミを切望して止まぬのであります。

大正十年五月下院

東儀鐵笛識す

大名の戀について

一一

「滅び行く家」について

若月さま

戯曲「滅び行く家」を匆卒の間に通讀しました、もつこ精讀せなければ苟も批評めいた事を云ふのは差控へるべきだとは思ひますが、讀過した際のザツとした感想を申送る事にしますから、左様御諒恕を希ひます

「滅び行く家」は、相當に面白い所があると思ひました、一體面白いといふのは可也漠然とした用語を聞えませうが、少くも讀んでムヤミに怠屈させるものではないといふ意味に解釋して下さつたら大した間違はないかと思ひます、尤も始めから終まで、一貫してグン／＼引張られる程の興味を持続したことは申ません、處々、ダレ場もあつたやうです、だが第一幕の一場、二場あたりは美しく描けてゐる、感じました、若しこの調子で全幕が貫けたら一個の立派な作者だと思ひました——これは少し失敬な、若くは潜越な申分かも知れませんが——

序幕の美しく描けてゐる割分に、二幕、三幕は、強度、深度が次第に進加して行つて居ないのが惜しい事でした、一步一步山の頂上へ昇つてゆくか、若くは深淵へ下つてゆくかといふ感じがしないで、寧ろ平野を旅行する氣持がしました、イヤ平野といふのは少し誇張した川語ですが、少

くも傾斜がゆる過ぎることは思ひました、勿論、作劇の様式にもいろいろの種類があり得るから一概には云へませんが、自分の興味から云つて、感情や表現や性格描寫や、雰圍氣の描出の、傾斜角度が、ゆる過ぎるやうに感じました。

全曲の中で、最も優れてゐるのは、田園の風物描寫の場景でせう、活々々現されてゐる箇所が少くありません、なか／＼の感興を以て讀みました、それから、人性に對する觀察の鋭い閃めきがあちこちに散見することも默過してはゐられぬものがあります、それ等は慥かに此作の長所だと思ひますが、性格全幕の描寫は、まだ充分に到つてゐないものがあるやうです、地主兵藏なこともつこ何うかしたら、非常に面白い性格になるらしいのに、血の通はせ方が足りない憾があります、しますまいか？ 新一や、清二や、きよ子なごも、一面からのみ見過ぎてはありますまいか？ 換言すれば、もつこ立体的に、描き出される工夫が足りなかつたかと思はれます、これが此作の可也大きな短所ではあるまいか、考へて居ります、そしてこの短所が、やがてこの戯曲の、強度、深度の遞加を防礙してゐる有力な素因ではないかと思ひます

併し、性格の立体的描寫といふ事は、言や易く、行は難く、こゝに作者の一生の若行地であること云つても大過ないかも知れません、他を責めるのは、やがて自らをも責める所以だ、御諒察を

希ひます

尙「大名の戀」は、モチーフを「サロメ」に取られたのが、作の獨自性を傷けてゐるやうに思ひます。修辭はなかく美しい、そして殺助の陶酔を強ゆる詩的の章句もあると思ひますが、小生には「滅び行く家」の方がすつこ、興味がありました。この方面に一層、奮進せられた方が、やがて貴方の堅い立脚地を築かれる所ではないか考へます

感想か混線して、いつの間にか批評めいた事を云つたやうですが、小生の讀過の際に浮んだ感じをそのまま書附けたものには相違ないから、何卒、そのおつもりで、讀んで戴きたい

妄評多罪

五月末日

中村吉藏

目次

自序

滅び行く家 (三幕五場)……………一

大名の戀 (一幕)……………一二三

勝利者 (一幕)……………一五三

滅び行く家

(三幕五場)

藤井兵藏の家族

人物

藤井兵藏	地主	五十八歳
たみ子	兵藏の妻	五十歳
新一	長男	二十七歳
清二	次男	二十二歳
はな子	長女	十七歳
大三	三男	九歳
きよ子	たみ子の姪 養女	二十歳
荒井一郎	豪農	六十二歳
村田道介	出入の周旋家	五十二三歳
戸村善吉	駐在巡查	
房吉	出入人、佐七の子	
十吉	下男	
お梅	下女	

藤井兵藏の家

三田元吉 村會議員

大村良平 村會議員

新聞配達

信用組合の小使

佐七 百姓

虎吉 百姓

良介 虎吉の子

其他 村の者男女大勢

時 現代、十一月末から十二月頃

所 中國西部の一農村

第一幕

第一場

舞臺は藤井家の外庭。正面左は玄關、右は納屋入口にて、其中間の境目に、一寸したばらなどの生垣あり其處に一本の大きなむくろじの樹がある。玄關の左側に面光に近く密柑の樹あり、それが少からず、南國的の氣分を添へる。舞臺の右側は土藏にて、其前面光に近く、屋根の車井戸がある。土藏の前側、井戸の横に物干場がある。程よき所に古椅子腰掛など。凡て今では殆んど小作もせぬ富裕なる農家を偲はしめる。

時は凡十一月の下旬午前の午に近い頃。人物の白は雜種的なれども、中國西部の一地方に於ける表白を基調とする。人物の中最も此地方的言語を使用するは、主人の外には、此家の使用人や農民位にて、其他は多少の變化を受け、殊に長男及次男の言語は勿論、娘二人の言葉は殆んど東京化したものと見た方がいゝ。幕あくと、百姓佐七は藤井家の下男十吉と共に、天秤で米俵の一方をかけてゐる。次男清二がそれを検査してゐる。

清二は學問に不熱心で、家の手傳をしてゐる中に、精米機で負傷して跛足になつてゐる。兄が新しい理

想家であるに反して、清二はデカダンの氣實に富んでゐる。

清二 駄目だ、く、十六貫なんてありやせんぞ。

佐七 (不審さうに) はてな、十六貫切れますかい。

清二 切れるぞ、三百許り。

佐七 へえ、平山ぢや、十六貫うんこはねましたが、さういふもんで御座んせう。

十吉 米のゑゝ割にしちや、をかしいこつちやのん。

清二 然し四俵ごも目方が大方同じのを見るこ、榊があんまりゑゝ方ぢやないんだな。

佐七 榊のこごは、そりや、はあ、請合ませあ。

清二 米がゑゝから、まあ我慢しごくか。

佐七 はい、さうぞまあ。

十吉 ぢや、先の上へ積んごきませうか。

清二 あゝ、それでゑゝだろ。

佐七 (十吉に) さうか一つ、お頼み申ます。

(佐七と十吉、よいしょく、米俵をさけて、土蔵に出つ入りつする。其間清二は、少し離れて

置かれた古い脇椅子の上に腰をこつほりはめこんで、日向ほつこをしてゐる)。

清二 (袂から紙巻煙草を出してふかしなからむくろじの樹を見て) 考へて見るこ、あの樹は大きくなつたものだな、小さい樹をお前の處から貰つて来て植ゑさいたのだが。

佐七 (土蔵から出て来て) まるで一尺ばかりきや御座りませんかつたがのん。

清二 さうだ(此時二人は又、土蔵に入る) あんな風に、時は凡てのものを變化して行くのだな(背を延し、眼をつぶつて、欠伸をした後) あゝ暖い、いゝ氣持だ。

はな子 (納屋の口から出て来て、寢かけてゐる兄を見るなり、忍び足で近づき) 耳さん!

清二 (驚いて眼を開いて) おい、びつくりするぢやないか。花ちゃん、覚えておいで、

はな子 弱蟲ね、兄さん、あれ位のこごで、そんなにびつくりならなさるの。

清二 誰だつて、だしぬけにされちや、びつくりするさ。ぢや、花ちゃんだつたら、しないんだね。

はな子 そりやしますわ。あたしは女ですもの。

清二 (笑ひながら) ハハ、花ちゃんは只のお茶つびいかご思つたら、矢張り可愛いゝ所があるね。

はな子 さう、だつて兄さんぢや、幾ら可愛がられたつてつまらないわ。

清二 おい、凄いなをいふのう、はなちゃんは。
はな子 (佐七と十吉が最後に土蔵から出て来るのを見るなり) 佐七さん、はいつて、一杯飲んで
二行きなさい。

佐七 (手拭で埃をはたきながら) 難有う御座んす。お嬢様、今日は學校は日曜で御座んすか。(此
後清二はまた暫く轉寢をしてゐる)

はな子 日曜は明日よ、今日はお前旗日ぢやないか、お前にや旗が見へないのかえ?

佐七 成程……さうも此お嬢様にやかなはんでや。ハハ……(煙管を出して煙草を吹ふ)

十吉 (邊りを片づけながら) きい様はまるで反對ぢやからの。

佐七 お嬢様は、此春から大變おふさりになりましたの。

十吉 もう満開ぢやからのん。

はな子 (いゝよ、お前達は、そんなに人の悪口ばかりいふて、覺えておいで。

佐七 (きせるをはいたい) や、大變く(立つて)きれ、一杯御馳走になつて来るかな(退場)

二 (裏の藪で目白が鳴く)

十吉 はあ様、秤へかけてあけませうか。

はな子 いやだ、秤なんか。それより目白をさしてお呉れよ。ね、十吉、お前、此間から捕つてあ

けます、上げますさいふて、まだ捕つて呉れないぢやないの、嘘つきね、十吉は。

十吉 それでも、女が目白を飼ふなんて、可笑しいぢやありませんか。

はな子 馬鹿だね、十吉、女が小鳥を飼ふこそ可愛いぢやないか、捕つてお呉れよ。さ、今捕つて

お呉れ。

十吉 此處を片附けてから、屹度捕つてあけます。

はな子 今日嘘をついたらひきいよ(退場)

下女 (納屋口から一寸のぞいて) 十吉さん、一寸橙を一つもいでお呉れでないか。

十吉 お梅さん、自分でもぎに行つたら、えいぢやないか。

下女 さういはんこ、後生だから(掌を合せる)、手が届かんけえ。

十吉 仕方はない、惚れた弱味に、もいで来てやろか(退場)

下女 (笑ひながら) 馬鹿な人!(十吉を見送つて、やがて退場)

二 (新聞配達登場、彼は玄關口の方へ行きかけるが、清二の居るのを見つける。わざと清二
の前に立つて、彼が居眠りのまねをする。)

新聞配達 (やがて聲をはりあけて) 新聞!

清二 (驚いて) 何だ、貴様か、折角いゝ氣持で夢を見てゐたに。

新聞配達 夢なんざ見るよりや、眠氣さましに、新聞でも見た方が、され丈け面白いか、心中が有りまつせ心中が。

清二 (新聞を受取つて開きながら) 誰が心中をしたい。成程、河内屋の娘が心中したか……可哀さうなことをしたな。

新聞配達 全く惜しいもので御座んすの、あの別品を死なして。

清二 生意氣をいふな。

新聞配達 いや失敬 (ふざけた身振で退場)

(きよ子洗濯物の水すゝぎをしに来る)

清二 きよさんく、河内屋の娘が心中したんだつて。

きよ子 へえ、誰さです。

清二 何だか、新聞にや、自分の家の番頭ださ書いてあるがね。

きよ子 ちや、吃度父親でも反對したんでせうね。

清二 新聞にもそんなことが書いてある。(丁度橙をもちで歸つて来る十吉を呼止めて) 十吉、河内屋の娘が心中したさ。

十吉 はあん、そりやまあ、勿體ないことをしましたの、こつちに云へば何さかしてやったに。

清二 さころが、さうは問屋で卸さんからね。

十吉 ヘッへ、(頭をかきつゝ去る)

きよ子 可哀想に、死ぬゝ覺悟するまでには、嚙、色んな辛い想をしたんでせうね。

清二 けれど、親が許さなければ、死んで添ひ逢けようさいふ心持は、せへて見るさ、しほらしい貴いものだね。僕は人間は何時までさうありたいと思ふね。それや、求めて死ぬるさいふことは、人間としては勿論善いことぢやないし、子さしても不都合にや相違ないが、男さ女さが一旦手を握り合つたからには、そんな故障が湧いて来ようが、そんなものは悉り愛の焔で烟にしてしまつて、永久に手を引き合つて、同じ路を同じ方向に向つて、歩いて行きたいものだと思ふね。全く考へて見るさ、心中する人の心持は美しいものだ。一體心中する時の心持つてみんなものだらうな。

きよ子 (何だか暗い心持になつて) ぎんなにか悲しいものでせうね(間)まるで二つの石鹼珠が、ふ

わり／＼浮き上つてゐる中に、バツミ消えるやうなものですわね。

清二 でも消えた石鹼珠はそれで仕方はないにしても、自分達故に消えたかと思や、親の身になつて見るに、餘り寤覺がよくはあるまいな。

きよ子 全くいやなものでせうね。

清二 世の中には其後悔が始めから分り切つてゐるくせに、家名だも身分だもか、下らない瘦我慢や虚榮心に囚はれて、子供のこころなき何も考へないで、強ひて自分の意地ばかり通さうとして、結局火のついた石油に水をかけるやうな事をする親が澤山あるが、人間さういふものは妙なものだ。

きよ子 (立つて行つて洗濯物を竿に通しながら) でも親の身になつて見りや、又子の爲を思ふからこのこでせうね。

清二 さういふので、一圖に思ひこんで死ぬんだね。然し僕なんかから考へるに、何も死ななくても、何さか方法がありさうに思ふがね。

きよ子 さうして男の方は、皆さう頼りないのでせうね。

清二 然し人間は結局本當に生きるのが目的だからね。心中するものだつて、本當に生き甲斐のある生き方をしようとするからのこころぢやないか。僕なんかはそれをよく心得てゐるから、一方の路がいけなければ、何さか他の路を見つけようとして、色々工夫するね。

きよ子 矢張りするんですね、浮氣なんです。

清二 さうぢやない、つまり普通の女のやうに單純でない丈けさ。一體男さういふものは、女よりか理性がよけいに働くから、急がないんだね。

きよ子 でも女は一旦思ひつめるに、そんなのんきなこころを考へちや居られませんからね。(竿をかけたけようとして) やつこころらせ(届かぬ)

清二 (近づいて) 僕がかけてあげよう(かける)

きよ子 さうも……

清二 (側に立つて、着物の皺なきをのしてゐるきよ子をつく／＼見てゐるが、感情が發作的に興奮して、堪らなくなつて) きいちゃん！(飛びついて接吻せんとする)

きよ子 いけません／＼、人が見たら大變ぢやありませんか。(避ける)

清二 何かまふものか(強ひてやらうとする時、誰かの足音がするのでやめる。)

十吉 (納屋から出て来て) 今日の本當にゑゝ天氣で御ざんす。

清二 (腰かけて煙草をすふ) 精米所へゆくのか。

十吉 (桶をさけて出てゆきながら) はあ(去る)

きよ子 あの大きい兄さんは何時お歸りなんですの。

清二 何時か知らぬ。今日にでも歸るかも知れない、兄さんは何時だつて歸るのを知らせたことは
ないからな。

きよ子 私しお兄さんが歸つていらしたら困りますわ、さうしませうね。

清二 困るつて、何もきいちやん、今迄兄さんご約束したごとはないさいつたぢやないの。

きよ子 ゑゝ、それはありませんけ、叔母さんがよく色んなごこをいふてらしたから。

清二 お母さんがかえ、お母さんが何といつたつて、それはきいちやんに丈けいつたごこだし、そ
れにお父さんはさう思つてゐるかさうか。兄さんだつて、もう三年も歸つて來なかつたんだも
のな。

きよ子 でもお兄さんは、随分私しを可愛がつてゐて下さつたのだから、さうか思つてらしたのぢ
やないかと思ひますの。さう思ふご、私し今度さういふ今度、本當にお兄さんが歸つてらしやる

のが恐くてならないんですもの。

清二 何恐いごこなごあるもんか、知らん顔をして居ればゑゝぢやないか。

きよ子 だつてさうは行きませんわ。

清二 心配しなくつたつて大丈夫さ、それにさうせ分るなら、早く分つた方がゑゝかも知れない。
さうすりや兄さんだつて

きよ子 わたし本當に、困つてしまふわ、(沈んで來る) さうしたらゑゝでせうね。皆あなたが悪
いんですよ、こんなごこになつてしまつたのは。あなたがあんなひさいごこをなさるんですも
の——本當にわたし何だかお兄さんにすまんやうな氣がして。

清二 兄さんが本當に心からきいちやんを思つてさうすりや、それやすまないけれご——それに
したつて、今更さうにも仕方はないぢやないか。僕一層お母さんに今の中云ふてしまはうか。

きよ子 いやですわ、そんなごこをいつて、それこそ、私し死んでしまひますわ、それに、そんな
ごこをするほごなら、私しこんな心配なんかしませんわ。

清二 ぢや、さうしようさういふのだね。きよさんは。

きよ子 私しにも分りませんわ。…それにあれだつて、私し心配になつてしようがありませんの。

清二 あれつて、あの信用組合のお金のこじりか？

きよ子 ゑゝ、捨てた時に、すぐご叔母さんにお話しすればようござんしたにね、さうせ今に分るでせうが、分つたら私はさうなるでせう、考へるご私し本當に悲しくなりますわ(かける)

清二 あれなら僕が今にさうかするから、心配しなくつたつてゑゝさいつてるぢやないか。

きよ子 あの時、あなたがさう仰有るものだから、たうくこんな心配をしなきやならんこじりなつたのですけさ。

清二 まあさう心配せんでおいでよ、今に何さかなるよ。幾ら心配したつて、物は成るやうにしか成りはせんぢやないか。

きよ子 それやさうでせうけさ……その内にぎんなこじりが起るかも知れせんからね。

清二 ぎんな事が起つたつて大丈夫さ。

きよ子 あなたは大丈夫くゝさ仰有つても、矢張さうにもならないぢやありませんか……こまつたわね(涙ぐむ)

はな子 (納屋の口から駈けて出て来て) 姉さん、すんだら、お母様が一寸あつしやいつて、(きよ子の泣いてゐるに氣つき)あら、姉さん、また泣いて居るの？

(清二一寸土藏の中へはいつて見る)

きよ子 (きまり悪げに偽つて) いゝゑ、泣いてなんか居やしないこじりよ。

はな子 (のぞくやうにして) だつて……ほうら涙が出てゐるぢやないの……あんな嘘ばかりいつて

姉さんは本當に泣盡ね、さうしてさうなの？

きよ子 (手をこりながら) はなちゃん、いつもく愉快さうね。

はな子 そりや、私しは何も物を考へたりなんかしないからよ。姉さんなんか、色んなこじりを考へて、悲しいご思ふから悲しくなるんぢやないの。

きよ子 さうでせうか、私し本當にはなちゃんか羨ましいわ。

母の聲 (家の中から) はな子や、く。

はな子 はい(駈けて入る)

(きよ子うつむいて考へ込んで居る、裏の方で鶏の鳴き聲、のびやかな氣分漂ふ。きよ子髪をいぢつてゐる、やがて思ひ切つてピンをぬいて梳り出す。清二土藏から出て来る。)

清二 (かけながら髪を垂れたのを見て) 長い毛だな、膝まで位あるだろ。

きよ子 はな子さんのほもつこ長いんですよ。そして両手で握られない位ありますわ。

清二 (髪を手でさはりながら) 抜毛はいやなものだが、かうして見るに實に美しいものだね(臭いで見て) いゝ香だね。僕は女の髪の毛のいゝ香をかぐよ。何とも云へない。何だか酔つたやうな氣持になるんだがね。

きよ子 (さはるにまかせて) くさいでせう、もう随分洗はないんだから。

(又藪で小鳥が鳴いてゐる)

清二 あゝいゝ心持ちだ、かうしてゐるよ、きいちゃんのやさしい心が、髪の毛を傳つて僕の胸へ流れ込んで、體全體が融けてしまひさうだ。

きよ子 (頭をあけてうつこりこして) あたし、またね、あなたがそんなことを云つてらつしやるのを聞いてるよ、何だかほうこして、夢でも見てるやうな。何ともいへない心持になつて、さつからが夢なんだか、さつからさこまでが現だか、全く境がなくなつてしまふやうな氣がするんですよ……さうかと思ふさね、又直にさういふやうな音がして来て、ハツミ眼が覺めて自分一人が谷の底へでも落されるやうな、何だか情けないやうな氣がするんですわ。(髪を結ふ)

清二 夢がさめたら、お互に死んだ時さ。……人間死ぬることなんぞ考へるのは馬鹿けてるね。

きよ子 でもね、夢なら私し早く覺めた方がいゝと思ふわ。夢の中で呪はれてるやうな氣のするのは、そりや恐いものよ。

清二 そりや、きいちゃんの體のせいよ、一つは兄さんが歸つて来るよいふので、下らんことを氣にするからさ。僕はまた反對に、兄さんが歸るよ聞いてから、餘計にきいちゃんが可愛くなつて来た。きいちゃんはそのよはなはなはない?

きよ子 (あまえるやうに) あたしだつて、やつぱり……ですけさね、何だか又お兄さんに、さうしても、すまないやうな氣がして、時々情けなくなるのですわ。(間)さうかして人間はあの小鳥のやうになれないものでせうかね。……(結び終つて恍惚とする)

清二 なれるさ。氣の持方一つで、今でもなれるさ。人間は氣をゆつたりもたんにや駄目だ。つまらんぢやないか、思はんでもいゝことを、くよくよ思つたりしちや、(間、手をこつてなでながら) 美しい手だね。

きよ子 ねえ、あなた。

清二 何?

きよ子 よしませうか、つまらないから。

清二 何だね、云ふて御覽な、ね、きいちやん。

きよ子 (思ひ切つて) ね、あなた、こんなことがあつても私を棄てないでゐて下さいね!

清二 そんなことは分り切つてるぢやないか。

きよ子 いつまでも愛して下さる? 永久に?

清二 あゝ永久に。

きよ子 ほんとうに?

清二 (頗ぶる物足らない軽つぽい調子で) 勿論。

きよ子 私しの身にこんなことが降りかゝつても?

清二 きいちやんの爲なら、何者を敵にしても、争ふよ。きいちやんは僕の命なんだから。僕の力は凡てきいちやんから出て来るんだから、僕は自分の命の爲めに、僕の全身を獻けて戦ふよ。

だからきいちやんも、僕を信じて、何でも僕のいふ通りにしなさいやだよ。

きよ子 えゝしますわ。(うれしさうに無邪氣な顔で、うつむき清二を眺める。)

清二 何さいふ可愛い顔をしてるのだ(引よせて接吻する。沈黙し樂しげな小鳥の囀り音が可成り

長い間の會話をなし、何さもいへない和かい情調が場面に溢れる)

(例の佐七酔つてひよろ／＼出て来る)

清二 (びつくりして) 何だ、畜生。

佐七 (酔ひ切つた口調で) あゝ、酔ふた、／＼。(清二を見て) 何うも大變御馳走になりました。

久し振りで魚を頂戴したので、思はず過しました。はい、さうも大變酔ひました、梅干ばかりなめてるものによ、鯛のなますも怖ろしい珍味で、へっ／＼／＼(のろい口調で云つてやがて歌ひ出す) めでた／＼の若松様よ……(歌ひながら樂しさうに出て行く)。(二人は見送つてる。ご門口の方で俵の音がして、人の聲がする)

清二 あゝ兄さんが歸つたやうだ。

きよ子 そうですね(あはてたやうに、納屋の方へかけ込む)

新一 (青い、病氣らしい顔、にこ／＼しながら登場) 清ちゃんさうだい、

清二 兄さん、御機嫌よう。

新一 お前足を怪我したさかいふ話ぢやつたが、さうした。

清二 たうとうびつこになりました。

新一 精米機でやられたさうだね、あぶないさうぢやつたね。

はな子 (出て来て) まあ、お兄いさん、お歸りなさい。

新一 花ちゃんか、大きくなつたね、立派になつたね。

はな子 (きまり悪さうに) まあ！いやだわ、お兄さん。

(皆立關からはいる。仲夫荷物を運び込む。)

【幕】

第二場

同じ場面、その日の午後。

きよ子は張り物をしてゐる。立關から老人荒井が出て来る。兵藏、たみ子がそれを送つて出る。きよ子はつこして逃げ出すこゝも出來ず、會釋する。

兵藏 きよ子は其處に居つたのか。

老人 (さも好きものらしき様子にて) やあ、きよ子さんですか、暫く見なかつたら、大變大きくなりましたな、(きよ子羞かしい振をする)

たみ子 いえ、なりばかりでまだ何の役にも立ちません。本當にねんねえで御さんして……

老人 いや親がねんねえだと思ふて居る中に、子供いふものは、いつの間にかちゃんご大人になつて居るものぢやて、ハハ、、、然し、何しろ立派なものぢや、まあ、此近邊での、一番の別品ぢやの。

(きよ子羞しげに、いやらしいこいつた風で向ふへむく)

兵藏 いや、ごうも我儘で仕方がありません。

老人 年をこつたものから見れば、若いものは皆我儘なものぢやて。我儘いられる間が、女は花ぢや。すまして來ちやあ、もう駄目ぢや、お腹をふくらす藝當ばかり上手になつての、ハ、、、なう、きよ子さん、若い時は二度はない。散々に我儘を云つて見なさるがえ、。わしは、さういふ人が好きぢや。我儘のいはれる丈けをいふて見るやうな人が面白い。な、きよ子さん、たんに我儘をいふて、叔父さん達をいぢめて見なさるがえ、。ハハ、、、

たみ子 今でさへ大抵で御さんすのに、そんなこゝを仰有られる、。なんで御ざいます……

老人 いや、つけあがるこいふのか。ハハ、、、そこが可愛いこいふのぢや。何しろごうも若い者に限るて。若い者の顔を見て居る、。俺等のやうなものでも、まるで子供になつたやうな氣がする。いや年寄は若い美しい女にいぢめられる程うれしいこゝはないからの。

兵藏 全くです、婆さんの顔を見るよりか、かういふ若いものゝ顔を見て居るこゝ、同じ酒が甘いから不思議です。それに此子は他の子こちがつて、老人にやさしいので……

きよ子 まあ叔父さん、すい分です。ね。

たみ子 (笑ひながら) 本當に私共に親切にして呉れます

老人 それは何より結構なこちや。老人が好きは今時の若いものには珍らしいこちや。可愛い子ぢや、さういふ子は仕合がい。きよ子さん、それぢや、近い中に、皆さんこゝ、是非一度遊びに来て下さい、少し遅いが、まだダリヤがえゝから、一つ見に来て下さい。あんに比べちや、自慢の花も顔色はなからうが、ハハ、

きよ子 (小さい聲で) ありがとうございます。

老人 さうぞ、是非来て下さい。それぢや何です(主人に向つて)あなた方お二人も是非さうぞ。それから、さき程の一件の、期限のこゝも間違はぬやうに、さうかよろしく。(去りかけて又歸つて) 藤井さん序に、あの肥料組合の方の計算もな、さうぞ。

主人 (あれは荒井さん、全體の損を、頭割りで背負ふこゝにしやうぢやありませんか。

老人 いや藤井さん、それや、いかん。あなたが組合長ぢやつたのだから、やつぱり、損の方も餘

計に背負つて貰はにや。それに此間も信用組合の方で、利子を請求しつたから、早く計算をお願いしますぞ。でないこゝ、延びれば延びるほど、利子が嵩むばかりぢやからの。

兵藏 承知しました、それぢや二三日中には是非片をつけるこゝにしませう。

(此時十吉もち竿を持つて通りかゝる)

老人 いや全く別品ぢや、年寄が好きか、ハハ、可愛いく、ハハムム(ぶつゝ云ひながら、ふり返りつゝ退場)

(先程から納屋の陰にかくれて居た、はな下出て来る)

きよ子 いやなお爺さん。人の顔ばかり見ていやになつてしまふ。

はな子 (きよ子に合槌するやうに)。ねえ……本當に助平たらしい顔して、さつきも人ばつかりぢろくゝ見てるのよ。

兵藏 あれが六十二なんて、全く嘘のやうだ、白毛が一本もないから五十位にしが見えやせんのか(退場)

きよ子 まあ、そんなに年寄なのですかね。

十吉 あれで妾が二人居りますからの。それぢやのに、此春婆さんが死んだので、又後釜を貰やる

らしい話がありますがの。

きよ子 何ていやな人でせう。

たみ子 妾めかけいやあ、まだあの熊吉の娘が居るのかえ。

十吉 いやゝゑ、あれは、はあ、さうにお拂箱になつて、甚助さんの二番目の娘に、お雪ゆきいふのが居りましたらう？

はな子 うん／＼、丈の低い小柄な可愛い眼の……

十吉 はあん、あれが此間かゝゑられたたら云ふ話で御座んす。(清子花子驚ろく)それから、もう一人の今市に圍ふてゐるのは、あれは、はあ、大分年で御座んせう。

たみ子 今度のも矢張さこかへ圍うてゐるのかい？

十吉 さころが、今度のは小間使兼たいたらいふ話で御座んす。

きよ子 息子さん、それでよく黙つてるのね。

十吉 それはあんた、息子さは養子ぢやけえ。

たみ子 さうぢやつたの、(間) 十吉、お前一寸、里芋を少し掘つて来てお呉れ。

(きよ子はな子退場)

十吉 澤山入りますか。

たみ子 いや、二株もあつたらよからう。そしてすぐ洗うてお呉れ。

十吉 はい(たみ子退場) やれ／＼又今夜も里芋か、(やがて芋を掘りに行くべく、土蔵の側にて

番ばん熊手をさがす。其中に下女お梅、釜をさけて出て来て、井戸の水を汲んで洗ひ始む)

下女 十吉さ、何處へ行くつての。

十吉 里芋を掘りに行くのぢやが(嘲弄的に)源さんに言傳でもないかの、何なら今夜あたり遊びにおいでさでも云つさこかの。

下女 いやなこぢぢや、誰が源さんなんか用事があるものか。あんな法螺吹は大きらいぢや。

十吉 法螺吹ほらふきいへば、あの出目金さんでめかねさこのお松さんの、あすの晩が嫁入ぢやさうな。

下女 さうへの。

十吉 長さんながさんさうへ。

下女 まあ、本當にの、随分長い間、遣るたらやらんたら、ごたく／＼して居つたが。それぢや出目金さんでめかねさう／＼折れやつたのでのんた。

十吉 何なにいふたつて、子供が出来てしまつちやの、遣つてしまへば圓く治まるが、さもなけや後

の始末が大變ぢやらうて。出目金さもそれや随分頑ぱりやつたさうぢやが、たうく田村の隠居さんが中へ入りやつたので、纏りがついたけな。

下女 そりやお松さん、頭をころがしてをりやるぢやろ。長さんご一所になれなきや、死んでしまふくつて、毎日、駄々をこねてばかり、居りやつたちうからのんた。

十吉 けごその代りに、がつかりする者が方々に出来るぢやらう、お梅さんなんぞもその一人ぢやろ屹度。

下女 冗談ぢやない。あんな氣取屋が何處の世界にあるもんか。色男は私して御座いごいふやうな顔して……

十吉 全く自惚屋ぢやの。

たみ子 (納屋から顔を出して) お前達や何を其處でぐづぐづしてるんぢやね、もう直に暮れるぢやないか、(男に)お前はまだ堀りに行かんのか。(十吉頭をかきつゝさつさつ出てゆく)お梅はまたいつまでお釜を洗ふて居るのかい——そんなにお釜の尻ばかりこすつて居つて、穴でもぬけたらさうするんだい。

下女 それでもよう落ちませんから。

たみ子 あたり前ぢやないか、洗ひ方が悪けりや、何時間洗ふたつて落ちるものか、(下女釜をがちなご音をさせる)それくそんな亂暴なこみをするから、物がだいなしになるんぢや、お前達つたら、何ほいふても、物を大事にせんから、仕方がありやせん。

家の中の聲 梅、々、梅は居らんのか。

お梅 はいく、(釜をさけて中へ這入る)

たみ子 (洗濯物の皺をのびしながら、下女を見送つて獨語) 本當に奉公位するものは、さいつもこいつも皆同じやうな奴ばかりぢや。

虎吉 (息子良介と二人でえいやくこ米をかついで来る、側まで車で來てるるので、間もなく五俵ばかりかつぎ入れる。最初のを倉の前に置くこ手拭をこつて主婦にあいさつをする) 結構なお天氣で御座ります。

たみ子 (應揚に) はあ、え、天氣で御ざんすの。

大三 (出て來て) お母さんく、銀公の處へ遊びに行つてくるで。

たみ子 又出るのか、餘り遅くなつちやいけんよ。

大三 直ぐ歸つて來るから。(飛び出して行きかける)

たみ子 又喧嘩しちやいけんよ。

大三 大丈夫だ。たつた〜〜。 (喇叭の口真似しながら馳けて出てゆく)

(雄鶏又二三回鳴く)

虎吉 (米をかつぎ込み終つて塵をはたいて) 旦那様お出でになりますか。

たみ子 それですんだのですかえ。

虎吉 はい、さうか。

(主婦去る)

良介 (生垣の側の密柑を見ながら) あの密柑は毎年よく生るの。

虎吉 (煙草をすひながら) よく生りやすがるが、さういふものか、此蜜柑は種が多いから駄目ぢや

それに餘りうまうもないし。

良介 密柑は矢張小林さんのが一番えゝの。

虎吉 ありや紀州ぢやないか、えゝ管ぢや (主人の出て来るのを見るに、煙草入を収める) えゝ、結

構なお天氣で御座ります。(極めて改つた物の云ひ振り)

兵藏 さうぢやの……………さうぢやつたい、今年は。

虎吉 はい、えゝ、景狀で見たときには、さうも御座りませんでした、さうも思ふたよりは大變

悪いので、全く當惑いたしました。(頭に手を置いて) 何ほ何でも加調丈け位はあらうと思ひ

ましたが、さて挽いて見るに、加調がきれるには弱りました。やつげり水のきれたせいで御座

りますの、はい。

兵藏 水が切れたさいふたころで、一週間ばかりぢやなかつたか。

虎吉 はい。それでも矢張餘程こたえまして見えて、はい。何しろ、粒がまるで瘦せて居りまし

て……………

兵藏 古地こぢの方は去年よりはえゝこいふぢやないか。

虎吉 水に不自由のなかつた所は大丈夫で御座ります。はい。新開作の方でも水がさうかかうか續

いた處は、平作には行つたさうで御座りますが、丁度私の作つて居る邊からはいけません。何

しろ稻が一度舞うたもので御座りますから、はい。

兵藏 (米をさして見て) 粒はさう不揃でもないやうぢやの。……………それはさうこ (極めて俵を數へ

て見て) 五俵しかないぢやないか、六俵のきまりぢやろ?

虎吉 何しろ、今年のやうなこは、近年ないので御座りますから、はい。さうか、その何んで御

座舞ます。はい……………

兵藏 　また今年もまけて呉れぬのか、お前は毎年、まけてくれぬにきまつてるんぢやな。何ぞか彼ぞか口實をつけちや。

虎吉 　いや、さうも、今年は全く特別で御座ります、はい。何しろ挽いて見るに、全體で加調米が七俵から切れるので御座りますから、さてもやり切れません。これぢや、肥し代どころか、さうにかせんにや、此冬はかつえてしまひます、はい。

兵藏 　そんなことをいふたつて、お前一人にまけてあけようもんなら、他の者が承知しやせんにきまつちよる。

虎吉 　まあさう仰りませす、内證で、私丈けに、さうか一つ、何で御座ります、はい。その代り、來年は屹度うめ合せをいたしますから、はい。

兵藏 　(少しく激しかゝる)これが、一般の凶作ぞか何ぞかいふのなら、そりや又話のしかたもあらうけれど、今までまだ誰だつてまけてやつたものはありやせん。馬鹿なことを云はんで、歸つて直ぐ持つて來るがえ。それでなけりや、約束通りに田を上げてしまふより仕方がない。何もお前に作つて貰はんでも、外に何ほうでも作り人はあるんぢやから。(逃げようとする。新一

通りかゝつて立ぎます)

虎吉 　(追かけて行つて)それはさうかも知れませんけ、はい、さうか、旦那様、まあさう仰りませす、を食にやると思ふて、それぢや二斗丈けでもおまけなされて下されますやうに、さうぞ御願ひいたします。はい。(ベコ／＼頭をさける)

兵藏 　(ふりかへつて)一體お前達は横着ぢや、人が甘い顔をして居りや、何をいふか分りやせん。二斗どころか一合だつてまけられるか。ちゃんこ約束通り持つて來るがえ。いやなら今日限り小作をやめるがえ、馬鹿々々しい。

虎吉 　(哀願するやうに)旦那様、本當に有りさへすりや、何時でも持つて上りますが、はい、家にはもう、しひら米が二三斗残つて居る計りで御座ります、そんなに御無理を仰りませす、さうか助けると思ふて……………(手を合せて拜む)

兵藏 　何ぢや無理を仰有る? 誰が無理を仰有るのぢや。六俵が約束ぢやないか。約束通りぢやんご納めて貰へばこつちは文句はないのぢや。無理をいふは一體何のこゝだ。無禮な。

虎吉 　(小さくなつて)はい。

良介 　(近よつて)さうも恐れ入りました、親父が御無禮を申しましたのは、さうか御免し下されま

せ。けれど本當に来て御覽なされても分りますが、今年は實際無いので御ざりますから、さうか特別の思召で、何でござります。

兵藏 うるさいいふに……

新一 (近づいて)お父さん、まあ、そんなに仰有らんで、たつた二斗のこみならまけたらいまぢやありませんか。

虎吉 (まつてゐたさいふやうに、新一の方へ向いて手を合せて)さうぞお願いいたします、はい。

兵藏 なに、たつた二斗のこみなら、まけてやれつて、たつたこは何だ。一合の米でも坐つて居つちや出来やせんぞ。それに二斗と云やあ、四圓も五圓もするものぢやないか。馬鹿々々しい、さうして只まけられるか。

新一 (虎吉に)あんたの話にや、よく懸値があるさいふぢやないですか。何事も正直にしなくつちやいけないですよ。

虎吉 さう致しまして、決してそねえなこはござりません。それはもう、嘘なごを申しましたら首でも差上げます、はい。

兵藏 さ、それがいかんてや、お前の首を貰つたきて何になるか。

新一 兎に角何ぢやないですか、一應歸つて、持つてこれる丈け持つて來たらいまぢやないですか。もう二斗でも三斗でも。そしてそれからの話にしたらさうです。

虎吉 はい、それぢや、さういたしませう。直ぐに持つて参ります。さ、良介歸つて來う(兩人退場)

兵藏 本當にするい奴ぢや。(後を見送つて居る)

裏の路を通る子供等の聲。

お、お、大きなく大頭、

膏を吸つて血を吸ふて、

皮まで骨までしやぶつて

豚のやうに太つた

お、お、大きなく大頭

ワハ、ハ、ハ、

新一 (暫く子供等の聲に耳を寄せて居たが)お父さん、子供等のあの悪口はさうです。あなたは、あれを聞いて何さもお感じにならないのですか。

兵藏 餓鬼の子等が何だ、畜生。

新一 (眞面目に) さうです、餓鬼の子等の忌はしい呪の歌なのです。私は以前からあの歌を耳にする度に、なさけなくて、身を切られるやうな気がしてならないのです。そして東京へ出てからも毎年秋の収穫期になるに、私は今日のやうな加調米の運び込まれる日のこみを思ひ出しては、萬一のこみでもありはしないか、蔭ながら心配してゐたのです。若しか短氣なものでもゐて、カツミなつて、馬鹿な眞似でもしたら、さうだらうと思つて、始終ビクビクしてゐました。よくまあ、あなたもそれで無事に押通してゐられたものですね。

兵藏 馬鹿な、彼奴等が何をすることをやるのか。只あゝして甘く誤魔化して、三升にでも五升到りでもなりや、それで安心するのさ、(かける)

新一 けれど上げあけてしまや、こんな馬鹿なこみを仕出かさんにも限りませんよ。きつかの歸り路で、闇打を喰つたなんこいふ例は、よくあるこみなんですからね。何しろ汗水たらして働いて、折角作りあげたものは、大方皆地主に取り上げられてしまふ。さうして地主等は年中甘いものを喰ふて、美しいものを着て、遊んでばかり居るに、自分達はいつも、ほろ／＼の着物を着て、まづいものを喰ふて、十年一日の如く、貧乏ばかりして、居なくつちやならんこい

ふのですからね。なさけなくもならうし、腹も立たうぢやありませんか。

兵藏 なあに、彼奴等はあれでえゝのさ。さういふ運命に生みつけられたのぢやから。

新一 あなた方がさういふ考だから、小作人共は自然に反感を起して、地主を呪ふやうになつて、子供等までか面白半分にあんなこみをいふやうになるのです。

兵藏 それに奴等は、先天的に金持こいふものがきらいなのぢや。だからこそ、金が欲しくてならんくせに、金をためるこみが出来んぢやないか。彼奴等はつまり貧乏人種ぢや、種が違ふのぢや。

新一 そんな馬鹿なこみが。あの人たちがだつて矢張人間です。ちゃんこ目鼻もあれば魂もあります。只運が悪くて金をためるこみが懶巧でないばかりなのです。

兵藏 ふん、畜生だつて目鼻はあるさ。

新一 まあ、そんなこみを仰有つて。(間)それやあの連中は貧乏人の情なさで、口が可愛さに、さうしられてもだまつてゐるからいゝものゝ、仮りにあの人達が本當に怒つて、それぢやあなたの田地は作りませんから、さうぞ御勝手におあけなさい云ふて、一人残らず投げ出してしまつたら、あなたはさうなされるのです。

兵藏 ふん、さうしたら田一面に松でも植えてやらあ。

新一 ハハ、、、そんなまけ惜みを仰有つたつて。つまりあの人達が田を作つてくれるから、こつちは遊んで喰べて行けるこいふもので、地主にこつては小作人は立派なお得意様ぢやありませんか。それを、犬畜生のやうに云ふなんて、寧ろ此方からお禮の一つもいふが當前ぢやないでせうか。

兵藏 ぢや、一層のこと賽錢でもあけて、小作人大明神こいつて拜みでもするか。それも面白いかも知れない。ハハ、。

新一 何もさう拜む必要もなければ、お賽錢をあけるにも及びますまい。けれど、もう少し百姓に同情して、心持を掬んでやさしくしてやるやうにしたらごうでせう。そうすりや、あゝいふ悪口を云ふでもなければ、……………

兵藏 やさしくやつて見い、すぐこつけ上つて、人の物を盗んだり誤魔化したり、いつの間にか人を素裸にしてしまふにきまつてるから。

(虎吉親子二人で米をかついでやつて来る)

新一 そんな筈はないでせう。

兵藏 こいつて實際あるから仕方がないぢやないか。

虎吉 それぢや二斗丈け持つて参りましたから、御慈悲で御座ります、さうぞこれ丈けで勘辨しておやりなされて下さりますやうに、はい。(手をこすりながら哀願する)

兵藏 まけてやり出すさきりがなくてや。

虎吉 あなた様の方にや、二斗位あつたつてないつたつて、何でも御座りませんが、私の方にや二斗あるここれ丈け命がのびるか分りません、はい。

兵藏 お前の方の二斗だつて、こつちの二斗だつて、二斗に何の變りがあるか。……………

新一 そんなに云はんでも、此冬をさうして暮さうかこさへいふものを、まけてやるこ一言仰有つたらいゝぢやありませんか。でなきや、來年まで、貸しこくこにしたらいゝでせう。

良介 さうぞ御願ひ致します。お袋は一昨日から熱が出て寝て居りますが、今も歸つて見るこ、うんゝゝ、うなつて居るので御ざります。

新一 (良介に) 醫者にでも見せたのかい。

良介 昨夕十錢の熱さましを買つて來て、一包飲ませましたら、可哀相に、お袋は、ありがたいゝゝ、こいふて、私の腕へまきついて、おんゝ泣き出しました。貧乏人こいふものは情けないもの

でござります。

兵藏 何かいやあ、貧乏々々も、さも人が知つたこゝなんぞのやうにいふが、さういふこゝは皆お前等の平生からの心掛が悪いからのこゝぢやないか。何故虎吉、お前はおれがあれ丈けいふて聞かせてあるに、肥し代でも飲んでしまふたりするのぢや。え？ 肥し代を貸す時に、飲んではいかんどこ、あれ丈け云ふておいたではないか。それも罌でも入れるいふから貸してやつたに、罌は飲んでしまつて、石灰を鼻くそほぎ入れて、ごまかしたではないか。何であんなこゝをしたりするのだ。お前は水がきれたせいにはかりして居るが、ろくな肥しをせんで、出来の悪いのは常り前ぢやないか。毎年く同じやうな泣言ばかりいふて、それだから去年もう田を上げるからこゝいふたではないか。

虎吉 全く今年の處は悪うござりました。來年から屹度かういふこゝは申しませんから、さうか今年は勘辨なされて下されませ……………

(大三、烈しく泣きながら歸つて来る)

新一 (大三をかばひながら) さうしたんだ、おい大三、さうしたんだい。

大三 (泣きながら) 人が遊んで居つたら、三吉が後から來て、竹で頭をぶつた。

虎吉 え、だん様、うちの三吉が、あなたをぶちましたかえ、畜生奴。

大三 おゝ(泣聲)返事交りて悲しげにひゞく)

新一 (大三の頭を見て) さあ、もう泣くんぢやないぞ。

兵藏 親がその通りぢやから、子まで六ぢやないて(虎吉をにらみつける。)舞臺に一種の緊張した氣分漲る。) 速に幕。

第二幕

第一場

精米所の前庭、其處には真中に大きな柿の樹があつて、正面奥の方は蜜柑畑が黄色くなつて、軒近くには石炭殻や空俵が幾つとなく打捨てられてゐる。柿の樹の前の方には腰を掛けるに都合のいい桶、置座と稱する物干兼用の一間幅の腰掛など置かれてゐる。左手の方には大根の乾場が出来て、上の方にはもう大根がかけられて、下の方丈あいてゐる。柿の樹のまたにも大根が處々かけてある。第一幕の一週間ばかり後の午後、暖い小春日和である。

幕があくと、十吉は大根を五六本づつ結へた束を干場にかけてゐる。そこへ主人兵藏が入つて来る。

兵藏 おい、そんなに詰めて干しちや駄目ぢやないか、なして、もうちつと間をすかさんのぢや。

十吉 へえ、まだあけるんで御座んすかい。

兵藏 知れたことぢや、よく乾くやうにしごかんよ、腐つてしようがないぢやないか。それからあ

こで、此俵を入れごかんにやいけんぞ。(精米所の中へ入りかけて、一寸立ちつて) 石炭殻を、かうつらかしちや仕様がないの。

十吉 (一寸手をおいて) 子供等が、軽石をこるごか何ごかいふて、つらかして行つてごうもかうもありません。

兵藏 怒鳴りつけてやれ (精米所の中へ入る)

(村田道助登場。彼はよく此家に入出入する男で五十近い、田舎の人としては分別のありさうな顔をしてゐる。)

道助 や、十吉さん、御精が出ますの(十吉こちらを向いて會釋する) 大將は此方に、おいでぢやろの。

十吉 はあ、中に御出で、御座んす。

兵藏 (明るみで見ると、中から米を一すくひ持つて出て来る。道助を見るなり) やあ。

道助 結構なお天氣で御座んす。

兵藏 さうですのう、これで明日明後日續きや、天満宮は大當りぢやろ。

道助 此模様ぢや大抵請合で御座んせう。……早速ですが藤井さん、明日の晩のこごは大丈夫で

御座んせうの。先方ぢやあもうぢやんこ、何もかも仕度が出来て居るので、間違つたり何かしちや困るから、一つ駄目を押して見て来てくれきて、荒井の大將が仰有るもので御座んすのでの。……………

(十吉やこころせこ桶をかゝえて精米所へ入る)

兵藏 實はあれからまだ話す機会がなうて、是から話さうと思ふこるんぢやが……………

道助 さうで御座んすか、私しや又、あなたがあれ丈け請合はれたんぢやあるし、何こも御挨拶がないから、もうぢやんこ御當人この折合もついて居るこぢやらうと思ふて居りました。それから結納は何んで御座んす、先から使が二度も三度も仕立屋へ催促に行つて、もう今に出来ますから、出来次第直ぐ持つて上る積りで御座んすが。

兵藏 はあ、それや、然し本人のこは、さうせ私の考一つなんぢやから、何も心配はいらんが、出来るこなら、せめてもう二三日――

道助 や、駄目、荒井の大將さいふたら、恐ろしいせつかちで、加之に頑固さきてるから、一旦きめたからには、延ばすなんこいふたつて、兎ても駄目で御座んさあ、その代り、堅いここと云ふたら、あんな堅い人は一寸ありやしませんの。證書でも焼くこいふたら、此方から挨拶

も何もいりやせん。向ふからぢやんこ焼きありますから。まあ、あしたの晩見て御覽じませ。

兵藏 いや、それやもう私しもよく承知はして居るんぢやがの、何しろ餘り急なので、まだ仕度も何も出来て居らんから。

道助 なに、仕度も何もいりやしません、只ほんの體さへ来て貰やえよこいふのぢやから、差支へなけりや、今夜でも今からでもようがんさあ……………何しろ大將ののほせやうたらあんだ、今朝も早くから床屋を呼んで来て、やれ髪をつむの鬚を剃るのつて、大騒ぎの最中に噓が出て、頬が少し切れたこいふので、大將が怒り出しやある、それや滑稽で御座んした。

兵藏 ハハハ、年寄の冷水ぢやない、熱爛云ふこころぢやの。

(駐在巡查房吉をつれて来る、あこから群集ぞろろこ従ふ。家の者、十吉まで出て来る)

戸村巡查 や、失敬ですが一寸お邪魔をします。

兵藏 (不審相に) や、戸村さんか、さあ、さうぞ。

道助 ぢや、私しは之で御免を蒙りませう、さうぞ今のこは其のお積りでよろしく願します。

萬一間違でもするこ大變な打こわしになりますからの。(去る)

兵藏 さ、さうぞ御掛けなさい。

巡查 難有う御座んす。(かける) 實は少しお尋ねしたいことがあつて参つたのですが、え、近頃お宅には蜜柑をお賣りになりましたでせうか。

兵藏 はあ賣るごこは賣りましたが、それやまだ、手つけを取つた丈けで、もぎやせん筈ですが、(十吉をさがして) 十吉まだぢやのう。

十吉 はあ、二三日中にもぐごかいふて居りました。

巡查 (手帳を出して一々書きつける) 所が此國澤房吉——これはお宅の出入ださうですが………

兵藏 さうです。よく出入はして居りますが………

巡查 此房吉が今朝町へキャベツミ蜜柑を賣りに出て居つたのです。所が此數日前から農事試験場のキャベツを頻りに盗むものがあるミ云ふので、私が注意して居りますミ、此房吉が賣つて居たのが、さうもそのキャベツらしいので、檢べて見るミ矢張りさうでした。蜜柑はお宅の品だミ云ひますが、房吉にお賣りになりましたのですか、それミも賣らせにお出しになつたのですか、それが一つ承りたいのですが。………

群集 (顔を見合せて) 房さんが泥棒をしたんだつて。——まあ、驚いたく。——人は一度暗い處へはいるミ矢張り駄目なものぢやの——でも、前のは泥棒したんぢやなかつた。

まあの(なきごころの聲)

兵藏 なるほぎ。私の方では、近頃賣りにやつた覚えはありませんが。………

巡查 いや、(立上る) 屹度そんなごぢやらうと思ひました。

新一 (群集の中から進み出て、房吉の側へより) 房吉、お前は、何故そんな馬鹿な真似をして呉れた。お前は子供の時には、私しが友達のやうにしてやるし、それから後だつて、正直にしろく、お前の親父は正直者で通つて來たのだから、親父の名を汚さんやうにせにやいかんぞつて、のべつに云つてきかせて居つたに、何ミいふつまらんごぢをしたのぢや。三四年前にあゝいふ馬鹿なごぢをして、たつた此間出て來たばかりミいふぢやないか。それが又今度は泥棒をするなんて、お前はまあ、何ミいふ淺ましい奴になつたんだ。主人の顔に土をぬるばかりか、親の名を臺なしにするなんて。なぜお前は一體そんなごぢをしたのだ。

兵藏 人の物を取るに何故も何もあるものか、金が欲しいからにきまつてら。………不しだらなごぢをして、自分の罪の塊を下ろさせたりするやうな奴にや、泥棒する位何でもあるものか。

新一 房吉、何故そんなごぢをしたかミいふに、(肩を引きすする。房吉暫くだまつてゐる) 何故返事をしないのだ。(一二度同じごぢをくり返す)

房吉 (恨めしさうに睨みながら) 清二様が——(清二ぎつくりこする)

新一 な、何、清二が？清二がぎうしたのだ。お前に賣つて来いこでもいふたのか、え？(清二の方を向いて) 清二、お前房吉に、本當にそんなこゝを云ふたのか。

清二 (いつはつて) 兄さん、冗談いつちやいけないぜ。

新一 いや、いふたら、いふたでいゝぞ。

清二 誰がそんなこゝをいふものですか。(房吉に) 畜生。失敬なこゝをいふこゝ、承知せんぞ。何故そんな出鱈目を云ふのだ。

巡查 出鱈目を云ふこゝ承知せんぞ。正直に自分が盗んだら、盗んだこゝ白状しろ、え。

房吉 私が盗んだのぢやありません。

巡查 ぢやぎうしたのだ。

清二 いゝ頃のこゝをいふこゝ、ひぎいぞ。

新一 (怪しみながら) 兎に角有の儘につゝみかくさすこゝ云つて見るがいゝ。そして盗んだら盗んだで、立派に白状してちゃんこ心を入れかへて、も一度昔の正直な自由な房吉に戻つたらぎうだ。(後の藪で鳥のいないのゝを指して) あの藪の中で、樂しげに歌ひながら、自由に飛

んでゐる小鳥を見て、お前は何こも思はないのか。新しい空氣を吸つて、暖い日光を浴びて、何の心配も恥しさもなく、さも面白さうに囀つてゐる小鳥を、羨やましうは思はないのか。

群集 久しい間、この村からは泥棒なんぞ出なかつたがの——一度暗い所へかがむこゝ、ぎうしても

駄目ぢやなあ——可哀相に貧乏するこゝ人間もの。何ほ何でもまさか房さんが泥棒までしよう

新一 こは思はなかつたがの——親父さんとは、まるで月こすつほんほごちがうの。

新一 お前もさうして、大勢の人の前で辱を受けて、淋しい暗い處につながれて、つらい目を見た上に出てからも、たえず世間の人々やお巡りさんから、恐ろしい眼や、さけすんだ眼で睨まれてゐるよりか、自由に腕でかせける丈けかせいで、安樂に暮らして行く方が、きれ丈けいゝか知れんぢやないか。さ、お前は自分の罪をちゃんこ白状して、真心の底から、今までの罪を悔い改めて、心の濁をすつかり洗つてしまふがいゝ。そして立派な人間になつて、新しく一生をやり直したらぎうだ。

兵藏 一度赤い着物を着た奴が、何ほう白い着物を着たつて、心が元の儘の白さに返るものか。泥棒をするやうな奴は着物ばかりぢやない。心までが黒く汚れ切つてるのだ。黒くなつた心を洗つたつて白くなるか、馬鹿な。

新一 房吉決してそんなことは無いよ。一旦犯した罪も、悔改めて本心に立ち返へりさへすりや、
またもこのまゝの眞人間にもされるのだ。屹度さうぢや、迷つてはいけないよ。

兵藏 馬鹿々々しい。そんなことがあるか。ペンキ屋や何ぞぢやあるまいし、悔改めりや、泥棒し
たもせんも同じぢやさか、嘘をついたもつかんも同じぢやなんて、そんな馬鹿なことがあるか。
肩間に傷をつけりやちやんミ跡がつくぢやないか。曲つた材木は車の心棒にやならぬ。曲つた
奴を、何ほ直いさいふたきて、そりやさう思ふて居るものゝ幻ぢや。人間死んだら兎に角、此
世ぢや、金のあるのミ、ないのミは、ちやんミ違ふからの。——馬鹿々々しい、根性の腐つた
奴を相手にするな。

巡查 さ、さ、いゝ加減にして白状しろ。

新一 人間は、お金や材木ミはちがつて、ちやんミ悔改めて、正しい道をふんで行けば、屹度眞人
間になれるから。さ、白状して改めるがいゝ、悪う御座いましたミいつてあやまるがいゝ——
房吉 自分ぢや正直に働かうミ思うミつても、人が眞人間に——(泣く)

兵藏 常り前さ、誰が貴様のやうな横着な奴を——

新一 お父さん、お父さん、そんな、仆れてゐるものを打つたりなき、なさるものぢやありませ

ん。(房吉に) 房吉、それや然しお前の辛棒が足りないからぢやろ、すつかり精根を入れかへ
て心棒すりや、屹度お前の信用だつてもミつて来るよ。

巡查 貴様さうしても白状せんのか。

群集 やつぱりミつたのぢやの——さうせ分るのぢやから、ミつたら、ミつたミ云ふたらよさ相な
もののに——あゝなるぞ、よしならなくも、ミつたにされてしまふからの、可哀相なこぢ
や——

巡查 さ、ありの儘にいはんか。

房吉 (困つて、恨めしさうに) 蜜柑の方はさうしても、私しがミつたのぢやありません。

清二 ミこまで、すう／＼しい奴たらうな。

巡查 偽をつくミ罪がだん／＼重くなるぞ、ゑゝか。

房吉 はい。

巡查 (あまり追究するミほろが出さうなので、いゝ頃にやめて) よし。それぢや一緒に来い(藤
井兵藏等に) さうも御邪魔をしました。さ、ゆけ。(房吉をつれて去る)

(群集そろ／＼ミついてゆく、兵藏ミ新一ミだけのこる。十吉は精米所に入る)

兵藏 房の奴、一度ならず二度までも、人に恥をかゝせやがる、實に怪しからぬ奴だ。一體彼奴の親が馬鹿ぢやからだ、今日から出入をさせやせんから。

新一 そんなひどいことをなさるものぢやありません。何も親父やお袋に罪はないぢやありませんか。それに房吉だつて、ちやんご今ぢや後悔してゐるにきまつてますから。

兵藏 人の物を盗んだりするやうな奴が、何で後悔するものか。

新一 この前だつて何も後悔しないのぢやない、後悔しても世間が眞人間扱にしないのです。一度監獄に入つたものは、兎角世間では、いつまでも悪いことをするものご決めてしまつてゐるので。一旦秤にかけるご、永久に同じ目方だご思つてゐるのですからね。世間にも矢張罪はあります。第一あなただつてさうぢやありませんか。

兵藏 生意氣をいふな。

(きよ子小さい桶をもつて登場)

新一 何故生意氣です。

きよ子 (桶を置いて新一を止めながら) 兄さん、後生ですから(掌を合せる)

兵藏 罪人の味方なんぞする奴が、何處の世界にあるか、馬鹿な、(去る)

きよ子 兄さん、あなた本當にお父様をからかつたり何かして、お父様がお可哀さうぢやありませんか。

新一 僕は正しいことをいつてるんぢやないか、何もからかふつもりなんかありやしないからね。きよ子 そりやさうですげご……

新一 でも僕が悪いごいふの。よし、きいちゃんが悪いごいふならこれから止すさ。ね……きいちゃん、まあ此處へお掛けよ、少し位時間をつぶしてもいいだろう。

きよ子 でも叔母さんに叱られるから、いけませんわ。

新一 叱られたら、僕が辨解してあげるからいゝぢやないか、ね。少し聞きたいごがあるから。きよ子 でも、この間のやうなごをなさるんですもの。しないごお誓ひなさるなら……

新一 よし、誓ふ、しないご云つたら、断じてしない。さ、お掛け。

きよ子 (掛ける) 何のお話?(鬢のほつれ毛をかく)

新一 きいちゃん。

きよ子 え。

新一。ほかん。

きよ子 あらまあ。

新一 相變らず可愛らしい顔をするんだね、何こいふ美しい唇なんだろ。

きよ子 いやですわ、そんなに御覽なさつちや、(はにかむ風をする)

新一 何故いけないさいふの。

きよ子 何もいけなかないんですけれご(間) 私し恥かしいんですもの。

(天満宮の祭の一種風變りの出し物——長持の歌が、長くく尾を引いて、心持よくひびいて来る、何こもいへない此地方特有の情調が起る)

新一 久し振りで、あの歌をきくのはいゝ心持だな。(耳をたてゝ聞き惚れてゐる)きいちやん、あの歌を聞いて思ひ出すこごがあるだろ。

きよ子 えゝ？

新一 いつか、はなちやんご三人で天満宮へ參詣したこごがあるぢやないか。

きよ子 えゝ、あの時は、本當に面白う御座んしたわね。はなちやんがあんまり高いほつくりを履いて、幾度もくころんで、本當に可笑しかつたですわね。

新一 そしてきいちやんがひびく笑つたので、さうくはな子が怒り出したつね。……あれも

もう昔のこごだ——(間)あの頃はきいちやんもまだ無邪氣だつたね、兄さんくつて、僕にはかりまつはりついて、それがもごでいろく誤解までされたりしてね……

きよ子 西村の叔父様なごは、今でもさうですわ……

新一 あれは誤解ぢやない。外に目的があるからだ。たか子を僕におつ附けようごしての策なんだ(間)然し今から考へて見るご、あの頃は僕も世間知らずの坊ちやんだつたな。温室で育てあげられた許りの、少しも風にあたらぬ、まだ若葉の儘で、一本調子の道義的良心、貧弱な理性淺ましい功名心、僕はさういふものに玩弄にされて、殆んご夢中になつてゐたからね。

きよ子 つまり。謹直な正直者——

新一 なに、要するに馬鹿だつたのだ、いや臆病な偽善者だつたかも知れない。だからきいちやんのやうな美しい女の前に立つご、丁度やさしい尊い女神の前にゐるやうな心持がして、自然ご頭が下るやうに思ひながら、思ひ切つて、自分から祈をさゝけることも出来ねば、罪も邪念もない、可愛らしい星や花の前にゐるやうな氣がしながら、その星や花の美しさに酔ふこごも出来なかつたのだ。

きよ子 だつて、私しなんか、決してそんな美しいものでも何でもありませんわ。男の方ご云ふも

のは、そんなことばかり考へてゐらつしやるんですつてね。だから男の方は結婚でもして、女をよくお知りになると、直にいやになつておしまひなさるのでせう？ 男の方はそれでいゝにしても、泥溝の中へ蹴落されたやうな、不幸な目にあふ女こそ、全くいゝ迷惑ですわ。

新一 若しきいちゃんのいふ通りださるゝ。それは女の自から招く禍ぢやないかと思ふね。女がいふものは、一旦心をゆるしてしまふゝ、何もかもさらけだして、有ゆるほろを平氣で見せるほゞ單純なくせに、萬事をなけ出すまでは、其反對に出来る丈の手段を盡して、自分の缺點を自分ですら分らないほゞ甘く隠してしまつて、さうしても男の心を引つけなければ置かないやうに技巧を廻らすんだものね。つまり女は先天的に自分のもつてる技巧を單純に禍されるのだね。

きよ子 あなたはまだ、女がいふものをよくお知りにならないから、そんなことを仰有るのですわ。女の方にや技巧なんか何もなくても、男の方でさういふ風に解釋しておしまひなさるのでせう

新一 それはさうかも知れんが、又さうでないかも知れん。けれどもそんなことはさうでもない。兎に角僕は賢明なる謹直家であるが如く見えて、その實は世間知らずの臆病な大馬鹿者であつたことは、僕の卒業後の三年間の經驗で明白になつたさ。僕は屬吏生活もして見た。その後中

學教師にもなつた。けれども可笑しくもない形式に因襲は、まだいゝとして、僕はあゝした恐ろしい偽善と虚偽と利己主義とでかためあげた世間には、さうしてもゐたゞまれないで、直きに逃げ出した。それから一年ばかりは小雑誌の編輯をしたり、本屋の手先に使はれたり、色々な苦しい戦を戦つて見た。そして三年の間に僕の學んだことは、世の中で本當に頼になるものさいつたら、自分以外には、何一つありはしないさゝいふことだつた。或時なごは、自分の一番親しくしてゐる同僚が、病氣になつたので、毎日自分の仕事の時間までもさいて、殆んど側につき切りで看病してやつた。けれども其後僕が病氣になつた時には、其男は一度だつて顔を出さへしなかつた。只一度こゝはりののがきをよこしたきりだ。僕はそののがきを見るまでは其男の來てくれるのをぎれ支け楽しみにして待つてゐたか。そして其のがきを見た時には、僕は一人で冷めたいベッドの上で、ぎれ支け泣いたか知れやせん……（此長い白の間に十吉中から出て來て石炭殻を片づけて又入る）

きよ子 まあ、そんな薄情な人がありますかねえ。

新一 そして僕はつくゞ世の中がいやになつて、一時は死んでしまはうかと思つたが、考へて見るゝ、此儘死んぢや、今迄生きて來たのが何の意味もないことになる。さうしても生きて

何かしなけりやならん、まゝよ自分は誰から愛しられなくとも、反對にこちらからは出来る限り人を愛して見よう、敵でも味方でも、悪いものでも厭なものでも、丁度太陽が萬物を照して、和かい喜を與へるに同じやうに、大きな廣い心を以て愛してやらうといふやうな氣になつたのだ。いや、意地にもさうしてやらうといふ氣になつたのだ。

きよ子 つまり病氣があなたを新しい世界へつれて行つたのですね。

新一 さう、病氣が僕の眠つて居た大きな感情の眼をさまして呉れたごでもいつたらいゝかもしれない。僕はそれからいふもの、人から少しでも優しくして貰ふご、ほろ／＼涙がこぼれて、まるで老爺さんや老婆さんのやうになつてしまつた。ご同時に、僕は世の中に戀程美しいものはないやうな氣がした。それが短いごか、果敢ないごか、價値だごかいふものを、別の問題として考へるご、兎に角二つの心ごごがびつたりご融合して、其間に寸分のすき間もなければ、損徳や利慾の念か微塵もなくつて、純一で、盲目で、自分ごいふものを相手の前にすつかり投げ出して、相手の強い焔で灼くにまかせる。何ごいふ美しいやさしいものだろう。人生の花だ、光だ。名譽、地位、金錢、そんなものが幾ら堆高くつみ上げられたつて、人間はそれ丈けではごても淋しくてゐられはしない。傷手をうけた、いたましい私の淋しい心は、今

はもう、美しい、やさしい、力強い、純一な、心の抱擁、それがなければごても堪へられなくなつた。さう思ふご、僕は一日もきいちゃんのを離れてはゐられなくなつて（きよ子ぎよつととしてうつむく）凡ての物をなけうつて歸つて來たのだ。それなのに、きいちゃんはさうしてさう顔をかくしたりするの（間）怒つたの？（女かぶりをふる）あゝ美しい、かうしてきいちゃん顔を見てゐるご、まるでセレナーデでもきゝながら、春信の美人畫でも見てゐるやうだ（十吉が精米所の中で歌つてゐる聲がする）

きよ子 （困つたやうな顔で） あなたはそんな幻想を見てらつしやるからには、直きに冷たい夢から覺めて、失望しておしまひなさいますわ。あなたは今御自分の心に偽られてゐらつしやるのですもの。

新一 きいちゃん、そんな冷たいごごを云はないで、此淋しい渴ききつた心になみ／＼ご、暖い愛の酒をついでおくれ。僕の心はもう凍えてしまひさうだ、僕は今慈悲深い女神のやうな、きいちゃんの前に、かうして膝まづくのだ。僕の心は乞食のやうに掌を合せて、きいちゃんからの一椀の施しを祈つてゐるのだ、（興奮しつゝ手を引よせんごする）

きよ子 あら、いけません／＼。（拒む）

新一 (失望して) それは、僕が、かうして膝づいて、哀願してゐる姿は、きいちゃんにはこれ丈
けか、あさましい、みすほらしいものに見えることだろう。恐ろしく、汚ない土塊しか見え
まいから、無理もないさね。

きよ子 まあ、そんなことを……(當惑して)

新一 僕は世の中に、せめてきいちゃん丈は、まだ僕を愛してゐてくれるものと思つてゐた。そ
れだのに……

きよ子 本當に私し兄さんに同情しますわ。

新一 けれどあなたは病氣だから愛することは出来ません、きいふのだね。

きよ子 そんなことはありませんけれど。

新一 では何故、いけないのだ(手を力強くにぎる。間) 屹度何だね、外に……

きよ子 まあ、(片袖にて顔をかくす)

新一 成程ね、(手をはなして) 三年いへば可成長いものだからね、それにしてもさうしてきい
ちゃんは、同じ家根の下に住んでる者の心まで、暫くの間に、さう平氣で弄べるやうになつた
のだらうね。

きよ子 まあ、私しあなたを弄んでなんかるやしませんわ。

新一 さうさ、自分では欺くつもりでなくたつて、其結果が知らずく人を欺ひいてゐる例は、幾
らもあるからね、さうせ玩弄物にされたり、欺かれたりする方が馬鹿さね。

きよ子 (いよくこまつて) お兄さん、あなたさうしてさう、いや味ばかり仰有るの。私しにや何
も分りませんわ、悪かつたら御免なさいね。

新一 ぢや三年前のきいちゃんさ、今日のきいちゃんさ、何故私に對する態度が斯うも變つたの
だ。三年前のきいちゃんは、本當に懐かしい柔しい、實に可愛らしいものだったが、今のきい
ちゃんの、そのすまし込んだ、よそよそしい態度は、それやなんだね……

きよ子 悪かつたら御免なさい。いゝえく、やつぱり、私しが悪いんです、すみませんく。

新一 成程以前は無邪氣だつた、けれど今は羞む心が強くなつた。物の表面しか見えない人には、
さういふ簡単な遁辭で、立派に解釋がつくかも知れない、然し僕にはそれぢや分らない……
一體さうして、さうつれなくするの、ゑ、きいちゃん!

きよ子 さうしてつて、私し何もさうする譯なんかありませんでさう……。

新一 そりや、成程僕の態度も悪いには悪かつた。三年の間、たつた一度だつてきいちゃんに手紙

を出したことはなかつたからね。

きよ子 私し本當につまりませんでしたわ、幾度お手紙をさしあけても、一度だつて御返事を下さらないんですもの。

新一 そしてきいちゃんの誇を傷けたのは僕が悪かつた。それは僕がどこまでもあやまるさ。けれど、あの頃は全く僕にはさうするより仕方がなかつたからね。女まじいものを考がへる譯にもゆかず、まして結婚なんていふことを思ふ程、呑氣にはなつて居られない境遇だつたからね。お父さんの意志に反して、強ひて東京へ飛出したのだから、全く、そんな餘裕なんかなかつたんだ。僕には食ふことだけで命がけだつたのだ。お父さんに向つて、大言を吐いたからには、さうかして意地を通さうと思つてたんだ。そんな風で、返事を出さなかつたのは僕がすまなかつた。許して頂だい！

きよ子 いゝえ、すまないのは私です。皆私しが悪いのです。

新一 ね、きいちゃん、三年前、僕が東京へ立つ前の晩に、お互に握手し合つたことはもう忘れてしまつたのだね。僕は其時のことを思ふと、まだ胸が炙えくり返るやうだが、きいちゃんももう覚えてもゐないといふのだね。時はもう過去つて、お互の心の間には、千里の隔りが出来た

こいふのだね。(間) 成程、僕が、きいちゃんに一度も便りをしなかつたのは悪いさ、けれども、それは一日も早く、きいちゃんを呼ぶやうになりたいと思つて、懸命になつては居たものゝ、色んなつまづきばかりがあつたので、そんなこときいちゃんの耳に入れたくないと、思つたからだ。決して一日だつてきいちゃんを忘れたことなきありやしない。それなのに、今のきいちゃんは、ろくろく握手さへしようと思つたのだね。あゝ、僕は矢張り欺されたのだ、馬鹿だつたのだ！

きよ子 まあ、そんなことを。御免なさい、すみません、——(自分の今の境遇を思つて眞に堪らぬ思)

新一 (ひびくせきをする) あゝ、胸がさけさうだ、(興奮してよろこび仆れる)

きよ子 お兄さんく、しつかりして下さい、十吉、十吉、(驚いて介抱する、十吉飛んで出る、抱いて臺の上へねせる。)

(幕)

第二場

舞臺凡て前に同じく、時も前場に引つづいてゐる、きよ子十吉と共に新一を介抱し、春をなでさすつてゐる。

新一 きいちやん、ありがたう、もう大丈夫だ。

きよ子 さうですか、何ともありませんか、わたし本當にびつくりしましたわ。

新一 なに、餘り咳が出たものだからね。十吉もう大丈夫だ、ありがたう。(十吉入る)

(村會議員三田、大村登場)

三田 や、これはこれは、折角の處をお邪魔ぢやありませんでしたかしらん。(きよ子會釋する)

新一 いや／＼、ちつとも、さ、さうぞ、お掛けになつて下さい。(二人かける)

大村 此間は、さうも失禮しました。實は今御宅の方へ伺ひました處が、こつちに御出でになるこいふので、かまはずに押かけてやつて來ましたが。

新一 さうでしたか。大變暖かなものですから、日向ほつこをしながら、此處で話しこんでゐたのです。東京と違つて空氣が新鮮だから、かういふ處に寝ころんでゐるこ、何ともいへない氣持で

す。きいちやん一寸お茶でも持つて來て貰へんかね。

きよ子 え!。(退場)

大村 何、さうぞおかまいなく。

三田 さうですな。……東京の空氣は田舎からたまに出てゆくこ、迎も堪りませんな。まるで烟の中にでも居るやうで……

新一 全くひさい埃ですからね……

大村 藤井さん、早速ですが、此間のお話の様子は如何で御座んせう。御親父に話して見て頂けますかかしらん。

新一 あ、あれですか、早速御返事を申し上げやうと思ひながらも、まだ實は、充分に決着するに至らないのでしてね。

三田 なか／＼お考へ通りにや、急には運ばないでせうね。

大村 私共の方ぢや、實は此際一日も早く決着して、寒くならない中に、是非何ぞかしたいと思ふて居るんですが、何しろ又去年のやうに、流感でも流行するこ、今のやうな堀立小屋ぢや、こても始末におへませんからの。さうしても村の爲に一つ、せめて今の倍位のを建てなくちや……

茶を出してのむ)

大村 人力車はさうなりました。

兵藏 人力車は轆子が面倒で、さてもく……本當にあの助の奴にや弱りました。さうも飲み助で、時間がちつともあてにならないので。何でも自分一人でやれるものが一番世話がなうてようが、んすわい。人さいふものはなかくあてにならないもんで、餘り人を頼りにしるさ、ひさい目に合ふから、何でも一人でこつこつこやるに限りませうわい。

大村 さころで藤井さん、新一様からお話があつた筈ですが、實は村の避病院の問題であがつたんですが

兵藏 (いやな顔をしながら) 成程。

三田 此冬も去年のやうなこじがあつちや全く困りますからな。

兵藏 もうあんなこじはないでせう。

大村 けれさ、萬一のこじがあつちや、大變ぢやから、今の中には是非増築するか、別に新築するかにせんにや、さても今の儘ぢや仕様がありませんからの。それ文けのこじは、此春村會で畧ほきまつてるから、色々取調べちや見たけえさ、さうも土地さ金この都合が甘くゆかんもんぢやで、

それで此間から臨時村會を開かうさいふこじになつちや居りますが、丁度、新一様がお歸りになつたのを幸、いつかのあなたのお話をしますさ、それぢや精米所か、さもなけりや、明神下の家屋敷を寄附させるこじに、あなたさ相談して見やうさ、かういふお話があつたもんぢやから、さういふこじにでもして貰や、こねえなえ、こたあないさいふて、兎に角私共が實行委員になつさるもんぢやけえ……

三田 それであ、今日かうして御返事を承り旁御願に参つたんですが。

兵藏 はあ、そりやく。

三田 藤井さん。何さか一つお願は出来ぬものでせうか。此春の選挙の時にも、あなたがさういふお話をなさつたこじもありましたから。

兵藏 でも、ありや、私が當選すれば、そのお禮にさいふのぢやつたから、見事に落選して見りや、さうもの。(間)

新一 でもお父さんは、寄附するから、運動して貰ひたいさ、いはれたさうぢやありませんか。

兵藏 お前が側から何を生意氣な事をいふのだ。私はまた、誰か人の懐中の算段ばかりしてゐるものが、その話をもち出したのかと思ひました。

新一 然しお父さんは、此間から、さういつてらしたぢやありませんか、精米所も此儘にしごいても損つゞきだから、一層のこご止めてしまはふかつて。だから村でも困つてるごいふからにや、他のこごゝ違つて、公共事業のこごぢやし、思ひ切つて寄附したつていゝぢやありませんか。それがいけなけりや、明神下の家だつて、あゝして誰も入れないで、いつまでもあけこく程なら、もつご役に立つこごに使つたらいゝぢやありませんか。さうすりや、村の者がこれ丈け仕合せるか知れませんか。

兵藏 何を寢言をほさくのだ、たわけ者奴。お前は今度歸つてから、何かいへば直ぐ公共事業だごか慈善事業だごかいふが、さういふこごに關係するのは、金の有り餘つて仕様のない人間か、さうせ始めから一文なしの貧乏人か、それごも世話好なのらくら者の道樂か、さもなければ何が悪いことをした奴が、罪滅ほしにやる仕事ぢやないか。ごつちにしてもおれ等には何の關係もないごぢや。

新一 何故關係がないごごなのです。一番に關係のあるごぢやないですか。丁度いゝころな家があるから、最も都合のいゝ状況にあるぢやありませんか。……例へば貧民が傳染病で苦しんでゐて、それが女房や子供にまでも傳染して行く、けれごもそれを充分に治療する方法も場所

もないごいふやうなごごは、あなたの心には何ごも感じないのですね。

兵藏 病氣になるのは運が悪いのぢやないか。人の運ごいふものを、人間がごうするごごが出来るか、それごもそんなに可哀相ご思ふ人は、代りに病氣になつてやつたらよからう。

新一 そりや勿論運が悪い上に、用心しないから、傳染病なんごに罹るのでせうさ。けれご金のある者は、病院にでも入つて、相當の治療も出来るが、金の無い者は、避病院にでも入れて治療してやるより外に、方法はないぢやありませんか、而もその避病院が、狭くて仕方がないごいふのは、實に不都合なごぢやありませんか。

兵藏 不都合か何かそれはおれは知らんが、人間に金のないのは、つまり自業自得ごいふものぢやないか。平生から心掛けて、萬一の爲にちやんご用意して置きや、慈善なんごいふごごは、一寸も必要のないごぢや。それに公共事業なんていふものは、村なら村費、郡なら郡費で、出来る範圍内で相當にやつて行きやそれで澤山ぢや。何もさう法外な贅澤するごごはない。殊に避病院なんちうものは、平生は入りもしないものぢやないか。大村さん、さうぢやありませんか。大村 いや、そりやさう仰有りや、そんなものですけご、何しろ経費が少ないので、思ふやうに行かんものぢやから、その……

兵藏 何も、経費が少なかりや、少ない経費相当なものにしよいたらさうです。此貧村に、柄にもないここを計畫するからが抑間違つるぢやないですか。

大村 けれども同じ建てるなら、出来る丈け完全なものにしよきや、いざいふ時に大變都合がよすがんすからな。

三田 それに、場所も此處か明神下なら、此上もありませんし。

兵藏 はあ、場所がええ？ 此處で何がええのです。こんな町に近い、おまけに私しの家直ぐ側

ぢやないか、何が此處がええのですか。明神下の屋敷にしたきて、あんな道端へ避病院を建

て、一體さうする氣が知らんが、今の處で悪けりや、ついでに何處か墓地の側へでも建てたら

よささうなものぢやありませんか。第一避病院なんぞを建てる爲に、さう大騒をやらんでも、

衛生の方をも少し、しつかりやつたらさうでせう。

大村 それもさうですが、避病院も矢張完全にして置きませんこの。

兵藏 そんなに完全なものが欲しけりや、三田君の家なんぞ、理想的ぢやありませんか。家はひろ

いし、隣りにや醫者はあるし、死ぬりや直ぐ後の寺へもつて行けるし、先づ詭向でせう。大村

さんさうぢやないですか。殊に三田君なんぞ實行委員なら、それが穩當でもあり、第一手取り

早いぢやありませんか。一つ公共の爲にさうです。三田君、名譽ですぞ。

三田 さう皮肉を仰有つちやこまりますな。

兵藏 皮肉に仰有りや、私の屋敷側へ建てようといふこそ、もちつ皮肉ぢやないでせうか。

三田 そりや又何故です。

兵藏 何故ですつて、こんなことを云ふのも恥しい話ぢやが、春の郡會議員の選挙の時にやさうで
したい。皆私に選挙するから、是非村の爲に一つ出て呉れなんご、甘いことを云ふて、皆でか
つぎ上げて置きながら、さて開票して見たらさうです。ちゃんご約束したといふ連中までが、
大方皆、こんでもないあの悪黨を選挙しるぢやないですか。え、面の皮さ。それでゐて、そ
の時の話に引懸りをこしらえて、約束ぢやつたから避病院を寄附せいたあ、實際あんまり皮肉
な話ぢやありませんか。さうでせう大村さん、三田君、あなた方はあの時分に私しに投票して
下さつたのでせうの。お二人も立派な有権者ぢやから。

大村 (狼狽して) え、つご私しや、確か、あなたに入れたやうに覺えこりますか。

三田 私しや、あの時風を引きましての、たうく、何でした。

兵藏 いや、すんだここはさうでもよすがんす。それを今更詮索したきて何になりませう。兎に角

に、村の爲に、さう、あり難くもないといふ男に、村の爲に寄附せよは少し面白過ぎるぢやありませんか。私共のやうな貧乏人にや、そんなことは第一僭越ですし、まあ、あなた方のやうな金持の方から、例を示して貰はんどの……人間云ふ者は、さうも矢張自分にはかり都合よく出来ちよるもんぢやての、ハハ、(苦笑する)

大村 いやさうも藤井さんにやかなはん。ぢや、別に少し急ぐ用事もありますし、今日はこれで失禮しますから、まあ一つよく御相談なされて置いて頂ませう。

三田 御冗談でなしに、さうか一つ眞面目にお考へ置きを御願ひします。

兵藏 世の中は眞面目に考へるこゝ、餘り馬鹿／＼しうて、ハハ、。

大村 まあ、さう仰有らずに何です、一つさうか。

三田 何分よろしく、さうも失禮しました。

新一 さうですか、それぢや又いづれ。

(兩人こそこそ去る、新一送つて出る。十吉出て来て俵をはたいてゐる。)

兵藏 糯米はさうぢやつたい、何ほう切れたかい。

十吉 一升二合ばかりで御座んす。

兵藏 それは割に少かつた。粒がえゝからの。明日の朝届けてやれ。

十吉 中山へ行く序にもつて行きませう。

兵藏 おゝ、それから、少し石炭を取つてこにや、もうあるまいの。

十吉 はあ、あゝ二日分位しきやありません。

(兵藏十吉中へはいる。大三、新一について、出て来る、大三は學校歸りの風をしてゐる)

大三 兄さん、只今。

新一 あ、お歸り、さうして今日はそんなに遅かつたんだい。

大三 明神様の所で遊んだんだ。

新一 遊ぶのはいゝが、喧嘩をしちやいかんよ。

大三 でも忠助のやつ、人を打つんだもの……兄様、竹馬こさへて頂戴。

新一 竹馬を？お前竹馬に乗れるかい、

大三 ううん、まだ乗れない。

新一 乗れないものをこさえても駄目ぢやないか。それより、兄さんが紙鳶をはつてあげよう、紙鳶の方がよからう、竹馬はあぶない。

大三 さつちにせうかな、紙鳶もえよな。

新一 それは紙鳶がえよさ、紙鳶ならお前あけられるぢやろ、喧嘩しなきや紙鳶をこさえてやらう。

大三 さつちも欲しいな。両方こさえて頂戴……さつすりや喧嘩をせんから。

新一 (笑ひながら) お前は外交が甘いな、(大三退場)

(兵藏俵の米をさして、出て見てゐるが、新一の歸らうとするのを見るこ呼こめて)

兵藏 新一、一寸まで。お前は何か、先のやうなこみをまさか本気で云ふてるのぢやなからうのう。

新一 (かへつて) まさか、冗談にあんなこみを云つてる馬鹿もありやしますまい。

兵藏 冗談に云ふてる馬鹿がない？ はあ、お前はさうしてそんな賢い人間になつたのぢや、え！何か悪いこみでもしたのか……お前は、此春死んだ松永の老爺のこみをよく知つて居るぢやらう。

新一 何をです。

兵藏 (かける) あの老爺が眞宗のお塊ちやつたこみはお前も知つてるぢやらう。あの男は米を倉

へ積み込むに、いつもぐるりを一尺づゝ位あげさせて、俵のまはりが廻れるやうにしたものぢや。さうして米を賣る前にや、屹度俵へ水を吹いちや針を立てゝ、一升二升宛盗んで賣つたものぢや。それ許りならまだしも、寺へ参つちや賽錢まで誤魔化して來て、さうかかうかあれ丈けの身代を積み上げたものぢやが、死ぬる前にやそれが恐ろしくなつたこ見えて、朝から晩まで地獄へ行くゝミ口走つて、乞食さへ見りや追かけて、二錢三錢づゝやつて居つたが、たうさう氣が狂ふて死んでしまふた。お前もあの老爺のやうに、何か悪いこみをしたこみでもあるのかい、眞面目でそんなこみを云ふてるこすりや。

新一 (かける) 私は今まで何一つ悪い事をした覺はありやしません。けれど只生れて只死ぬる丈けでは、私にはさうしても意味がない、いやむしろ罪惡だこ思はれるのです。

兵藏 何故意義がないのだ、何故罪惡だ、生れて死ぬる、それ丈けで大に意義があるぢやないか。そしてその間に何でも自分出来る丈けのこみをする。人間はそれで澤山ぢやないか。何も自分出来るもしないこみを企てるにや及ばんぢやないか。

新一 然し、出来ないから云つて、やらないでゐるは、世の中は進みつこはありませんからね。實は私は此一二年の間、いろゝゝ考へて見たのです。そして世の中を進めてゆくには、無智

な貧民を引上げてゆくのが、最も大きなここの一つと思つたのです。そしてその方面に、一つ努力して見たいと思ふのです。

兵藏 (早のみこみをして) 貧民救済か、馬鹿な！ 貧民を何ほ救ふてやつたこゝで何になるか。例へば五圓の金を恵んでやつたこゝで、一日も懐に持つて居やせん、すぐ使ふてしまふのぢや、それに貧民が寒からうと云ふて、お前が自分の着物をぬいでやつて、二人が風を引くやうな真似をしたこゝで、それが一體何になるのぢや。

新一 それぢや、あなたにや、世の中の貧民なんといふものはさうなつてもいいのですか、あなたにや、同情だこゝか憐愍だこゝか、人道だこゝか正義だこゝかといふものは、何の價もないのですね。

兵藏 そんなものはするい奴等が世の中に頭をもち上る爲の立派な武器ぢやないか。偽善や虚偽を餌にして、美しい皮をかぶせた饅頭ぢやないか。やれ慈善だの、やれ博愛だの、といったこゝろで、さういふこゝは、つまりが弱い奴等が、強いものに對する、體のえゝ脅し文句ぢやないか。そんな脅し文句をならべて、人の財布をあてにするよりや、人間お互に眞面目に奮闘して、強い者になるがえゝ。強い者にや南無阿彌陀佛もアーメンも何もありません。力は宗教ぢや。おれは只自分の力を信ずる丈ぢや。世間の奴等は、金があるこゝで見ると、それがなくなるまで

は、手をかへ品をかへて、人の懐をねらつて居るが、そんな者共のこゝを、誰が振り向いてやる必要があるか。世間の奴等は、せんじつめれば大抵皆敵ぢやないか、貴様は其敵に兵糧をやらうとするのか。

新一 世間の人が皆敵なんて、それは少し僻み過ぎた説でせう。よし又敵なら敵でもいいから、海のやうな大きな心で其敵を恵んで喜ばして、一步でもいい方へ導びいてやるこゝは、非常に偉いこゝぢやないでせうか。世の中にそれほ美しい高尚な意義の深いこゝは外にあるまいと私は思ひます。あなたは今丁度其美しい氣高い第一歩をふみ得られる地位に立つて居ながら、私慾の爲に心を蔽はれて、それをすることが出来ないでらつしやるのです。あなたにこゝつては、只僅かばかりの土地と家屋、それ位のものは何でもないぢやありませんか。さうしてあなたはそれを捨て、もつと立派な大きな意義のあるものを得ようとなさらないのです。(立つて歩く)

兵藏 新一、貴様はそんな仙人じみたこゝを云ふが、一體こゝから生れたと思ふのか。

新一 云ふまでもない土から生れたのです。

兵藏 そのくせ貴様は、まるで風船玉のやうにふわ／＼したこゝばかり考へて居るぢやないか。風

船玉はいくら輕くても、天まで上ればせんぞ。夢を見るな、夢を。よく自分の足もこを見る。貴様の足は、ぶらくしてゐるぢやないか。ちやんこしつかり大地をふまへて、土にかぢりついで物を云へ。貴様がそんな阿呆けたこを云つて、自分から有頂天になつて居るのは、つまり今の家の事情を何も知らんからのこぢや。おれはお前にそんな馬鹿になつて貰はふと思ふて、苦しい思ひをして金をつぎ込んだのぢやないぞ。それなのに、貴様は一體氣でも狂ふたのか。え？。

新一 牡蠣がはなたれを笑ふこいふこがありますね。

兵藏 えゝか新一、ま、おれの云ふこも少しは聞いてくれ。(新一かける)おれは自分で膏汗をしほつては、さうかかうかあの倉の中へ加調米を一杯にするやうになつたのぢやが、貴様等を教育する爲に、その米を賣つた丈ぢやなか、學費が出し切れんから、田地を質に入れては金を借りたのぢや。ところが只の百姓ぢや、いつまでたつてもその穴うめが出来さうにもないから、實は此精米所を始めて見たが、矢張こんな小さい町ぢや思ふやうにや行かん。さうする中に、おれは少し米相場に手を出して見たが、運の悪い時にや悪いこばかりで、たうこ家の借金は二萬ばかりになつてしまふた。

新一 さうですか、いつの間になに出来たのですか。

兵藏 いつこなしにだよ。それで今ぢや家の田地や屋敷は、名前こそ家のものぢやが、残らず抵當にはいつて居るのぢや。まごゝするこ、今に此家も立退かなけりやならんこになるかも知れん。けれぎもおれは、自分でためたものはまあ、仕方はな。こしても、せめて、祖先傳來の田地や家屋敷だけは、立派に貴様等に殘してやりたいと思ふて居るのぢや。つまりおれが思ふて居るのは皆貴様等のためだぞ。それに貴様は彼奴等の口車に乗つて、えゝ氣になつて踊つて居るが、彼奴等は人の家の滅びて行くのを、手を叩いて面白がつて居るのぢやぞ。一體此村の奴に一人だつて祿な奴は居りやせんて。(立つてあるく)

新一 そんなわけなら、何もあなた、いつまでもその借金で苦しんでゐる必要はないぢやありませんか、何ぞか早く始末をつけてしまつたらいゝぢやありませんか。

兵藏 (かける) さ、それぢやて、その始末をつけやうと思ふてこそ、色々心配して居るのぢやないか。それに人の心配も知らんで、貴様は馬鹿なこを云ひあるくぢやないか。三文にもならんこはやめて、死にかゝつた體を、仕事がなけりや、寝られ。

新一 死にかけた體だからこそ、死ぬるまでに、出来る丈け大きな一里塚を建て、置きたいと思ふ

のです。そして死んだ後までも大きな自分を残して置きたいのです。

兵藏 まだ、そんな寢言をぬかすか。下らんこまばかり考へて居らんで、少し氣でも變へろ、間拔奴。

新一 仕合なこまにや、造物者は人間に自分の間抜面が見えんやうに、造つてくれていますからね。兵藏 何だこま？（新一の言が分らないで） 貴様は一體白足袋をはいたこまがあるか。

新一 私は白足袋なんかはきたくないです。一生黒足袋で澤山です。（他の場所へ行つてかける）

兵藏 それだから駄目ぢや。黒足袋をはいて居る間は、白足袋をはいてる奴が皆間抜けて見えるが一度白足袋にかへるこま、最初の中は變でも、直きに今度はあべこべに、黒足袋をはいて居る奴が却て間抜けに見え出して来るものぢや。自分の考が一番えいこま思ふちよつても、人の考にも矢張立派なこまもあるものぢやぞ。

新一 お父さんは御自分には、何でも思つた通りを押し通さうこまなさるくせに、人が自分の考を通さうこまするこま、こままでも反對なさるんですね。

（きよ子登場、暫く様子を見て待つてゐる）

兵藏 おれこお前こ同じでたまるか。

新一 けれど道理に二つはありませんからね。

兵藏 知れたこまぢや、子が親に頭を下けろこまいふ道理がこまにあるが。

新一 それはあなたの誤解でせう、私はそんなこまを云ふた覚えも、した覚えもありません。私は只御相談した丈けです。

兵藏 家をつぶすやうな相談は聞きたくない、もう澤山ぢや。

新一 さうですね、人間は亡びても、家はつぶれない方がいゝですからね。（退場）

きよ子 あの叔父さん、道助さんが来ておいです。直ぐにお歸りなさいませつて。

兵藏 よしく、今直ぐ歸る（獨がてんしつ） さうぢや、その方がよからう（きよ子の去らうこまするのを呼返して） きよ、一寸待て。

きよ子 （ふり返つて） え、何か御用で御座んすか。

兵藏 まあ其處へ掛けて呉れ、お前に話がある。（きよ子の側へ行く）

きよ子 （かける、不安さうに）何で御座います。

兵藏 お前今道助が持つて来て居るものを見たか。赤い樽を、よく婚禮の時に持ち歩いて居るぢやろ。

きよ子 (不安さうな顔をして) はあ。

兵藏 (やさしく) あれはお前、誰の所へ来たのだと思ふかい。ええ

きよ子 分りません。

兵藏 まあ、あてゝ見い。

きよ子 大兄さんのですか。

兵藏 いや。

きよ子 それぢや小さいお兄さんの。

兵藏 馬鹿な、あんな片輪者を貰ひ人があるか。

きよ子 (愈不安に) ぢや、はなぢやんのですか。

兵藏 ハハ、、、あんなねんねえが(きよ子ぶるくふるえる) あれはお前の處へ来たのだ……

…荒井の家から来たのぢや。

きよ子 (驚いて) まあ! (顔をつむむ)

兵藏 な、何もさう驚くこゝろはないぢやないか。女はさうせ一度はお嫁に行かなければならんのぢやから、えゝこゝろがあつたら早く行くに限る。それに荒井の叔父さん云へば年こそ少し多い

が、何しろ此郡でも一二を争ふ金持なのぢやから、こんなえゝこゝろはない筈ぢや(きよ子が顔をかくして、途方に暮れて居るのを見る) きよ、よもや、お前は荒井の家へ行くのがいやなんぢやあるまいの。叔父さんも良い人ぢやし、あの家へ行けば、したい放題の贅澤も出来るし、それに姑が居るのぢやなし、女中は澤山使ふて、息子夫婦はぢやんと別居して居るのぢやから、お前はまるで女王のやうなものぢや、され丈け澤山候補者があつたか知れんが、お前が皆それに鼻をあげさせたのぢやないか。おれはこんな結構な仕合なこゝろはないと思ふて居る。お前は喜んで行つて呉れるぢやらうと思ふがさうぢや。え、きよ子、(間)返事をしない所を見るこゝ、いやこゝでも云ふのか。え。

きよ子 (漸く) 叔父さん、二三日考へさせて下さいませ。

兵藏 こゝろが、それがさうはゆかんのぢや、さういふ閑があれば、何もこんなこゝろにはならんのぢやが、實は今朝愈きまつた許りで、お前にも話さうくと思ひながらまだその暇がなかつたのぢや。何しろ大變急なこゝろで、さう待つこゝろには行かんのぢやて。明日の晩に式を擧げるこゝろにぢやんと決つて、先方ではもう、そのつもりで何もかも仕度をして居るのぢやから。きよ子 明日の晩にですつて、まあ、私しごうしたらいいのでせう。

兵藏 きうしたらえゝつて、きうもせんでも、體さへ行けばえゝこゝになつて居るのぢや、着物な
んぞは先方で大急ぎでこしらへて、それを今持つて來たのぢや、あこから着て見るがえゝ、さ
ぞ立派なものぢやらうて。

たみ子 (登場するなり) あなた一體きうしたこいふのです。あれは一體何です。誰の婚禮がある
のです。私には一言の相談もしないで。

兵藏 (立上つて) 黙つこれ、お前がぐづくいふ必要はない。

たみ子 いゝえ。黙つちや居られません、さ、一體誰の結婚なのです。

きよ子 (泣きながら叔母に飛びつく) 叔母さま。

たみ子 お前のぢやろの。大方そんなこぢやらうと思ふた。一體きよを何處へやらうこいふので
す。

兵藏 餘計なこゝを云はず、早く歸つて酒の仕度でもせい。馬鹿奴、一體こゝをほつき廻つて
んだい。

(此時信用組合の小使手紙をもつて登場)

小使 これをもつて参りました。(兵藏に渡す)

兵藏 (讀む、怪しみ驚きの色) きよ、お前は此間の金はきうしたのだい、信用組合へもつて行

つたのは (きよ子驚くが、すぐそしらぬ顔をしてゐる) 又請求して來たぞ。お前はすて、もし
て知らん顔をしてをるのぢやなからうの。

きよ子 (黙つてゐる)

兵藏 あの時の受取はきうしたい。

きよ子 後から送るから云ふ話でした。

兵藏 をかしいな。(退場、小使ついて去る)

たみ子 きよ、お前、きこへ行け云ふのだえ。

きよ子 ぢや叔母さんは、何も御存じないのですね。

たみ子 私しは今町から歸つたばかりぢやないか、さ、きこへ行けこいふのだえ。

きよ子 (泣きながら) あ、荒井のお爺、お爺さんの所へですつて。(ひき泣く)

たみ子 まあ、何こお云ひだえ。荒井のあの狍々爺のこゝろへ云ふのかへ。大抵そんなこぢや
らうと思つたて。人もあらうに、呆れて、物がいへやせん……まあ、えゝからお前安心おし、
誰がそんなこゝをさせるものか。(さつさ退場)

(きよ子伏せて泣いてゐる。日はもう大方くれかゝる。後の路を通る馬子唄馬の鈴、遠くで入相の鐘、静に幕)

第三幕

舞臺は藤井家の離れ書齋ともいふべき子供等の勉強室、兼娛樂室、建築は純日本式なれど、裝飾は勿論器具などには洋風のものが多い。それは主人の種の趣味なのである。敷物が敷かれて、真中にテーブルがあり、正面は一面窓にて、田園をのぞむべく、其側に粗末なソファも一つあり、藍掛椅子など、二つ三つ程よく置かれてゐる。窓の左には、オルガンがある。舞臺右手は床の間になつてゐる出入口は、右側手前と、左側とにある。左側は唐紙になつてゐて、縁側を経て母屋に通すべく、右手前の出入口は、開き戸になつてゐる。此所からは、母屋の寢間の方へ行かれる。前幕と同じ夜。暮あくときよ子欄干にもたれて、空を眺めてゐる。外は月が出て、遠山田園の景色繪のやうに浮いて、得も云へない心持がする。家にはまだ燈火がついてゐない。暫くすると浪花節を語つて窓下の路を通るものがある。其聲がうすれた頃、はな子左手から入り来る。

はな子 (入りかけて) 姉さん、姉さん、居ないの(近づきながら) 此處にも居ないのかしら、(見つけて) まあ、そんな所で何をしてるの、燈火もつけんで……姉さん一人? 清兄さんはないの?。

きよ子 大方二階でせう。

はな子 姉さん、又考へて居たのでせう。一體何をさうのべつに考へてるの。そんなにくよ／＼したつてつまらないぢやないの。燈火でもつけませうね。(ランプにつける)

きよ子 でもね、わたし、かうして獨りでぢつとして考へてるのが、一番楽しいんですわ。時をさるゝ、いつまでも／＼思ふ存分泣いて見たいやうな氣持になるんですもの。

はな子 お、いやだ、つまらない。そんなに泣いたつて、考へたつて、物はなるやうにしかなりやしないぢやないの。私しなんか、泣くことなんか眞平。泣き度くなるゝ、わざと笑つて、何もかも忘れてしまふことにきめたわ。これが私しの哲學よ。さ、面白い話でもしませうね。

きよ子 はなちゃん、本當にいゝ方ね。私し全くあなたで慰められてゐるのよ。あなたが居なかつたら、私し今頃、さうなつてゐるか分らないわ……………。はなちゃん、私を愛して頂戴ね。

はな子 えゝ、出来る丈けね。

きよ子 (はな子の手を握りながら) いつまでも？。

はな子 えゝ、いつまでも。

きよ子 はなちゃん、ありがたうよ……………。でもね(急にはな子を抱きしめて、感にあまつて泣く)

はな子 姉さん、さうしたの、何をそんなに泣くの。わたし泣いたりなんかしちやいや、私しまで悲しくなつてしまふんだもの。さ、泣かないで、歌でも歌ひませう。ね、愉快に歌ひませう。

又お父さんでもゐらしたら、叱られるぢやないの(間、まだきよ子泣いてゐる) つまらないわ

ねえ。(間)

きよ子 (頭をあけて、きつこして) もう私し泣かないわ。そして歌ひませうね……………其代り私の好きなものをね。

はな子 また『別れの曲』？(きよ子うなづく) いやね、あんな悲しい歌……………(思ひ出して) いゝわ、それでも……………

眞珠の朝露に

清き姿を

宿せる星あはれ、

露もろこもに

消え行く影あはれ……………

(二人歌ふ、悲痛を極む、樂器伴ふ)

滅び行く家

きよ子 (半にしてハタミ止める。涙はらく／＼流れて拭へぎも止まない)

はな子 (歌をやめて) あら姉さん、さうして今夜はさう泣いてばかり居るのね、何か叱られて?

ね、言つて頂戴よ……ね、何うしたの。

きよ子 何でもないのでよ。

はな子 うそ、屹度何かあるにきまつてるわ。(眼を讀まうとする)。云はなければ、あつちへ行つて、お母さんに聞かして。(行きかける)

きよ子 いけない／＼、行つちやあいけないつてば……花ちゃん、此處にゐて頂戴ね、云ひますから、ね。

はな子 (歸つて来て、腰かけて、きよ子の手を取りながら) ぢや、言つて頂戴、ね……でなけりや私しあつちへ行つて、きいてよ。

きよ子 あなた、何も知らないの、まだ?

はな子 知らないわ、わたし、今學校から歸つて来たばかりですもの、

きよ子 私しね、……叔父さん達に云つちやいやですよ。

はな子 大丈夫よ。今迄だつて何も云つたことはいぢやないの。あつて?

きよ子 (悲しげに) 叔父さんがね、いやなく所へ、お嫁に行けし仰有るの。

はな子 いやな所つて何處……ね、姉さん、何處。

きよ子 荒井のお爺さんのところ。(泣く)

はな子 まあ、姉さん、それ本當?……嘘でせう、そんなこと。

きよ子 (泣きながら) 嘘ださういふんですけ……私し、はなちゃん、さうしたらいふでせうね。

はな子 姉さん、大丈夫だわ、私しお母様に頼んであけるわ。そんな無理なことを、本當にお父さんも餘りだわ。

きよ子 (顔をあげて) はなちゃん、ありがたうよ。ですけれど、叔父さんのことですよ、一旦仰有り出したら、もう駄目よ。誰が何さいつたつて。

はな子 (今更のやうに) 分つた。それで、お父さん、お母さん、さつきから、けんかをしてらつしやるのね。(間) お父さん、また、さうしてそんな無理なことを仰有るのでせうね。

きよ子 何だか、藤井の家がつぶれるか、さうかの境目なんだから、せめて一寸行くだけでもえゝから、氣の毒だけれど、是非行つて呉れつて、叔父さん、手を合せてお頼みなさるんですもの……。

(清二登場)

はな子 兄さん、困つたわね。さうにかならないでせうか。兄さんからも、お父さんへ頼んでおあけなさいね。私はお母様に……………。

清二 僕等が頼んで、役に立つやうな親父ださういふけさね。

きよ子 本當ですわ。

はな子 だつて、そんなことを云つちや居られないぢやないの……………そしてお嫁入つて、何日のことなの。

きよ子 明日の晩ですつて。

はな子 まあ、何て急なことだらう。さうするに、此間お爺さんが来たのは、その話だつたのね、屹度……………。

清二 あれはね、お金の催促に來たのだ。あれから此方の弱點につけこんで、ぐんぐん催促するんだつて、つまりきいちゃんを人質にさういふのだね。きいちゃんが行きさへすれば、延ばしでも、少し位まけてもして呉れるんだつて。

はな子 まあ、随分いやなお爺さんね、私はお母様に頼んで來るわ。(退場)

(清二、きよ子のそばにかける、暫く沈黙がつゞく。下の路を義太夫を語つて通るものがある。一年前にこの園が、一層死んでしまふたら……………)。

清二 きいちゃん、さうきめた?

きよ子 私には、初から自分の體が自分のものではないのですもの(自棄になつたやうに云ふ、此の一語は無論二人の間に、既に此事件について 會話があつたことを想はせる)。

清二 (聊か聞きちがへて) ぢや親父のいふ通りにするさういふのだね。

きよ子 何しろ叔父さんは、此世界が、自分の爲に受け、役に立つやうに出來て居るさうしか、思つてらつしやらないのですからね。叔父さんの仰有る通りにしなければ、私なんぞの立つてゐる場所は、世の中に一尺だつてありやしないんですもの。

清二 さうさ、僕等は皆親父の意志を無視しては生きて行く餘地はないのだ……………然し兎に角、兄さんに一つ頼んで見ようか。

きよ子 皆打明けてですか。

清二 かうなつたら、もう、さうでもするより仕方がないぢやないか。

きよ子 そんなことをなさつて、私はまあ、さうでもえゝかつて、あなたはさうなさらうさういふの

です。……………それにお兄さんまで、お氣の毒だと思ひますわ。

清二 兄さんが氣の毒だって、いつまでも隠して置けば餘計に氣の毒ぢやないか。一體兄さんはそんなに一生懸命になつてゐるのかね。

きよ子 病氣におなりなさつてから、餘計に淋しいんでせう。先刻もさう仰有るんですよ、せめてお前でも私を愛して呉れなければ、世の中に誰一人、心から愛して呉れるものはありやしない、お前は私にまつては太陽だ、太陽がなければ月の私は直ぐに死んでしまふんだつて。全くお可哀想ですわ。

清二 兄さんがそんなにまで思つてゐるのに、いつまでも隠して置くのは全く罪だね。それよりか一層のこゝこ、今の中にさらけ出して、兄さんの助けを乞うたがよかないだらうか。兄さんだつて、きいちゃんを荒井の佛々爺に渡すよりか、僕のものにした方がいゝだらうと思ふね。

きよ子 だつて、さうせ思ふやうにならないのなら、結局同じこゝこですわ。そんならそれで、秘密はこゝこまでも秘密にして置いた方が、お兄さんだつて氣持が悪くなからうぢやありませんか、役にも立たない秘密を知らせて、お兄さんの一生を破滅させた上に、此家に御迷惑をかけたかなんかするのは、私としては叔父さんや叔母さんにも濟まないと思ひますわ。

清二 さうせ、然し、遅いか早いか、破裂するにきまつてゐるこゝこぢやないか、二人の間が永久に秘密にして置かれるものぢやありませんからね。だから僕はかうなつたら、一層公然持出した方が、誰の爲にもいゝと思ふがね。

きよ子 さうして叔父さんがそれをお聞きになるこゝ、あなたは思つてゐらつしやるの。

清二 聞いたつて聴かないだつて、僕は持出したからにや、それを通してしまふまでさ。ちやんこきいちゃんを僕の妻だといつて、天下に公表して、荒井の佛々爺の鼻をあげさせてやるさ。最後の手段はそれより外にやないぢやないか……………きいちゃんには、それほどの決心はないのだね。

きよ子 あなたは、叔父さんの前ぢや、何も口のきけないくせに、そんな大きなこゝこばかり云つてらして……………それに、物事が、さう簡単に解決すれば何でもありませんが、そんなこゝこをしたつて、今の場合、さうせ甘く行かないにきまつて居ます。さうだこ初から分つてゐるのに、何もそんな無理なこゝこをなさらんでも、よく考へて少しはお家の爲にも……………。

清二 家なんかさうだつてかまふもんか。僕は二男だ、さうせ此家のものぢやないんだから。

きよ子 (呆れて、次の一語をのつくり) 亂暴ね……………ぢや、あなたは、さうして、まかり違へば

御自分迄も、むざむざと葬つてしまはうござるのですね。それは叔父さんや叔母さんに對しても餘り不孝いふものぢやありませんか。

清二 ぢや、きよちやんは、一體どうしようもないふんだい。(少しぢれて) ぐづくぐづく、奥齒に物のはさまつたやうな云ひつ振りをして……………。

きよ子 (頼みなさ相に) 女も接吻を許すまでは、偶像かなんどのやうに崇拜されますがね……………叔父さんだつて、始には叔母さんでなければいふて、お貰ひになつたさうですがね。今ぢや、二言目には出てしまへ、出てしまへつて……………。

清二 ぢやあ、きいちゃんを僕をそんな薄情者だと思つてるのだね……………僕を疑つてるのだね。

きよ子 女は、心から自分を愛して呉れる男の爲なら、みんなつらいこゝでも、情ないこゝでもしますわ。死ぬこゝは死に死にでもしかねませんわ、

清二 そ、そんな嫌味らしい、謎みたいなきこ許りいつて、まさか、きいちゃんは僕に死んで呉れるこゝでもいふのぢやないだろね……………死ぬるなんか僕はいやだぜ、きいちゃんだつて本當にそんな馬鹿な眞似をしやしないだろね。生きてりやこそ、人間は面白いこゝもあるが、死んだつて何にもなりやせんからね。第一人間は死ぬる氣なら何だつて出来るぢやないか。

きよ子 (がつかりして)。全くですわねえ……………さうしていきなれば、女はいつでも犠牲ですわ。何も皆約束でせうからね。

清二 きいちゃんそんなこゝをいふのは、つまり僕の心が分らんからだ。本當に僕を愛しないからだ。犠牲はお互ぢやないか。何が約束なんだね……………(きこまでも聞きまぢがへて) きいちゃん、それぢや荒井の爺のあの黻面をさすつて、榮華に一生を樂まうこゝいふのだね。

きよ子 女が一旦思ひつめるこゝ、みんなものだかは、あなたにはよくお分りにならないでせうからね……………(諦めたやうに) けれどそんなこゝさうだつて、もうかまやしません。

清二 怒つたね。腹が立つたら、誤るから許してお呉れ、ね、きいちゃん。何もさう悪い氣でいつたのぢやないから(機嫌をさる) ね、悪かつたら、今のは取消すから、許してお呉れね。

きよ子 さうして男の方は、何でもお取消しなされば、それで何事もなかつた昔と同じになるのですけご、女の一生はね……………。

清二 そりや僕だつて、女の價値も命も其處にあると思ふからこそ、きいちゃんに純潔を求めてるんぢやないか……………。それに僕はきいちゃんより外に、心から愛するものはないんだからね。

きよ子 あなたの、その口車に乗せられて、不幸に泣いた女が、これまで一人や二人ぢやないんで

すつてね。

清二 でも今までは、皆僕の思ふやうにならなかつたのだもの。然しきいちゃんはこんなことがあつても……。

きよ子 あなたは矢張まだお坊ちやんね。

清二 ぢや、一體どうすればいいのだね……(思ひついたやうに) それぢや、かうしようか、西村の叔父さんの所へ行つて、智恵をかりて來うか。でなけりや、僕きいちゃんに濟まないんだもの。

きよ子 いゝえ、つまり私が馬鹿だつたんです。私は決して誰も恨みはしません。私の運命は、もう始からきまつてるのですから、どうなつても、かまひません。つまり、ごつちにくろんだつて、一寸先は眞暗なんですけぢ、あなたには、まだ立派な前途が輝いてるんですからね。何も濟むも濟まんもありませんから、私なんぞにかまはないで、どうぞ御自由にね。……

清二 ぢや、どうしても僕をすてるごいふんだね。

きよ子 (失望して) 私はもう、何の望もない身ですからね……けれぢ、決してあなたに、御迷惑をかけるやうなごきはしやしません。私の力で出来る丈け、皆様に一番都合のいゝやうにし

かしませんからね。さうするのが、せめてもの、皆さんへの務なんですから……女ごいふものは、どうしてかう操人形みたいなものでせうね。

清二 僕にはもう、どうしていいんだか、ちつとも分らなくなつた。

きよ子 (耳をそばだて) 誰か來ますわ、叔父さんでせう、見つかりでもするご大變ですから、あつちへ行きませうね。さ、早くね。

(清二急ぎ右手から退場。入れちがひに、他の入口から主人兵藏登場)

兵藏 本當に、ごいつも此奴も、祿な奴は一人も居りやせん。(丁度出ようとするきよ子にバツタリぶつかる。兵藏は可成酔ふて居る。)

きよ子 あら(兵藏に睨まれるご、出るごが出来んで、ぢりくご退ぞく)

兵藏 (ぢつご睨みながら) きよ、お前は此間、信用組合へもつて行つた金はごうしたのだ。ゑ、すてたのぢやあるまいの、すてたのなら、何故今まで、黙つて知らぬ顔をして居るのぢや。まさかお前が誤魔化したのではあるまい。さ、ごうしたのだ。

きよ子 ごうもすみません。

兵藏 只すみませんでは、分らんぢやないか、(腰をかけながら) ま、こつちへ來い、もつごつ

ちへ寄れ、來なさいといふたら、來るものぢやぞ(きよ子近づく) お前は今まで此處で何をし
とつた。え、誰か一處に居つた?

きよ子 (顔をさけて) 他には誰も居りませんでした。

兵藏 誰も? はあ、清二の話し聲がしつたやうぢやがの(きよ子ぎよつとする) まあ、そんなこ
こはゑゝ、掛けるがえゝ(きよ子腰を下ろす) 先程から頼んだことは、返事はごうぢやい。無
論承知ぢやらうとは思ふが、萬一お前が承知して呉れんさなるさ、それこそ、全くわしが困る
ばかりでなく、先も云ふた通り、此藤井の家は滅茶苦茶になつてしまふのぢや。まさかお前も
自分の世話になつた叔父の家を、みすく打潰してしまひたいことはなからうと思ふが。

きよ子 私し、何ほ何だつて、そんなことを……

兵藏 さ、さ、それぢやからこそ、同じことなら、ちやんこ承諾して呉れといふのぢや。あゝして
向からは、もうちやんこ結納も何も屈いて居ることぢやし、今更きんなことがあつても、變換
なきする譯に行かんからの、(たみ子登場) そのさころをよく考へて、ハイと一言いふて呉
れ。わしがかうして頭を下けて頼むのぢやから、さうぢや、うんといふて呉れんか。

たみ子 そんなことを仰つたまで、こればかりはさう急に返事が出來るものかの(きよ子に云ふ)

兵藏 下らんことをいふな、(きよ子に) お前がさうしてもいやさいへば、わしは明日の晩までに、

三千五百圓だけは、是非現金でこさへて、荒井に返すか、さもなければ、うちの家も精米所も
明神下の家屋敷も皆譲渡してしまはなけりやならん約束になつてるのぢや。私しも色々工夫
はして見たが、さうしてもそれが思ふやうに行かんで、困つた揚句に、お前にかうして頼むの
ぢや。お前も無理な叔父さんだと思ふぢやろけさ、その處をまけて、叔父さんを助けると思
うて、せめて一寸行く丈けでもえゝから、行つてくれ。さうしたら、後はまたさうにでもなる
のぢやから。

たみ子 それかつて、何もさう急に明日の晩なんかにせんでも、最少し日取りを延ばしたつてえゝ
ぢやありませんか。きよ子だつて、その中にや又なんとか考もつきませうし……せめて二三日
位は延ばすやうに、先方へ掛合ふてお見になつたらえゝでせう。(かける)

兵藏 さころが延ばしゝして、せつばつまつて、仕方なしに、明日さいふことになつたのぢやか
ら、もう何といふたつて仕様があるものか。

たみ子 延ばしゝしたさいふても、それはあなたが借金の期限を延ばしゝなかつたので、何も
奥入の日取をお延ばしになつたのぢやありませんまい? (新一登場)

兵藏 そんなごきは、云はんでも分つてらあ。出来るごきなら、抵當が流れんやうに〜ご、色々心配した揚句のごきぢやないか。若しかあの抵當を流しでもして見い、家のものは明日の目から皆乞食にならんやならんぞ。

はな子 (外から) 姉さん〜、一寸(きよ子退場)

新一 お父さんはつまり人間を質に入れて借金の帳消しをして貰はうごなさるのですね。自分の政略の爲に、人の子を犠牲にしようごなさるのですね。

兵藏 馬鹿な、日本の結婚に、政略でない結婚が何處にあるか。

新一 さうです、あなたもその御多分に洩れないで、只三千五百圓ごいふはした金の爲に、女を一人奴隷に賣らうごなさるのですね。

兵藏 女一人を奴隷に？ 女が男の奴隷になるのは當り前ぢやないか。今の世に奴隷でない女が何處にあるか。あるならいふて見い。萬人が萬人大方みな男の奴隷ぢやないか。立派に獨立した自由な女が何處に居るかいふて見い。美しい奴隷は日本の女の運命ぢやぞ。

新一 その可哀想な運命から、自由に解放してやるのが、立派な正しい道ではないですか。

兵藏 幾ら正しい道でも、急にそんなごきをして見い、女はみな死んでしまはうぞ。第一さうして

食ふのぢや。狎を見い〜。狎は人間に飼ひならされた立派な奴隷ぢや。狎が解放されて生きてゆけるか。女は狎ぢや。狎は矢張狎ごして扱はれるのがいよのぢや。

新一 女ご狎ご一處にするのは無茶です。人間には自由意志があります。

兵藏 人に飼はれてゐるものに、何の自由がある。自由にはやはり金が入るよ、金が。貴様のやうに、一文なしで渡つて來た奴が、何をそんなごきをぐづ〜いふ権利があるか。それに人が云はして置けば、三千五百圓がはした金だごは何だ。生意氣をいふなら、明日の晩までに出して見い。

新一 (右手のソオファにかける) え、出しますごも、それつばかりの金が何です。

たみ子 本當にお前が一つ心配して見いされるごえよ。

兵藏 黙れ、三千五百圓はさて置いて、只の百圓でも貴様のやうな意氣地なしに出来るものか。馬鹿奴。今時高利貸か何かなら兎も角も、百圓の金だつて抵當なしで、貸して呉れる奴が一人でもあるご思ふか。おれは貴様が大學を出たら、ちびり〜でも儲けた金を家へ送るだらうご思ふからこそ、それを目的に、折角汗水たらしてためた田地を、抵當に入れては、月々貴様に三十圓四十圓ご送つてやつて居つたのぢやないか。それに何ぢや、貴様は卒業してからも總一文

送らんばかりならまだしも、やれ洋服代ぢやミか、やれ運動費ぢやミかいふて、(新一咳をする)五十圓百圓宛送らせミいて、其揚句にや、體を臺なしにして、藥ばかり吞んで居るミは一體何のミこぢや。

たみ子 そんなミこを仰有つても、體の悪いものは仕方はないぢやありませんか。

兵藏 (嘆息しつゝ退場せんミして) あゝおれは自分の息子を學問させて、老後を楽しまうミ思ふたが、兄は馬鹿になるし、弟は野良つぼうになるし……あべこべに何もかも滅茶くになつてしまつた。

新一 世間のゑらい人々ミ同じやうに、つまりお父さんが、御自身の爲に、子供に學問させようミなさつたのが間違です。

兵藏 (立歸りかけて) おれの爲は家の爲ぢやないか、貴様はそれぢや何の爲に學問したのぢや。

新一 私は金を儲ける爲になんか、學問しやしません。只人間を作る爲にしたのです。

兵藏 そんな三文にもならん人間を誰が作れミいふた。

新一 さうですミも、學問其物は一文にもなるものぢやありません。

兵藏 (又腰を下して) 同じ學問しても西山の卯一を見い。毎月三十圓五十圓づゝ送つて、盆暮に

や二百圓三百圓もよこすミいふに。何故學問するなら、哲學ミか文學ミか、下らんものをやらんで、卯一のやうな眞似をせんのだや。

新一 あの男は金を儲けたつて、家へ送る丈けで、使ひ路も何も知りやしません。あんな下等な人間ミ比べられて堪るものですか。

兵藏 金を儲けて家へ送りや、それが一番ぢやないか。卯一は貴様のやうな馬鹿ミちがつて、孝行者ぢや。あんな息子をもつた親は仕合ぢや。貴様でもせめて法科でもやつて、官吏にでもなりや、頭の下け方一つぢや、知事位にやなれように。下山の勇だつて、内閣でも變りや、今度は次官になるにきまつミるが、同じ家屋敷まで賣つても、せめてあれ位になりや兎も角も、學問して、しこたま金を使った揚句に、やれ公共事業で御座れの、やれ慈善事業で御座れのミ、生意氣に金のない山師の眞似なんかして……一體貴様は餘り賢うなり過ぎたてや……おれが最初からいふて居つたやうに、師範學校へでも入つて、眞面目にやりや、此んなミこになりやせんに。齋藤の銀なミは矢張懶巧だ。今ぢや坂田の校長をして、五十圓位取つミるぢやらうが。

たみ子 お前の留守にや、のべつに此話が出るんぢやからの。

新一 お父さんはまるで、金や地位で人間の値をきめやうミなさるんですからね。

兵藏 分つたこぢや。金のある者や、地位のある者を見い。第一威勢がちがはあ。威勢がよければ自然こ人も頭をさげようが、貴様のやうな貧乏たらしい顔をしてあるいて、誰が相手にするか。一文でも貸し手はありやせんから。

新一 兎に角貸し人があるかないか、試して見ますから。明日の興入はもう少し延ばして下さい。屹度何さかして見せます。

たみ子 一日や二日延ばしたさいふて、こつちに都合があるからこ云や、何でもないでせう。……それや悪いこを延すこ云ふのなら、善うないかも知れんが、え、こを延すのぢやから、何でもないぢやありませんか。

兵藏 (遂に激して) 貴様等は揃ひも揃ふて、そんなこをいふて、母子して、此家を潰してしまはふこでもないふのか。そして明日から皆で首へ袋を吊らうさいふのか。おれに六十面を下けてそんな情けない真似が出来るこ思ふか。此村では一番の舊家で、代々庄屋までしたものが、首に袋をつ、たら、さいつも此奴も皆手を叩いて笑ふぢやらう。

新一 人の子を賣つて家を買つたら、猶のここ人が笑ふでせう。

兵藏 此家はおれが二十五の時たみを貰ふ前の年に建てかへたのぢや。おれは自分の腕で此大きな

家を建てたかこ思ふこ、嬉しうて、向の土手に上つて嬉し泣きに泣いたものぢや。

たみ子 又始まつた(立つて窓の所へゆく)。

兵藏 それからさいふもの、おれが一生懸命で働いたので、此家だけはだん／＼盛えて来たが、その間に、山根だの、吉田だの、高橋だのは、反對に次第に衰へて、いつこはなしに、此村から消えてしまふた。おれは、さういふ家の屋敷跡を通る度に、いつも大聲で笑はずにや居れんかつたが、今度は自分が笑はれんにやならんやうになつて来た。……考へて見るこ、情けない夢を見たものぢや、全く自分の子に欺されたのぢや。

新一 さう悲觀なさらなくこも、此所が駄目なら、また他の處へ行つて、新しい生活を始めたらいぢやありませんか。何も此んな所へ執着しなくこも、色んな所へ行つて楽しく暮らしたらいでせう。人間は何處へ行つても、暮らさうこ思へば、いくらでも面白く暮らせるものです。

兵藏 貴様は、方々の學校を馳け廻つたものぢやから、そんな香氣なこをいふて居るが、おれは此土地が離れたくないのぢや。おれは先祖の墳墓をすて、知らん他國で行倒れなんぞになつて、死恥を暴すのがいやなんぢや。

たみ子 そんなこをなさらんでも、人間たべる位は、何處へ行つたこて何でもありやしません。

兵藏 まだ其様な馬鹿なことをいふ。人間は食ふことが一番の事業ぢやないか。世の中の大抵の奴等は、皆食ふことばかりの爲にあせつて居るんぢやぞ。お前は武士の娘ぢやから、いつもそんな瘦我慢ばかりいふてるが、百姓が汗水たらして作つたものをこき上げて、武士は食はね高揚子なんぞこぬかして、坐つこつて、横着の晝で食うて居つた武士の子に、食ふことが高け六ヶ敷いことだから分かるか、まあ、試しに二三日食はんで居つて見ろ、さうすりや味が分らうから。

たみ子 え、居りますとも、二三日位何でもありやせん。一週間や十日たべんたつて、人間は死にやせんから。(オルガンの前へかける)

兵藏 一人として、おれの身方になる奴は居りやせん。折角可愛がつて育て、やつても、さうかつか、西東が分つてくるさ、表面丈けは甘いことをいふてるが、何時かはなしに、皆親から離れてしまふ、……そんなことがあつても、せめて女房丈は、しまひまで自分の味方をして呉れると思つて居つたが、それさへ自分勝手な路を歩いて居るのぢや、……おれは矢張一人ぢや、……本當におれの此淋しい心を静めて呉れるものは、此家ばかりぢや。おれは矢張此家が懐かしい。そんなことがあつたつて、此家から離れるものか。おれは此家で、静に死ぬるのぢや。

さうぢや(立つて歩きながら) 此家を人手に渡したりなんぞしちや、第一先祖にすまんで(左手の方へ行つてかける)

新一 然し家なんか何時だつて又買戻すことが出来るが、人間は一旦傷がついてしまへば、それ切りですからね。

きよ子 (恐るゝ登場して) 叔母様お風呂が沸きました。

たみ子 本當にの。それはきよにして、得心でゆくのなら、まあよからうけさ、何さいふても、あんなお爺さんぢや、全くの。

兵藏 (きよ子をならむやうにして) 年位何ぢや。あの爺だきて、いつまで生きるものか。さうせ長いことは有りやせん。さうすりや、又他へ縁附かうさうしようさ、兎に角、一生樂に行けるさいふものぢやないか。何も貴様等がぐづぐづいふて水をさへんでも、きよさへうんさいやそれでえ、ぢやないか。きよだつて十歳や十五の子供ぢやあるまいし、二十二にもなりや、おれが此れ丈けいふのぢやから少しは物が分りさうなものに。

きよ子 私一人の爲に、皆様に此んな心配をかけてさうもすみません。(きまり悪げに中央の卓の處に立つてる)

兵藏 お前は何時でも、すみません／＼で通さうとするが、頭さへ下けて居れば世の中が通ると思ふか、お前がさうかかうか一人前の人間になつたのは、一體誰のお蔭ぢやと思ふ。誰のお蔭で人前で口がきけるやうになつたのぢや。きたない鼻たれ娘を、誰がさうしてやつたのぢや。女學校まで卒業したのは、誰の力ぢやと思ふ。さ、いつてみい。(中央へ進んで来る。月暗くなる、時々烈しい風)

きよ子 皆叔父様と叔母様のお蔭で御座ります。

兵藏 馬鹿！ そんな面をして、そんな圖々しいことをいふのぢや、頭をあけて見い。……そ、そんなことは云はんでも分つさるぢやないか。横着者奴が、人がやさしくすればつけ上つて、よくもさういふへらず口がきけた者ぢや。此恩知らず奴、いざいふ場合になつて、何故恩人を救ふことが出来んのぢや。何故参りますと一言いへんのぢや。(きよ子伏せて泣く)

たみ子 そんな無理なことを仰つたまで……

新一 きいちやん、そんなことがあつたまで、行くなんぞいふのぢやないよ。

兵藏 邊からへらず口をたよくな。何が無理ぢや。叔父姪の間いふた處で、つまりが親も同然ではないか。いや親よりも大切な恩人ぢやないか。其恩人の急を救ふために、普通の人間が、こ

れ丈け望うでもかなはん所へ、嫁に行けさいふに、何の無理があるか。世の中にや、親や恩人を救ふ爲に、泥水へ身をはめ込むものさへ澤山あるぢやないか。……(急にやさしく)さ、きよおれが斯うして掌を合せて頼むから、さうぞ行くといふて呉れ、さ。

新一 決して行くなんぞいふのではないよ。

たみ子 あなたは、前には、きよは新一と一處にするを仰つて居つたぢやありませんか。

兵藏 それぢやからこそ、新一がまだ學校に居る頃から、何度その話を持出したか知れんが、いつもいやだといふたぢやないか。なぜそれぢや、あの時はいふて式でも擧げなかつたのぢや。

新一 あの時はまだ勉強したいといふ野心が強くて、逆もそんな氣にやなれなかつたのです。(歩く)

兵藏 あの時すなほに結婚しときや、何も此處こゝにならずに濟んだかも知れんが、今ぢやもう間には合はん。

たみ子 でも世間ぢや、皆まださう思つて居るかも知れません。

兵藏 世間が何と思つて居らうが、世間は世間、こつちはこつちぢや。世間は自分の爲にならん限りは、悪くいはん損位に思つて居るんぢやから、さうせ祿なことを云ひつこはありやせん。

おれはこんなことがあつても、最後まで自分の路を歩いて行くんぢや。

新一 (かけて) 勿論それは御勝手でした處で、他人に迷惑をかけることだけは、よして貰ひたいものです。それに、さうです。あなたは前には荒井の家は血統がよくないといつて、よく悪口を云つてらしたぢやありませんか。そんなことはもう、金に眼が眩んで、忘れておしまひになつたのですね。

たみ子 癩病も、犬神も、お金の御威光にやかなうまいからの。

兵藏 生意氣をいふな。生意氣をいふ奴は、皆出て行つてしまへ。直ぐに出てしまへ、~~もう~~も此奴も、皆ぐるになつて、おれを亡ぼさうにして居やがる。

たみ子 え、出て行きますとも、さ、きよ一處に行かう (立かける)

兵藏 きよを連れて行かんでも、出て行くなら勝手に一人で出て行け。

たみ子 いゝえ、連れて行きますとも、さ行かう (きよ子を引ばつて行かうとする。きよ子泣く。

また風ふく)

兵藏 (怒鳴りつける) 何をする。一人で行けといふに……(餘りに聲が大きかつたのでたみ子驚いて暫くほんやりしてゐる。兵藏は立つて入口にのぞいて) はな！ はな！ (歸つてかける)

はな子 (登場) お父さん、何です。

兵藏 行つて酒をもつて来い、酒を。おれは氣がくさくして、酒でも飲まずに居れなくなつた。

はな子 お父さん、そんなにお酒をあがる毒ですわ。又此間のやうに、打倒れたりなんぞなさる

ご大變ぢやありませんか。

兵藏 かまふもんか、持つて来いといふたら、もつて来い。こんな時に、酒でも飲まんで堪るか。

酒はおれのたつた一人の友達ぢや、おれは素裸にせられて、のたれ死にするより、酔拂つて此儘往生した方が餘程ましぢや、まご／＼して居るさ、酒も飲めんやうになつてしまふ。持つて来いといふに(はな子退場)……そして行きたい奴は、さつさ出て行つてしまへ。

たみ子 (きよ子を引っぱりながら) さ、行かうといふに(きよ子泣く)

新一 何も泣くこゝは無い、(立つて促して) さ、きいちやん行かう。

兵藏 きよを連れて行きでもして見い。

きよ子 (兵藏の前に進み出て泣聲で) 皆私が悪いので御座います。……私一人の爲に皆様に御迷惑をかけて済みません……叔父さん、私は参ります。(椅子にふせて劇しく泣く)

兵藏 何、行く? お、よく云ふた。よく云ふてくれた。(満足の深い大きな笑) お前は矢張お

れの姪ぢや。それでこそ、おれが今迄面倒見てやつた甲斐があるさういふものぢや。本當によく行くさういふて呉れた。おれは嬉しい、難有い。おれは斯うしてお前にお禮をいふぞよ。さ、誰か酒を持って来い、おれは祝はにやならん。此様な嬉しいことがあらうか……これで、おれは助かつた。此家も助かる。お前も仕合せぢや、のう、きよ。……此塵目出度いことはありやせん。(たみ子に向いて) そんな所にほんやりして居らんで、早く酒でも持つて来い。

たみ子 きよ、お前は本氣でゆくさういふのかへ、え、きよ?

兵藏 馬鹿な、三つや四つの子供ぢやあるまいし、本氣でなうてさうするか、のう、……それよりか、酒をもて来いさういふに、何故はやくもて来んか(きよ子出て行く)

新一 お父さん、あなたは本當に恐ろしい方ですね。自分のお腹をこしらへる爲に、姪まで賣つてしまふなんて。まあ考へて御らんさない、貴方一人の喜の爲に、何人の涙がしほられるのでせう。貴方は大勢の哀れな者共の涙を満々盃について、それで自分一人の満足の酔を買はうごなさるのです。他人の悲の涙も苦しい膏汗も、あなたにさつては大方甘露のやうに甘いのでせう。何さういふ恐ろしい方です。

兵藏 早く酒をもて来いさういふに、はなはさうしたのぢや。

新一 然しお父様、少し氣を落着けて考へて見て下さい。太陽は決してあなた獨りの爲に照り輝いてゐるのではありませんよ。貴方は自分の思を通す爲には、誰でも犠牲にすることをお厭ひになりませんが、少しは犠牲になるものゝ事も、考へておやりにならなければいけません。それは、本當に犠牲になる丈けの價のあることなら、私誰だつて、決してそれを辭しはしません
けれぎね……

兵藏 酒をもつて来いさういふに、まだもつて来んか。誰一人おれの云ふことをきくものがないのか、おれは今體の中に沸きたぎつて居る喜に酔ひたいのぢや。

新一 其興奮や酔は直ぐに醒めます。醒めた時に取返しつかないことのないやうにするのが、眼のあいた人間のすべきこととせう。五十八さいへば丁度私の歳の倍とせう。歳から云へば貴方には私の倍もの分別があつても……

兵藏 うるさい、やめて呉れ。おれは貴様から、そんなお説教見たやうなものを、聞きたくない。それより早く、酒でも持つて来い。持て来いさういふに、持て来んか……よし、持つて来なけりやおれが取りに行く(よろしく退場)

新一 お母様、結局さうしたらいゝとせう。可哀想にさうしたつて、きよ子をやる譯にや行きませ

んからね。

たみ子 さうさ。矢張さつき話したやうに、西村の叔父さんにも、中へはいつて貰うて、今夜の中に、お前ご式でも舉げでもするより仕方はあるまい。

新一 それごも、あれをさつかへ隠まつて貰つて、暫くほてりの冷めるまで待ちますか。

たみ子 そんなことをしたとて、お父様のこころぢやからの……

新一 ぢや、もう仕方はないから、お母さんの仰有るやうに非常手段で片附けてしまひませう。さ

うすりや、何さいふたつてね。兎に角西村の叔父さんのこころへ一寸行つて來ます(退場)

きよ子 (入れちがひに前の入口から)。叔母さん! (もたれかゝつて泣く)

たみ子 お前はまあ、さうしたさいふのたえ、本當に行く氣になつたのかへ(きよ子泣きながら否定の振をする) それぢや、かうなつたら仕方がないから、今夜の内に直ぐに新一ご婚禮してしまふたらさうかい。無論異存はありやすまいの。さうすりや、何ほう荒井でも、それ切りぢやし、叔父様の方はまたさうにもなるから……

きよ子 (やゝあつて顔をあげて) 叔母様にいろいろ御心配をかけてすみません。ですけれど、私し……

たみ子 (不思議に思ひながら) へえ、いやだごお云ひなのたえ、お前も物好きな人ぢやの、……

ぢやお前本當に行く氣になつたのかえ?

きよ子 それや、行かんですめば此んな結構なこころはありませんけご……

たみ子 だからこそ、行かんですむやうにして、あけやうさいふてるぢやないか。

きよ子 でも私し……

たみ子 兄さんご一處になるのは、いやだごお云ひなのたえ。さういふ譯だえ……新一ぢやまだ不足だごお云ひなのたえ。

きよ子 (かける) いゝえ、そんなこころはありませんけれご……

たみ子 それぢや、あれに病氣があるから、いやごでもお云ひなのたえ。でもあれの病氣も今ぢや大方治つたさいふぢやないか。それでもお前、いやさいふのたえ、

きよ子 私し本當にさうしたら……(泣く風ひごくふく。)

たみ子 まあ、さうしたご云ふのたえ、さう泣いてばかり居つちや、分らんぢやないか。さあさうなりご返事をおしよ、早くせんにや、折角お前の爲にした心配が、何もかも駄目になつてもふぢやないか。何故新一ごは一處になれんさいふのたえ、これ、きよつたら。……

きよ子 (きぎれんに) すみません、御免なさい！ (新一登場咳をする。)

たみ子 すみません、何のこゝだえ？、まさか、お前は清二と淫弄奔もしるのぢやあるまいの……

(主人兵藏徳利をさけてうれしげに登場。花子あこから追かけて来る)

はな子 お父様、いけません……

兵藏 (徳利から口飲みをしては) うまい、……何かいふ甘い酒ぢや、今夜のやうな酒の甘ま

いこほはない。(ひよろり、踊りつゝ次の句を口ずさんで頻りに飲む) 安心の酒、喜の酒、

甘露ぢや、ハハ、

たみ子 きよ、なぜお前は返事をせんのかえ？ 黙つて居るを、大方さうぢやらうの、

屹度さうなのに違ひない。

新一 (獨言のやうに) そんな恐ろしいこゝがあつてなるものか。ね、きいちゃん、そんなことは断じてないといつておくれ。

はな子 (追かけながら) お父様、いけません、そんなにお飲みになつて、又病氣でも出たら仕様がないうちやありませんか、(徳利をつかまへて) お貸しなさいといつたら。(引ばる)

兵藏 (徳利をうまくこつて) いや、さつこいしよか、ハハ、……皆来い！ 皆来て飲め

(踊るやうな態度で飲む)

たみ子 さ、何故お前は黙つて居るのかい。

新一 きいちゃん、そんなこゝはないといつてお呉れ。さ、断じてないを誓つておくれ……

兵藏 な、何を誓ふのぢや、一度いふたら分つる。下らんこゝをいはんで、さ、飲め、(自分

丈けのむ)

はな子 お父様、徳利をお貸しなさいといふに(つかむ)

兵藏 ハハ、……此を貸してさうなるものか、此福の神を、中から命の水が出るのぢや、喜の水が

湧くのぢや、ハハ、

たみ子 お前のやうなひきい人が、何處の世界にあるものか、よくも人々をだしぬいて……此

嘘つき、淫奔者！ (きよ子毒をのむ)

兵藏 誰が嘘つきぢや！ きよがかい、きよがさうして嘘なんぞつくものか、え、子ぢや、のう

(近よつて撫でる)

たみ子 本當に何かいふ横着な娘ぢやらう。

新一 きいちやん、誓つておくれいふじい!

きよ子 (苦しみつゝ) 叔母さん、お兄さん!、すみません (血を吐く) 御免なさい。

はな子 あれ! 姉さんが、(きんで行つて介抱する、先程から蔭で困つてゐた、清二もかけつけ
る)

清二 きいちやん!

きよ子 (顔をあげて) 清二様! (嬉しさうな笑をもらし、清二にもたれて死ぬ。風ひびく吹く)

清二 おゝ (叫んで悄然として、彼方にむく)

(皆々呆氣にこられる)

兵藏 (漸く気がついて) 畜生、此不孝者奴が! (徳利をさけた儘、けいれんの爲に倒る、皆々介
抱する。暫く前から鳴いてゐた梟、また盛に鳴く。風強く吹く。)

(静に幕)

大名の戀 (一幕)

人物

大名 松平忠直

若葉の方 千代(吳服屋三衛門の娘)

家老

近習 松田三之丞

老女 松ヶ枝

腰元 甲

腰元 乙

金三郎 千代の許嫁(萬屋金兵衛の息)

中間 其他 舞女等大勢

時

徳川時代——櫻満開の夜

場所

大名御殿の大廣間

大名の戀

櫻の宴の場にて、舞臺一面大廣間を見せ、それ／＼程よき所に坐す。鼓など樂の音がきこえ、四五人の舞女が舞うてゐる所にて幕あく。

若葉の方は、敷日前御殿内に強奪されて來たばかりにて、今夜は楽しむ様子なく、甚しく不機嫌の態。

大名 若葉さうぢや。面白いではないか。あの舞姫達の體の働き方の柔かさを見い。まるで骨がないやうぢや。花の上に舞うて居る胡蝶のやうではないか。見て居るこ、うつこりこして、魂が抜け出しさうぢや。自分までが舞ひたうなる。手が獨り手に動き出しさうになる。足が躍り出しさうになる。おゝ、今夜のやうに楽しいこことはない。何こいふ心地のよい夜だ。それなのに、若葉、そちはさうして、さう沈んだ顔ばかりして居るのぢや。そちは舞が好きだこいふたではないか。そちの沈んだ心を、浮きたゝせる爲の今夜の宴ぢや。さ、楽しいこいふてくれ。面白いこいふてくれ。そして心から笑ふてくれ。これ若葉、そちは何故笑ふてはくれぬのぢや。

老女 若葉様は、大方うつこりこして、舞に見られてお出でなさるので御座りませう。

腰元甲 まるで彫刻でもあるやうに、ぢつこ見つめておいでなされます。屹度御前様のお情に、

酔つておいでなさるので御座りませう。

大名 全くさうかも知れない。予にもさうであるやうに思はれる。いや、たしかにさうであらう。

予は本當に幸福ぢや。大方予ほどの幸福ものは、今の世に二人こはないであらう。

一同 おめでたう御座ります。

大名 おゝ、予も満足ぢや。若葉、そちもさぞ満足であらうのう。……これ若葉、そちはなぜ黙つてばかり居る。何故に返事をせぬのぢや。歡極まつて茫然とするこいふこもあるが、そちはさうして返事をせぬ。何故黙つて居る。いや、此樂しさに、何故楽しいこはいはぬのぢや。何故に笑顔を見せてはくれぬのぢや、(舞が終らうとするのを見るこ) おゝ止めるな／＼。もつこ舞へ。もつこ舞へ。若葉が飽き足るまで舞へ。満面に笑を湛へるまで舞へ。そして春が、天地が、笑に崩れて、溶けてしまふまで、舞うて舞うて、一夜を舞ひ通せ。

若葉 いゝゑ、／＼、もう、舞ふのはやめさせて下さりませ。

大名 なに？ 舞ふのをやめさせろこ。そちは舞がいやであつたのか。飽いたのか。さうであつたか。それならば、何故早く、さうこは言はなんだ。では舞ふのをやめい！……(一同やめる、退く) さうであつたか、それはまた、さうしたこいふのぢや。そちは舞が好きではなかつたの

若葉 きらいで御座ります。

大名 さようか。きらいであつたのか。それでは、その代り、皆のものに歌はせてやらうか。

一同 それがお宜しう御座りませう。皆で聲をそろへて、お歌ひ申ませう。

大名 それがよくらう。何を歌ふか、何か若葉の好きさうなものを考へて見い。

近習 何がよろしう御座りませうか、櫻の下で歌ひまするには、陽氣なものがよろしう御座りませう

家老 それこそ、しんみりいたすやうなものがよろしいかも知れませぬ。陽氣な、華やかな夜には

却つてふさはしいかも知れませぬ。

大名 何でもよい。ぐづ／＼せず。早く歌へ。

一同 畏りました。(歌ひかけようとする)

若葉 歌も、きゝたう御座りませぬ。

大名 何? きゝたうない? おゝ、では歌ふのは止めにせい。(一同席に直る)それでは、若葉そ

の代りに何をさせようか、そちが望をいふて見い。望さあらば何でもさせてやる。そして今宵

の此氣分に、ふさはしい世界を創り出してやらう。あれを見い。櫻の花は、今日が満開ぢや。

一輪のこらす開ききつて居る。月は朧ろけに、雲の帳りをかゝけて、そちの美しさを恥しさうに垣間見てゐる。さうぢや、世の中に女の数は多いが、そちの顔をまごもに見得る女が、何處の世界にあるだらう。

家老 全くかうして、若葉殿のお側に居りますご、何だか私共まで此世に居るやうには思はれませぬ、天國か、極樂にでもまるつて居るやうな心地がいたしまする。

近習 夢の國でもさまよつて居るやうで御座りまする。

老女 ゆかしい香りが、天地に満ちて居るやうな氣がいたしまする。

腰元甲 うつさりこして、酔うたやうで御座りまする。

大名 さうぢや。伽羅を焚いても、若葉の側に居るやうな心地はせぬ。夢で見る天女も、若葉のや

うに美しうは思はぬ。若葉の前では總てのものが曇つて見える。輝がなくなる、香りが失せる。

若葉は人間ではないかも知れぬ。神かも知れぬ。若葉の側に居るご、力が湧く。喜が沸く。身

も心も生き／＼して来る。さうぢや、若葉は予の生命ぢや。力の源ぢや。一切の望ぢや。若

葉が笑へば、予の心に望が溢れて、喜べは、全身に輝を覺えるが、あゝして悲しけな、沈んだ

顔をして居るご、心が減入るやうぢや。此では、もしか若葉が怒りでもするご、予は即座に死

んでしまふかも知れぬ。若葉の一顰一笑は、誠に予の生死をつかさきつて居る。おゝ、そちがそのやうに黙つて居るこゝ、予は病氣になりさうぢや。さ、若葉、予が心からの願ぢや、笑ふて見せい。笑ふて呉れ。

若葉 私しは可笑しう御座りませぬ。

腰元甲 若葉様、ここがお悪いのでは御座りませぬか。

老女 ほんに、さうも御氣色がすぐれぬ御様子、陽氣のお障さもでは御座りませぬか。

腰元乙 お藥でも持て参りませうか。

若葉 全く陽氣の加減かも知れませぬ。物をいふさへ厭でなりませぬ。

老女 ひよつこするこゝ、餘りに物事をお考へなされ過ぎるせいかも知れませぬ。お體にでもさはる

こゝ、大變で御座ります。それよりか、お氣晴しに、矢張何か面白い遊び事でも御所望なされては如何で御座りませう。

家老 それがおよろしう御座りませう。私共に出來ますことなら、如何様のこゝこなりこも、致しませう。

近習 本に、それがおよろしう御座りませうこも。若葉様がお沈みなされては、御殿の中が、火が

消えたやうで御座ります。

大名 いや、天地に光が減じたやうぢや。予の心も暗うなりかけて來た。折角の喜の酔もさめかけて來た。さ、何なりこも所望するがよい。若葉、そちが望みあらば、例へ何事であらうこゝ、心のまゝぢや。誰一人それを遮ぎるものはない。何一つ出來ぬこゝこはなからう。

家老 たごへ水火の中にて厭ひはいたしませぬ。

近習 いや地獄の中ぢやきて避けはいたしませぬ。

大名 若葉。皆もあのやうに申し居る。欲しいものを望んで見るがいゝ。予は力の限りを盡して得させるであらう。かまはない、如何なる大仕掛の遊び事でもよい。一同は即座に、そちの望によりて働き出すであらう。それこもまた、予の手の中にあるものならば、如何なる金銀財寶でもよい。その中の一番大切なものでも、そちが望みあらば喜んでこらせるであらう。いや、其多寡なきも決して問ふ所ではなからう。そちが父は既に武士に取立てつかはすこゝこにした。そして五百石を取らせるこゝこにいたし置いたが、それで足らぬこゝこあらば、千石を得させるこゝこに取計らはせるであらう。もし又此屋敷が氣に入らぬこゝこあらば、直ぐに望み通りの館を建てさせるこゝこにしよう。何處へでもよい。そちの望の所へ建てさせてやらう。玳瑁の櫛、鼈甲の簪、

金襴緞子、如何なるものでも、そちが望にまかせて贅澤の限りを盡すがよい。そちの身を飾るごあらば、如何程高價なものを以てしても、足るごころではあるまい。見る眼が眩むまでに飾り立て、見るが善い。日月の光を争うまでに輝かして見るがよい。そして予の姿が見すほらしくて、側にもよれぬやうにして見るも面白からう。昔から、我國では小野の小町、唐では楊貴妃ご申し、此二人は今まで最も名高い美人ご歌はれた女であつた。けれども予が此眼には、貴妃も小町も、決してそちほご美しうはなかつたらうご思はれる。いや若葉、そちの美しさは、まるで太陽のやうだ。有りごある世界の美人達も、そちの前へ出ては、恐らく日中の星も同然であらう。お、今の予は全くそちの光ご輝ご力によりて、生きて居るのぢや。さ、早う望をいふて、予が心を和けて呉れい。予は心配でならぬ。予は折角の楽しい今宵を夢のやうな心地で過したい。若葉、何が望ぢや、何が欲しいのぢや。

老女 若葉様。早うお望みなされませ。御前様があのやうに仰せられてで御座ります。

腰元乙 御前様が、あのやうに憧れてゐらせられる若葉様が、お羨しう御座ります。

腰元甲 私共の心までが、地の上からふわふわご浮き上りさうで御座ります。

大名 さ、早う所望して呉れ。予を始めごして、皆がそちの一言を、鶴の鳴聲のやうに待焦れてゐる。

若葉 私には何の望も御座りませぬ。

大名 何？ 何の望もない？ いや、それは嘘ぢや、そのやうなごころがあらう筈はない。それは大方、そちの謙遜であらう。そちは一體に餘りに謙遜し過ぎる。餘りに内氣すぎる。飽くごころ知らぬものも恐ろしいが、餘りに無慾なものも物足らぬ。少しは慾を出すがいい。予は確かに信ずる。そちの黙つて居るのは、屹度心の奥底に、何か思ひが結ほれて居るからぢや。いさぎよくその結ほれを解くがよい。もう此通り暖かな春ぢや。氷が解けて、櫻の花も見事に咲いた。思ひの結ほれも、解けねばならぬ時ぢや。さ、何も容捨をすることはない。思ひのまゝに心の結ほれをこいて見るがよい。ハ、ごうしても解けぬごあらば、予が解いてつかはさうか。●近習 御前様が、あのやうに仰せられます、あの厚い、暖い、お情には、ごの様に結ほれたお心の紐も、する／＼ご解けさうなものでは御座りませぬか。

家老 さようで御座るごも。いや／＼、あのお情には、例へ石ぢやご溶けずには居りますまい。ハハ、

大名 結んだものならば、結けずばなるまい。人間の心が如何程頑ななればごて、生命をかけての

情に、よも解けぬこころはあるまい。これ若葉、これほごまでに、予が心の限り、情けの極みをもつていふに、そちの心はまだ綻びぬこ申すか。予は誓ふ。神かけてそちの望を入れてつかはす。さうぞ、何でもよいから所望してくれ。そして心から楽しく笑ふてくれ。

若葉 本當にお誓ひなされますか。

大名 おゝ、誓ふこも、よくいふてくれた。八百萬の神にかけて誓ふ。予が國にかけて、五十萬石の領土にかけて、いや生命にかけて誓ふぞ。そちの如何なる望も屹度聽入てつかはす。さ、早くいふて見い。

若葉 本當にお誓ひなされました。皆様もおきよなされたで御座りませう。御前様はお誓ひなされました。私のごんな願でも、聽入れてやるこお誓ひなされました。さのやうな望も、遂げさせてやるこお誓ひなされました。私は嬉しう御座ります。(嬉しさうに笑ふ)

大名 おゝ若葉、そちは笑ふた。今宵始めて笑ふた。よく笑ふて呉れた。予は嬉しくてたまらぬ。

さ、酒をつけ、喜の酒を大盃に満々こつけ。予は心の底から、喜に酔はねばならぬ。(腰元酒をつぐ)

若葉 御前様は、神々にかけてお誓ひなされました。生命にかけてお誓ひなされました。おゝ私は

申します。私のたつた一つのお願を申します。

大名 おゝ、いふて見い。如何なる願でも、望でもいふて見い。何であらうこきいてつかはす。

家老 何だか空がちこ暗うなつて來たやうで御座ります。月に雲がかゝりました。

近習 物凄い雲が出てまゐりました。星でも泣きさうな夜になりました。(花がちり出す)

腰元乙 おや、今朝満開であつたと思ふた花が、もう散つてまゐりました。

腰元甲 何だか陰氣な風が吹いてまゐりました。

老女 怪しけな鳥の鳴聲がきこえます。何で御座りませう。梟か耳づくのやうで御座ります。まあいやな聲で御座りますこ。

大名 物凄い雲が出て月をかくさうが、陰氣な風が立つて花が散り出さうが、それが何だこいふのだ。怪しけな鳥が梟であらうこ、空の星が泣き出さうこ、それが予に何の關係があるこいふのだ。さ、若葉、一つの望こいふのをいふて見い。予はそれがききたい。予の胸はそれがきたくて、むづ／＼して居る。然し若葉、予の心はそちの有ゆる望を受入れるだけの力をもつてゐる。大きさも、深さも、落つきももつてゐる。遠慮せずにいふて見い。

若葉 それでは申しあげます。私のたつた一つの望を申します。

大名 お、いふて見い。遠慮なくいふて見い。一切の望をきいてつかはす。

若葉 私はお暇が頂きたう御座ります。(一同顔を見合せる)

大名 何? 予には、何だかよく聞えなんだ。もう一度いふて見い。予の耳は餘り緊張し過ぎて、よく聞えなんだ。

若葉 お暇が頂きたう御座ります。(一同いよくあきれる) 只今すぐに頂きたう御座ります。

大名 (からくく笑ひながら) これ若葉、そちは何を云ふのぢや、夢でも見て居るのか。ふざけてはよくない。

若葉 何もふざけはいたしません。夢を見て居るのでも御座りません。ちやんこ、正氣で御願ひいたして居るので御座ります。

大名 さ、さ、それが夢を見て居るのぢや。

若葉 夢を見て御いでなさるのは、御前様で御座ります。私では御座りません。

大名 何? 予が夢を何て居るに甲すのか(大笑する) だからこそ、そちはふざけて居るにいふのぢや。そちは矢張可愛い奴ぢや、アハ、、、、眞面目になつてふざけて居るわ。(笑ふ)

若葉 御前様は八百萬の神々にかけて御誓ひなされました。そしてごの様な願でも、御生命にかけ

て聽入れてやるに仰りました。皆様もそのお誓をきいてお出で、ござりました。私は只今限りお暇を頂きたうござりまする。

大名 これ若葉、さうぞそのやうな、たわけたこをいふて呉れるな。たこへそれがそちの願であつても、それ丈けは許すこはならぬ。さうかその他の事をいふて呉れ。その他の願あらば何でも聽入れてつかはす。

若葉 他に何の望も願もござりませぬ。さうぞお暇を頂かせて下さりませ。

大名 いやならぬ。それ丈けは、さうしてもならぬ。そちがなくなれば、折角生々して來た予が生活は闇ぢや。予が生命の輝きがなくなる。光がきえる。力が亡ぶ。そのやうなこがあつてなるものか。ならぬ、ならぬ。予が一命にかけてならぬ。お、そちは、予が始めて得た心の戀ではないか。それなのに、むざく、それを打すてしまへこは何だ。餘りに無情だ。餘りに冷酷だ。本當にそちを棄てよこいふならば、ありに有る一切が滅亡せよ。此世界も亡びよ。神も佛も、天も地も、わが此生命も、此場に於て亡びるがよい。お、何こいふ残酷だ。若葉、さうか、そのやうなこをいふてくれるな。予は悲しうなつた。泣きたうなつた。いや此が、泣かずに居られうか。予が一命にかけ、天地にかけての、魂の愛がまだ通らぬこいふの

か。このやうな情ないこそが、何處にあるか。おゝ月も泣け。星も泣け。天地の一切が、予の爲めに泣いてくれ(間) いゝや、そちは嘘をいふて、予をからかつて居るのであらう。嘘でなければ、そちは大方氣でも狂ふたのであらう。

若葉 いえ、私しは決して、氣が狂うては居りませぬ。このやうに確かで御座ります。

大名 氣が狂うたのでなくて、だしぬけに何で暇を呉れなご申すのぢや。五十萬石の城主が、誠に領士をかけ、生命をかけ、天地永却、ありさある一切をかけて愛して居るに係はらず、只一つの願として、直ちに暇をくれは何か。その様な無情、冷酷、たわけを申す女が、何處の世界にある。おゝ夢をさませ。正氣に歸れ。若葉、氣を確かにもつてくれ!

若葉 御前様こそごうぞ、お氣を確かに御持ち遊ばして下さりませ。

大名 若葉、そちは一體何をいふのぢや。そちは名譽いふものを知つて居るであらう。そちほごの立身出世をしたものが、此五十萬石の松平の領土内に、他に誰一人あるかを考へて見い。いや、日本全國はさて置いて、唐にも、天竺にも、一朝にしてそれだけの名譽を得た女は、さう澤山はないであらう。此福井の町の小さい呉服屋の娘が、五十萬石の城主の思ひ者として、一躍して世に時めかうさいふのではないか。そのやうなこそが並々の女に出来ると思ふか、そ

して榮耀榮華の限りを盡して、思ひのまゝに世を渡られるのみか、生家は町人風情から、一躍して千石の武士に取立てられようさいふに、一體何の不足があつてその様なこそをいふのぢや、若葉、さうか氣を落つけて、よく考へて見てくれ。そちは天にも地にも、たつた一人の予が心からの戀ではないか。さうかそのやうな願を取りけしてくれ。そして何か他の望をいつてくれ。

若葉 他には何の望も御座りませぬ。只御暇が頂きたう御座ります。

大名 予が全力全心を盡してもてなしても、そちはまだ足らぬご申すのか。

若葉 私しは餘りに澤山の着物を重ね過ぎて居ります。それがぬぎすてたいので御座ります。

大名 おゝ、暑いご申すのか。着物がぬぎたければ、いくらでも脱ぐがよい。その様なこそで、何も容捨するこそはない。一枚でも二枚でも、思ふだけ脱ぐがよい。

若葉 いゝえ、残らず脱ぎすてしまいたう御座ります。

大名 はてさて、これは異なこそを申す。此陰氣な風が吹く夜に、残らず着物を脱いだら、風を引くであらうに。

若葉 いゝえ、此美しい錦繡をすつかりぬぎすて、昔のまゝの、一枚の木綿に着かへたう御座り

ます。私は一層野に鳴く自由な雲雀が羨しう御座ります。思ひのままに飛まはる蝶々が慕はしう御座ります。御殿の奥に、美しい箱の中に鳴いて居ります鶯よりか、軒端に囀つて居る見すほらしい雀の方が、すつと羨しう御座ります。

大名 何を寢言を申すのぢや。そちはまだ屋敷の中の生活に慣れぬから、そのやうな氣狂ひじみたことを申すのであらうが、かうした生活が、誰にでも、容易に出来ると思ふか。

若葉 私はそれがきらひで御座ります。

大名 ハハ、馬鹿々々しい。さうぢや、そちはまだ、予がどれだけそちを愛して居るかが分らぬのぢや。それで、その様なことを申すのであらう。これ若葉、いつぞや、さうく、町の祭の時であつた。予はそちの姿を一目見てからいふもの、さうしても、そちを忘れることが出来ぬのぢや。そちの姿が、朝に晩に、予が眼の前にもちらついて、心の底に喰ひ込んで、予はさげすみ悶えつづけたであらう。そして色々手を盡して町中をさがし廻らせたが、今迄分らなんだ。予はその間、日日心の髓までやせ細る思ひがした。そしてやつこのことで、再びそちを見つけて得て、予はまるで天にも上る嬉しさを感じてゐる。さうぢや、予にかうしてそちの顔を見てゐるに、體中に大きな喜が、ぐいぐいと沸き騰つて、ちつとしては居られぬのぢや。出来る

ここに、此胸の厚い扉を引きあけて、そちに此心の底を見せてやりたい。お、此胸のさよめきの物凄さ。沸きたぎつた血の熱さ。予はもう氣が狂ひさうぢや。さ、若葉、此胸の響きをきいてくれ。此血のたぎりやうを見てくれ。(近よりて女を引よせやうとする)

若葉 (すまして押しつけながら) 御免なされませ。いやで御座ります。私は男といふものを、その様にこしらへた神様が恨めしう御座ります。呪はしう御座ります。様々の誘惑によりて、その様な情熱の、捕虜となり、犠牲になつた女が、これまでにどれだけの澤山にあつたことで御座りませう。烈しい情熱の囁き、華やかな虚榮の憧れ、それに囚へられた果に、悶え死に死んだ女の数は、數へ盡されぬ程あつたことで御座りませう。私は男といふものを呪ひます。神様が恨しう御座ります。私を女に生みつけた神様が憎う御座ります。

大名 ハハ、若葉、そちは珍らしい女ぢや。男を呪ひ居るな。面白い女ぢや。世の中の女と言へば、大抵は皆虚榮の塊に過ぎない。身を錦繡に包んで、金殿玉樓に起臥し、數多の腰元さにかしづかれて、榮耀榮華に樂しう暮さうといふのが、ありふれた女の最高の理想ぢや。その他には何の望もなければ、理想もない女の中に、そちはまた、求めて下賤の生活に安んじやうとする。何といふ珍らしい女ぢや。そのみか、繊弱い女の身でありながら、一身百年の苦樂を

まかせねばならぬ男を呪ひ、しかも自分の領主の面前に於て、男を罵つた。身分を辨へぬ愚かさをあはれむよりも、予は其意氣に感じ入つた。唯々諾々として従ふ女よりも、予はそのやうな女が好きぢや。面白い女ぢや。予は世界を敵にしても、そちをわが物とせずには置かぬ。そちは予が久しい間求めて居た本當の女ぢや。予はその前に頭を下ける、滅多に何人にも下げるここのない此頭を、そちの前にかうして恭しく垂れる。さうか地獄の火のやうに、物狂はしう燃えさかる此心の泉をくんでくれい。予が生命にかけ、天地にかけた戀を受けてくれ。そしていつまでも予を愛してくれ。永遠に、不變に、愛してくれ。これ、若葉。予はもう只今からそちの奴隷ぢや。何事もそちが命するが儘ぢや。さうぞ、この手をこつてくれ。この胸を抱いてくれ。此胸の炎を消してくれ。(女によりかゝらうとする)

若葉 厭で御座ります。おゝ、男に恐ろしい情慾の力を與へられた神様が恨めしい。何ぞいふ淺ましきであらう。

大名 そちがいやぢやと申せば、思はいよくつにつて、やるせない憧れ心が全身に漲る。おゝ胸が裂けさうぢや。五體が焦けさうぢや。黒焦になりさうぢや。さうかしてくれ。さうかしてくれ。(ばたばた仆れてうなる)

近習 (飛んで行つて助けながら) お氣をたしかなされませ。お氣をたしかに。(やゝ長き間)

おゝお氣がつかましたか。

大名 (起きる) あゝ苦しかつた。予はあのまゝ死んでゆくのかと思つた。いや、一層あの儘死んでゆけばよかつたに。地上の權力を一身に集めて、何一つ成らぬこなき身でありながら、只一人の女の心を動かすここの出来ぬ情けなさを思ふと、予は生きて居るのが餘りに心細うなつた、恥しうなつた。若葉、そちはさうしても予が心の泉を掬んでは呉れぬと申すのか、さうあつても、予を愛するここの出来ぬと申すか。

若葉 さうぞお暇が頂きたう御座ります。私はもう、一刻も此處に居るのが、いやで御座ります。

腰元甲 まあ、何ぞいふおつれないここので御座りませう。

腰元乙 あれほごまでに、御前様が仰せられるに、さうしても、色よい御返事をなされませぬからには、何かこれには譯がおりなされるのでは御ざりますまいか。

老女 本にさうかも知れませんが。若葉様、譯があれば、それを御前様に、お話しなされては如何で御ざりませう。

大名 さうぢや、譯があれば、それを話して見や。

若葉 譯なご何もありません。

大名 いや、屹度譯があるにちがひない。その譯をいふて見や。

家老 若葉殿、それがよろしう御ざります。早う仰せられたがよう御ざりませう。

近習 さ、さうござりませう。

若葉 私はいつか、鈴蘭の花を摘みに行つたことが御ざります。小さな透き通るやうな、眞白な鈴蘭の恰好した花が、草や樹の陰に隠れて、つゝましましやかに下を向いて開いて、それは、何ともいはれない、床しい香りをたてゝ居りました。美しい見事な薔にさゝれて、一日の榮えを誇りこする桃や櫻の花よりも、しよんほり山蔭に陰れて、しほむにまかされるあの鈴蘭の花の方が、私は餘程好きで御ざります。私はまた、いつも、泣き通して、涙にぬれたやうな輝きに光つてゐる星が好きでござります。ほんやりと光つて、いつも人間の世界に媚びてゐるやうな月よりか、魂の底から澄み切つて、いつ見ても少しも變らない、子供のやうな無邪氣な光に、キラキラと輝いてゐる星の方が好きでござります。私は鈴蘭になりたうござります。星になりたうござります。變らぬ色に、變らぬ光、それが私の魂でござります。

大名 又しても、そちはその様な阿呆らしいことを申す。ははあ、では何ぢやな、そちはまだ許嫁

の金三郎をやらが忘れられぬと見えるな。金三郎をやらには、何のよい處がある。さぞ世にも優れた善い男であらう。そちに、それほごまで思ひ込まれてゐる金三郎は、何と云ふかほう者ぢや。予はその男が一目見たい。そしてその男がどの様な美しい男であるかが知りたい。

(丁度此時中間が現はれる)

中間 (現はれて) 申し上げます。萬屋金兵衛の悴、金三郎申すもの、千代殿の儀につき、何かちかづく御前様へ申上げたいと申して、押して願ひ出まして御座りますが、如何取はからひませうや。

大名 なに、金三郎が参つた？、それは丁度よい。折角今遇ふて見たいと云ふて居た處ぢや。直ぐにこれへ申せ。

中間 畏りました(退場)

大名 (皮肉に) 若葉、そちの忘れられぬ男が今に此へまゐるぞ。さぞ嬉しいことであらう。予は金三郎に遇つて、そちの喜ぶ顔が見たい、ハハ、ハハ、

(中間、金三郎を連れて出る)

金三郎 私は萬屋金兵衛の悴金三郎申すものに御座ります。さうか御見知り置かれたう存じます

る。

大名 おゝそちが金三郎か。よい處へ參つた。予は丁度今、そちに遇ひたいと思ふて居た處ぢや。近うまゐれ、してそちの願は何ぢや。

金三郎 (進んで) 餘の儀にも御座りませぬが、それそこに居りまする吳服屋三衛門の娘千代は、八の時から、わたくしの許嫁に御座りまして、近々夫婦の盃をいたす都合にて、そろ／＼準備の折柄、三日許り前、千代が、乳母袖に連れられて、町はづれまで參り、用達をいたしての歸るさ、お屋敷の前を通りかゝりましたるごころ、御近習松田三之丞様には、殿の仰せにやらにて、厭がる千代を無理無躰に、御屋敷の中へ引張りこまれましたる次第、某始め一家の者共、誠に以て當惑いたし居る儀に御座りますれば、何卒特別の御慈悲をもちまして、千代を御下け渡し下されますやう、偏へに御願申上げまする次第で御座りまする。

大名 (知らぬ顔して) 金三郎ごやは、まごに善い男であるのう。いや全くそちはかほう者ぢや。予はそちが羨ましくてならぬ。

金三郎 何ぞ仰せられます。何卒、私共の心中御推察下されまして、偏に御慈悲の程を願はしう存じまする。

大名 (いよくほんやりして) いや全くよい男ぢや。予でさへうつこりこする程の美しさぢやもの。女が思ひ焦れるのも無理はないわい。若葉、そちは何をその様に知らぬ顔をして居る。何故何ぞか申してやらぬのぢや。(皮肉に) いや金三郎、そちはまごに立派な男ぢやぞ。その風采では、如何なる女も、そちの思ひの儘になるであらう。そちのその額の出方の面白さはさうぢや。鼻の格好のよいごころはさうぢや。ごの様なおかめの面ぢやきて、そちの見事さには及びもつくまいぞ。誠に以て福相ぢや。若い女の惚れるのも、全く無理はないわい。

金三郎 (むらく／＼して) 何ぞ仰せられます。

大名 (いよく／＼ふざけて) いや怒るな、／＼、おかめが怒つては、面白くないわい。

金三郎 (再びぢつこ我慢して) 千代の兩親を始めまして、一同悲歎にかきくれて居りますれば、特別の御慈悲によりて、御願ひの儀何卒御聽届け願はしう存じまする。

大名 (知らぬ顔して) 何ぢや、願ぢやご！ 一はそちの願をきく爲に、目通り許したのではない。只そちの面が見たかつたのぢや。退れ／＼、澤山ぢや、もうおかめに用はないわ。アハハ……
(笑ひこける)

金三郎 (嚴然として) すりや、さうしても、御願の次第御聽届けは下さりませぬか。

大名 馬鹿々々しい。何を言ひ居るのぢや。下れ、退れ、ハハ、もうそんな面は見たうないわ。

金三郎 (怒つて) これはしたり。如何に御領主様なればきて、濫りに人の妻を強奪なされた上にその亭主をおからかひまでなされるは、そりや一體どうなされたので御座ります。餘りの御無躰、餘りの御非道では御座りませぬか。

家老 何を申す、お上に向つて御無禮千萬な。容捨ならぬぞ (立つて押へようとする)

大名 ま、まて、暫くまて、

金三郎 無禮は何ぢや。お上をお諫め申すことも知らいで……

若葉 (制するやうに) 金三郎様、々々。

金三郎 恐れながら、わたくし覺悟いたす所あり、此所に一身を賭して申しあげます。抑一城の御主と申せば、常に下々の事情に御通曉なされ、専ら御仁政を布かせられ、一言一行、下人民共の模範とするに足るものを示させられてこそ、民も自ら上の御徳を仰ぎ奉り、懸命に其勤むべきを勵みて、やがて自然に御領土も繁昌致す申すもの、それに何ぞや、此頃の殿には日増しの御亂行、下人民共は、上へには専ら御威徳に恐れては居りますもの、蔭ではされたけか密かに御恨み申して居ります。

家老 何こいふ無禮ぢや、黙り居らう。苟も匹夫下賤の身を以て、お上に對して、一體何を申すのぢや。身の程を知れ!

近習 下れ、何をぐづくいたす。馬鹿者、退らぬを容捨はいたさぬぞ。

金三郎 馬鹿者は何だ。殿のお側に仕へて、日増しの御亂行お諫め申すこともせず、巧言令色、徒らに御機嫌ばかりを伺ひ、己が安きを貪ほつて、民の苦を知らず、其方達こそ、不忠不届の馬鹿者ではないか。恥知らずの犬共奴。

家老 (立ちかけて) 黙れ、何を無禮な!

大名 まあ、まて!

家老 ぢやと申して。

大名 はて、まあ、まてと申すに。

金三郎 如何に亂暴なる君なればきて――

家老 黙れと申すに、まだ黙らぬか。

金三郎 いや、黙れこいはば黙りもしよう。黙らうからには、妻を返せ、わが妻を返せ。二世も、三世も、變るな變るまいと誓ひ合つた、わが妻を返せ。如何に領主なればきて、濫りに人妻を

強奪し、暴力によりて歡樂の犠牲にするとは何たる無法ぢや。何たる非道ぢや。

大名 ハハ、金三郎、靜にせい、若葉は、もうそちの妻ではないわ。若葉は、そちが厭になつた
ご申し居るぞ。

金三郎 おゝ、千代、そ、それは眞實か(あはてる)

大名 おゝ眞實でなうて何させう。

若葉 金三郎様！ 金三郎様！

金三郎 (のほせあけて) この賣女奴、貴様はたつた二三日の間に、此おれを忘れをつたか。あれ
だけ堅く誓つたのは、皆偽であつたか。犬猫にも劣つた憎むべき悪魔奴。その態は一體何ぢや、
良人を賣り、親を賣つて、自ら獨り錦繡に身を包んで、賣女然とすまし込んだその様は何だ。
此恥知らずの畜生奴、人非人奴。

若葉 金三郎様、金三郎様、皆偽で御座んす、く

金三郎 えゝ、今になつて何をぬかす。貴様に限つて、その様な女ではないと思ひ居つたに。榮華
にまよひ、權勢に眼がくらんで、一旦良人定めた男をすてるとは何事だ。一體貴様は、その
様な性根の腐つた女であつたのか。えゝ、いま／＼しい。退け、其處さけ。(まつはらうとす

るのを振り切つて) その様な女にもう用はない。

若葉 それは餘りで御座んすく！

金三郎 人妻を奪ふものも、奪ふものなりや、奪はれて行くものも行くものぢや。えゝ、忌々しい。
くやしい。おゝ、氣がちがひさうぢや。(狂態を演ずる)

大名 ハハ、金三郎、そちや、氣が狂つたな。

金三郎 氣が狂はいで何させう。おゝ！く、此胸は、むしり取られるやうぢや、此畜生ども、此
賣女奴！ えゝくやしい！く、(號哭する。外、嵐狂ひ出す)

大名 若葉あれを見い、あれを見い、金三郎はもうそちをあのやうに厭うて居る。それでもまだ、
そちは金三郎が忘れられぬご申すか。

若葉 えゝ、忘れられませぬごもく！ 一旦良人極まつたからには、死んでも私しは、金三郎
の妻で御座ります。

大名 すりや、そちはごうしても、予がいやご申すか、えゝ忌々しい、剛情張奴！

若葉 えゝ、いやで御座ります。死んでもいやで御座ります。

金三郎 (顔をあけて) おゝお千代、よくいふた。よくいふた。それでこそ、貴様は此金三郎の妻

ぢや。可愛いわが妻ぢや (大名に向つて) おゝ善い氣味ぢや!

大名 不届者! もう容捨はならぬ。金三郎を引たてい。打首にせい。憎い奴!

中間 はゝッ! (繩をかける) 立て! (引立てようとする。嵐いよく狂ふ)

若葉 金三郎様、々々、(ご絶望して自殺する、侍女もかけつける)

大名 おゝ(驚き失望の體)

金三郎 おゝお千代、出かしたぞく。それでこそわが妻ぢや (きつこ大名をにらんで) おゝ氣

味がいゝわ、くゝ!

中間 (金三郎に) さ、行け!

金三郎 (暫く無念の思ひ入れにて引立てられる)

大名 (くやしさに) まて (刃をぬいて立ちいでる、きつこにらんで) 無禮者奴! (金三郎

を斬る、仆れる。櫻の花はけしく散る、狂的に) アハハ……散るわ、くゝ!面白う散るわ!

ハハ、。

—幕—

一九二一、四、八

勝利者 (一幕)

人物

主人	中井病院長	中井英太郎	四十歳
主人の妻	中井秀子	三十五歳	
主人の妹	宮村久子	三十歳	
主人の弟の妻	川崎千鶴子	二十七歳	
醫師	川上良三	二十八歳	
看護婦	西山きみ子		
女中	中み		
中井の亡兒	環		
看護婦長	井上		
場所	東京		
時代	現代		

勝利者

醫師の實驗室、兼應接室。

右側奥の棚の上には、實驗用の藥品種々。中央卓上に顕微鏡二つ、瓦斯管など。左方に、別に小さい圓い卓、その周圍に椅子。左方に書棚。出入口は左側。右側にあり。奥の方窓から廣い庭が見える。

主人 (頻りに顕微鏡にのぞいてゐる) さうも變だな。一つもない。あれで菌がない筈はないがなあ。さうしたのだろ、ひよつこするに間違つて居やしないかしら (ベルを鳴らす)

看護婦 (現はれて一寸會釋しながら) お呼びで御座いますか。

主人 (やゝあつて頭をあけて) あ、君、川上君はまだ來ないかね。

看護婦 先程お出でになりました。

主人 さうか、お手すきでしたら、一寸ゐらして下さい (禮をして、西山去りかけるを呼びこめて) それからね、マッチを一つ呉れ給へ。

看護婦 畏りました。(去る)

主人 (また顕微鏡をいぢりながら) かういふ奴が時々出て來るから、醫者も閉口だて。信じ切つてゐる奴に對して、顕微鏡が明白に裏切をするんだからな。實にをかしい。

(川上現はれ、怪みながら主人に近づく。)

川上 お早う御座います。大變いゝ天氣になりました。

主人 いやお早う、君、松本さいう女の患者ね、あれの便は間違つてやしないだらうね。さうも變なやうに思ふが。

川上 間違ふ筈はないと思ひますが。私が受取るなり、直ぐにこしらへて置いたのだから。

主人 成程、君は自分で受取つたさういふのですね。然し、さうも僕には合點が行かぬが、では君、プレバライトをこしらへてから見て見たかね。

川上 いや、それはまだ見はしませんでしたが、さうしたので御座いますか。

主人 君居ないよ、回蟲がある丈けで、十二指腸蟲も、アメーバも、何も居ないよ。あれで居ないさういふ、僕には一寸判断がつかねるがね。全く變だよ。君が品物をどれか取間違をしたのではないだらうね。さうしてもその判断が一番信じ易いがね。

川上 そんなさういふ筈は御座いません。

主人 然し、受まつてから、プレバライトにこしらへる迄に間違はない限り、患者の家で間違へる筈はないからね。それとも、君は看護婦から受取つたのでせう?

川上 さうです。

主人 ぢや、其間に間違があるかな。まあ君一つ見て見たまへ。

川上 そんな筈はないと思ひますがね。

(川上代つて顕微鏡に向ふ、此時主人の妻君現はれる)

妻 あなた、お邪魔でせうか。一寸お伺ひしたいのですが。

主人 何だ (椅子にかける)

妻 あの藤山さんのお坊ちやんが、おなくなりになつたさうですが、何かお悔に贈らなくてもいいでせうか。

主人 そんなことは、お前の考通りにしたらいいぢやないか。(ペンを出して何か書く)

妻 私はやつた方がいゝと思ひますけ、あそこで又叱られるこいやですから。(椅子にふれながらもぢくする)

主人 馬鹿な、何を言つてるんだ。

妻 でも、たつたさつきだつて、さうぢやありませんか。

主人 私のいふのはね、只形式主義がいけないといふ丈けだ。叱るが目的で、叱るのではない。因習的な形式さへ、打破して貰へば、それでいいのだ。逆も世間並のおつき合なんかにかまつて

るては、私は何もする暇はありはしないからね。下らぬことは、さうかお前が自分で相當の判断で片附けて貰ひたいといふのだ。徒らにやつたり取つたりしたつて、しようがないぢやないか。自分で心からさうしても贈りたいと思へば、子供の事なら、奇麗な花でも持つて行つてやるさか、何さかすればいいぢやないか。

妻 だつて、……

主人 氣に喰はぬといふのか、それぢや御勝手さ。

妻 そして後で、ぐづくおつしやらう云ふのですね。そんな變な物云ひをなさらずに、もう少しはつきり言つて頂きたいですね。(間)

川上 (先程から、物が云ひたくて機會をまつてゐたが、間を見るに) 矢張さうも居ないやうで御座いますね。さうで御座います。全く變で御座いますね。

主人 するに、君はさうしても、僕の誤診だといふのだね。

川上 いや、決してさう云ふ譯ぢやありませんが。さうもをかしいですな。(何か考へながら退場)
(女中さみ現はれる。齒が痛むので片頬を押へてゐる)

女中 (主人の處に進みながら) あの、旦那様、佐倉様からお電話で御座いまして、今日御診察が

願はれませうかつて。

主人 あゝよし、承知いたしましたつて。(女中の去りかけるのを追ふやうに) ミみはまだ齒醫者に行かないのか。(半ば獨語半ば妻君にいふやうに) 直ぐに行かしてやればいゝにああ。

女中 (ふり向いて) いゝゑ、直ぐでなくても、私しは宜しいので御座います。そんなに痛みはしません。お暇の時宜しう御座います。

妻 すぐお出でいふのに、自分から今日でなくていゝからつていふんですもの。

女中 (氣をかねたやうに) 私し本當にいつでもいゝので御座います。(去る)

主人 今日でなくていゝつたつて、痛むものを可哀想ぢやないか。一體、お前が、思ひやりのない云ひ振りをするからいけないさ。藤山の方なんぢは、急ぎはせぬぢやないか。死んだものは、今更急いだつて仕方はありません。

妻 あなたは人のこころ、すぐあゝして、同情なさる癖に、私に丈けはやさしい言葉なんか、一つだつてかけて下さりはしないんですね。(窓の處へゆく)

主人 (時々ペンを置いては) お前ミ、ミみは、ちがふぢやないか。お前は主人で、自分の思ふやうに、何でも出来るけき、ミみの方は、傭人だから、殊更こちらで、眼をかけてやるやうにし

なければ、いけぬぢやないか (立つて歩き出す)

妻 (やがて、振りかへつて) それは分つてゐます。けれど、こちらの都合の悪い時には、奉公してるからには、少し位我慢しなくちや、仕方がありませんわ。何も行かせぬさいふのではなし急病さいふ譯ではなし、自分から今直ぐでなくたつて、暇の時でいゝさいつてるんですもの。それに、今日は殊に日曜で、お客さんの多い日でもあるし、さうせ序に虫歯も手入をするさいふのだから、我慢が出来るなら、明日からにしたらよからうさ。いつてるんぢやありませんか。奉公人ミ家のものミ、同じに扱ふんか、私しは、やですからね。(あちら向いて、窓の外を見る。やがて次の話の中に椅子にかける)

主人 (立ミ、まつて) さうして、そんなひねくれた頭を、今時もつて居るのだい。奉公人なら、なほ更不自由のないやうに扱つてやるのが、當然ぢやないか。(また歩く) ミみなんぢは、用捨してるから、まだあんな物云ひをしてるけき、西洋さもだつたら、先方から要求して出て来るよ。

妻 あなたは、何かさいへば、西洋、西洋、ミ仰有るですけき、何も西洋の習慣ばかり尊重するにも及びますまい。日本には日本の習慣があります。この家には此家相當の習慣があります。何

でも彼でも、西洋風は、私きらいです。第一バタの匂いなんか有り難つて人間に、六な人間はないと思ひますわ。そんなに西洋が有りがたいなら、何故あなたは、自分の妻を、もつて大切にしようとはなさらないのです。

主人 まさかお前はやけるのではないだらうな。(かける)

妻 誰がやけなんかするものですか。(立つ)

主人 お前は、十五年も一處に居て、まだ私しの氣前が分らないんだね。(獨語のやうに) 人間同士の間つてもものは、矢張容易に分らぬものかな。(妻に) まあ考へても見るがよい。誰だつて自分の寶石なら、一點の瑕疵もないものを、持つて居たからうちやないか。何もわざわざお前にひびくするつもりでもなければ、ここさら、お前にひびくする譯は何もありはしないんだ。只慾が出るからだ。

妻 (ふき出して) ふ。お互に皆人間ですからね。人間に缺點のないものがあるものですか。

主人 缺點のないものはないからさ。その缺點を取去つて洗練しようとするのが、本當の人間ぢやないか。

妻 ぢや、あなたは、人ばかりせめなくて、御自分だつて、少しは反省なすつたら、いゝではあり

ませんか。自分の缺點や弱點は棚にあけこいて、人にばかり、美しかれこいふのは、あまり蟲が善過ぎますよ。あなたは一體する人間です。

主人 私は誰にだつて、すべきことしかしないのだ。

妻 ミころが私から見ると、あなたは他の女には、すべき以上のことをして、私に丈けは、つらくしてゐらつしやるのです。いゝゑ、私ばかりではない、誰でもさう云つてゐます。千鶴子さんだつて、久子さんだつて、兄さんは、他の人には非常にやさしくせに、さうして姉さん丈けには、あんなにひびいんだらうかつて、いつも云つてます。

主人 (立つて) 他所の女は、私には何の關係もないからね、(間) 私とお前は、一體さうして、かういつまでも、いがみ合はなければならぬんだらうな。

妻 私が年をまつて、あなたに、若い女が眼につき出したからでせう。昔はそんなことはありませんでした。

主人 何も年をまつたからつて、さうやさしみまでなくしてしまはなくもいゝだらう。

妻 お互にね。

川上 (別の入口から登場) 奥さん、先生はるらつしやいませんですか。

妻 今出て行きましたよ、病室の方ぢやありませんか。(間) またあの女の診察でせう、屹度。あの人は女の患者さ来るこ、一人で引受けるんですからね。(かける)

川上 ぢや一寸 (去らうとする)

妻 (呼びかけて) あゝ、川上さん、一寸待つて下さいね。私しあなたに、お願いがありますから、(川上のもぢくするのを見て) ま、おかけなさいよ。

川上 (仕方なしにかける) 何の御用でせうか。

妻 あの一寸診察して頂けますまいか。今日はさうしたものが、頭痛がして、仕方がないのですもの。

川上 奥様、また昂奮なされたのですね。餘り昂奮なすつちやいけませんよ。(手をこりながら)

少し脈がお速いやうですね、おやすみになつたらさうです。(診察は手丈いでやめる)

妻 だつて、つむりがいたくつて、さうしても休まれないんですもの。休まれるやうなら結構ですけ。昨夜だつて、三時間もやすんだでせうかね、殆んど一晩中さうして居ましたわ。

川上 それはいけませんね、御婦人の方には、睡眠不足は殊にいけません。早く年をこりますよ。

妻 さうですつてね。わたしこんなに、急に顔に皺がよつて來たり、髪の毛がさうさう抜けて來

たのは、屹度頭が悪いのミ睡眠不足のせいですよ。(間) それはさうさうね、川上さん、今夜青年會館へいらして下さいませんか。高山さんの獨奏會があるんですつて、私しあなたのも切符をこつこきましたわ。ね、御都合がお悪い?(丁寧なれぎ、やうやく親しみのある言葉)

川上 いゝゝ、都合なんか、ちつこも悪くはありませんけ、何時からでせうか。(煙草を吸ふ)

妻 六時からよ。此處から御一緒に行きませうね。お夕飯をいたゞいてから。

川上 先生は、今夜はるらつしやらないんですか。先生は音楽もお好きでせう?

妻 ゑゝ、ですけれ、今夜は黒川さん處で、月並の歌の會があるんですつて。先生は此節、歌に一生懸命ですからね。いつも、メスの歌ばかり作つて、ろくなもの一つも出來もしないくせに。

川上 でも、私は先生のお歌は好きですね。あそこに人間の生活、生きた血の流れた人間の生命さ、いふやうなものが、何だか私には、まさしく、眼に見えるやうな氣がします。私なんさには、よくは分りませんけ、普通一遍の、誰でもやる、享樂的の道樂じみた寢言なんかは、全くちがつた處があるやうに、私には思はれます。私は先生の歌を讀んでゐるこ、靜脈注射でもや

られるやうに、身内がすきんくしして來るのです。屹度先生のは、歌を作られるのでなくて歌が心から湧いてくるのでせう。

妻 まあ、川上さんはお上手ね。その調子で、誰でも持上げて、いつミなしに樂籠の中へ入れておしまひなさるんでせう。全く、あなたのその持上げ方のうまいのミ、も一つ咽喉の美しいのミには、若い女は皆まりこんでしまひますわ。(立ちかける)

川上 ハハ、奥様こそ、お上手ですね。私達のやうな青年は、その筆法でぐいぐいミゑられるミ、全くたまらなくなるんですからね。奥様はあの六ヶ敷い先生を、巧におあやつりになる丈けあつて、矢張腕がお凄いですね。

妻 ゑゑ、さうせさうですよ。よござんすわ。たんミおからかひなさいも、ぶんミして窓の處にゆく)

川上 あつミ、しまつた。(立つて女に近づき) お氣にさはつたら御免下さいね、ね。(悄然たる風で、ペコペコお辭儀をする。いかにも、その間に親しさがあるが、猶多少の禮儀をもつてる)

妻 (知らぬふりをして、窓の外を見てゐる)

看護婦 (登場、此様子を見て、一寸驚くが、やがて何氣なき風にて) あの奥様、宮村さんの奥様から、お電話で御座います。

妻 (一たび女の方を見やりて、やがて平然として) さう、奥の方ですか。

看護婦 あの電気室の側ので御座います。(會釋して去る)

妻 (すましこんで黙つて退場)

川上 (あミを見送つてつまらな相に悶える、やがて、思ひ出したやうに顯微鏡をのぞくかと思ふさいらくしさに) 畜生!

(主人登場、聴診器を振り廻して居る)

主人 (極めて軽い氣持で) 君、あの六號の婦人患者ね、あれは、もう駄目だね。まるで君、たわこごばかりいつてるぢやないか。

川上 矢張、先生にもさう見えますですか。何しろ熱が少しも下りませんからね。

主人 今もね、君。變なお化のやうな聲をしてね。「あすこから、白い着物を着た美しい人が招いてゐる。あれく招いてゐる。招いてゐる。あの手、あの手、(手まねをする) あの雪のやうな眞白な手、あれがだんく大きくなつて、今に私をその掌の上へ載せてゆくんだ。遠いく

光の國へ。あゝ、金色の光がく、ほら美しいく、早くあそこへ行きたい、く、な
んていつて、何かに憧がれて、うつろしたやうな眼つきをして、變な叫聲を君あけてるの
だよ。(かける)

川上 側で、それをきいてる御亭主は、たまらないでせうね。可哀想に。

主人 然し君、あゝいふ夫婦は幸福だね。亭主が自分の職業を一切抛擲して、あゝして、一週間も
十日も、自分一人で、妻君の看護をしてるんだからね。普通の亭主ちや、しようと思つても
容易に出来ることぢやないよ。第一、對社會の關係上、自分の仕事をあゝまで打すてることが
許されないからね。

川上 先生、さういへば、あの夫婦は、時々抱き合つて、ベソく泣いて居るやうです。私は氣の
毒になつて、さうかして治るものなら、治してやりたいと思つて居るのですけ、(間) まだ
一緒になつてから、間もなさ相ですね。(自動車の音がする。窓の處へ行つてのぞく)

主人 さうだらうね……。 (間) 人間はまあ男女が一處に近づ合つた、僅かの間が、一番幸福だら
うな。第一、お互の弱點なんかは、何も見えないし、感情の炎が、自然に燃えてゐ間は、全く
明盲だからな。(何かペンをこつて書く)

川上 全くですね。あんなのを見るに、今朝の新聞にあつたやうな、互に愛するここの出来ぬもの
は、不幸なものです。

主人 然し、愛して居ながら、互に愛するここの許されぬものも不幸だが、愛しなければならなく
て、而も實際愛する力の衰へてしまつたものは、一層悲惨だよ。例へば、石炭がらのやうにな
つて、もう燃える力がないんだからね。ハハ、。それはさうさ、君、さしつかへなかつた
ら、今晚また、青年會館へ連れて行つてやつてくれ給へね。僕は、例の會があつて行けないか
ら。

川上 奥さんですか。(ふりかへる)

主人 あゝ君、さうぞね。

川上 畏りました。(退場)

看護婦 (登場) あの電報で御座います。(差出す)

主人 (だまつて受取る。讀む。去らうとする。看護婦を呼びこめて) あ、新聞が來てゐたらね。

看護婦 は、(退場)

主人 (煙草を吸ひ出す、二三本マッチをする。間)

看護婦 (登場、新聞二三を出す) 今朝はまだ「讀賣」はまゐりませんで御座います。

主人 それからね。六號の患者の所へ行つてね。まだ通じはありませんかつて。(新聞を読む)

看護婦 かしこまりました。(退場)

(暫くするに、宮村夫人と川崎夫人が登場。宮村は主人の妹、川崎は弟の妻)

川崎 御免遊ばせ。

宮村 お兄様、御邪魔では御座いませんかしら。

主人 や、今朝は大變早いやうだね。まあ、おかけなさい。ごちらにも變りはありませんかね。

川崎 先達は結構なものを有りがたう存じました。大變おいしう御座いました。よくあんな柿が自宅になりましたですね。

主人 ハハ、、、東京ぢや、一寸めづらしいですね。去年は、もつと澤山なつたが、何しろ今年は少くて、澁くはなかつたですか。

川崎 いゝえ、ちつとも。

主人 それはよかつた。まあおかけなさい。(二人かける) 宮村君はさうしてゐるかね。相變らず勉強してゐるの。自動車だつたかね、發動機だつたかね、研究は……………

宮村 はい、發動機の方で御座います。何しろ時間が短いからさういつて、一生懸命になつて居ります。

主人 それは結構ぢや。人間は何にでも、一生懸命にならねばいかん。なま半途のこゝをやつてるのが一番駄目だ。(川崎夫人にむいて) 君のさこの糖尿病の研究はさうだね。矢張食後の運動はいゝかね。

川崎 はあ、ありがたう御座います。三十分宛でも、運動した時には、矢張糖がないさうで御座います。

主人 成程。それはまあいゝ、こゝぢや。(間) 論功行賞があつたやうですね。おめでたう。

川崎 でも、何だか、自分の下のものが、金鷄勳章を貰つて、自分が貰へないさういつて、不平を言つてますけぢ。

主人 間が悪いさね。さうも仕方はないですよ。

宮村 あのお姉様はごちらで御座いますか。

主人 さあ、さゝに居るかね。二階にでもゐるかも知らないね。

川崎 お姉様は近頃お體でも悪いのではありませんか。ちつともお見えになりませんが。

主人 誰が？、秀子が、知らないね。そんなことは、別に言はないやうだが、例によつて例の如し。さ。ハハ、（軽く笑ふ）

宮村 お兄様は随分冷淡ですね、お姉様に對して。

主人 さうかも知れない、かも知れない。けれど、然し、私は少し變人だからね、ハハ、（間）
何しろ、私の世界は、秀子の世界は、大分ちがつてるやうだから、我慢して貰はにや。それが理解出来なきや、もう何とも仕方ないね。

宮村 それはさうでせうけき、何しろ、只一人の環さんを、あれ迄にして、亡くしてしまはれたのですから、嘸お寂しいだらうと思ひますわ。

主人 いや、淋しいのは御互だ。それは、母親には、殊の外淋しいにはちがひないけれど、今更何といつても仕方はないし、出る丈け早く諦めて、人間として、自分のすべき務丈けを、果すより外はないだらうからね。

川崎 でも、お兄様は、もう少しお姉様を、慰めてお上げになつたら如何です？

主人 然し、わたしには、別の仕事があり除る程ありますからね。（立つて試験管を、アルコールランプにかける）

宮村 さういつて、餘り放つてお置きになるは、悪いことはしないでせうか。

川崎 淋しいくの極で、それをいやさうにして、もしや横道へでも、はいられるやうなことがありませんか、……………

主人 いけないから、取締を嚴重にして、川上なご一處に、出歩かせずに、そこへ行くにも、私について歩け、さいふのですね。いや、御忠告ありがたう。然し、秀子も相當の年ではあるし、さう不體裁なこともしやしないだらう。殊にあれの父親は、嚴重な武士教育をやつたのだからね。

川崎 それはさうにちがひありませんけれど、物は度を過ぎますからね。

主人 でも、人間は、お互に自由、殊に心の自由を束縛する譯には行かぬからね。

宮村 だつて、自由、自由つて、あんまり滅茶苦茶に自由を追求するは、秩序も何もなくなつてしまはしますまいか、こんなことを云ふは、お怒りになるか知りませんが、お姉様は、今危険な境目に立つて、居らつしやりはしないかと思ひますわ。何しろ……………

主人 川上ご一處に、始終出歩くことを言ふのだらう？ あれなら、私の方で許してあるのだ。いや、寧ろ私から川上にたのんであるのだ。私は、秀子の案内役はして居れぬからね。

まだく、あんな方に云ふに、驚かれるかも知れぬから、私が寧ろ内證にさせてありますよ。この二三年間は、方々を一緒に旅行させてさへありますよ。鎌倉でも、鹽原でも、日光でも、信州でも。松島へは、三人一緒にいつたけよ、どこでも、皆川上と秀子と、一緒に泊りがけで旅行させてありますよ。何もさう驚くことはありませんよ。私はちやんこ、二人を信じてありますよ。(又顕微鏡をのぞき出す)

宮村 (驚いたやうな顔をする)

川崎 でもねえ。(宮村に云ふ)

(此時女中茶をもつて来る、三人いゝ頃へのむ。間)

主人 (時々頭をあけては物をいふ) そりやね、二人が、其以前から、或程度まで、思ひ合つてゐたことも、私は知つてゐるさ。けれども、思合つていけないといつたところで、仕方もないし、それをせきこめたところで、思つてゐるものは仕方はないさ。私は只信じて、成行にまかせさ。第一、戀なんてものが、さう容易に實現されるものでもなければ、女は一旦男に屈服するに、もうそれきりで、男は忽ち幻滅を感じて、今までペコ／＼して居たものが、直きに女をひき眼にあはせ出すものだといふことは、秀子位の年になれば、もう分つてゐるさ。つまり理性

がめざめて感情が衰へて來てるから、容易に我を忘れるやうなことはないですよ。寧ろ危険なのは、無やみに心の自由を壓迫することだ、私は思ふね。

川崎 お兄様は、さうして、さう廣いお心で居らつしやるのでせう。

主人 廣いも狭いもないさ。人間は、只お互に信するより外に、幸福に生きる方法はないと思ふですね。(しばらく熱心に顕微鏡にのぞいてゐる)

宮村 でもね、私なんぢは、うちのをさうしても信用することが出来ませんわ。それに、近頃は、よく熟柿のやうになつて、遅くかへつたりしますが、そんな時は、癩にさわつて／＼、食ひつきでもしたいやうですわ。(ここに川崎にいふやうに) 女と男とはちがうんでせうか。

川崎 うちのだつてね。此間、私が鏡臺の抽出の中へ、お友達の兄さんの寫眞を入れたいんですよ。するに、それを見つけて出してね、それは／＼、自狀しろ／＼つて、散々攻めたてゐるんですよ。(間) さうするに、お姉さんは、全くお任せですね。

宮村 でも、幾ら、お兄さんがお許しになつたつてね。餘りぢやないでせうか。今の日本ぢやね。主人 (顕微鏡から、はなれて) ハハ、それが、あなた方に對して、治安を妨害するにでもいふのですかね。然しね、秀子はもう川上を知り過ぎてゐますよ。お互によく知らぬ間ではなくち